九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学考古学研究室の記録III ： 考古学研究室65周年記念

宮本，一夫
九州大学大学院人文科学研究院

高久，健二

金，宰賢

岡田，裕之

他

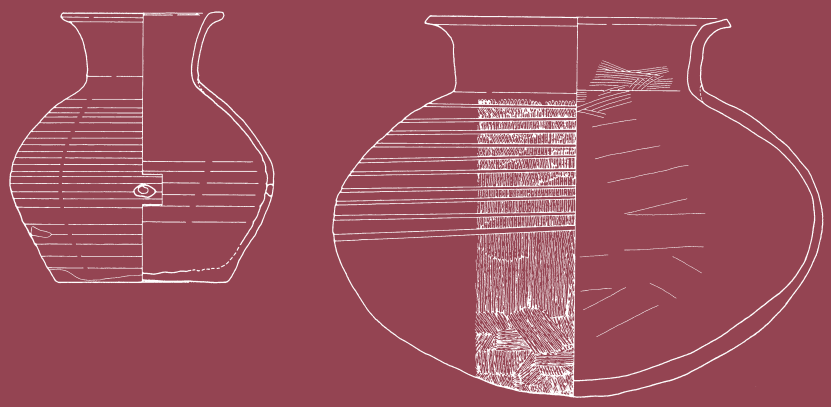
https://hdl.handle.net/2324/7170825

出版情報：2024-03-09. 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
バージョン：
権利関係：

九州大学考古学研究室の記録Ⅲ

― 考古学研究室65周年記念 ―

A Record of the Archaeological division, Kyushu University:
for the 65th Anniversary of the Archaeological division,
Kyushu University



九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

九州大学考古学研究室の記録Ⅲ

― 考古学研究室65周年記念 ―

2024年３月

九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

序

2018年９月に九州大学伊都キャンパス統合移転が完了し，大学院人文科学研究院歴史学部門考古学講座も箱崎キャンパスから伊都キャンパスのイースト１号館に移った。この年は，九州大学考古学研究室開設60周年の記念すべき年であった。その年の４月にイースト２号館に移転していた大学院比較社会文化研究院基層構造講座とともに，伊都キャンパスで九州大学考古学研究室として，新たな活動を始めたところである。

しかしながら，2020年に始まる新型コロナ感染症拡大により，教育・研究に大きな支障を来した。この間，授業や学会活動をオンラインで行い，この難局を乗り越えてきたところである。しかし，会話を含めた友人や教師との接触がない状態は，学生生活に大きな精神的な負担となったことであろう。とりわけ実習などはオンラインでは実施できず，実習発掘も延期せざるを得なかった。フィールド調査や共同調査を基とする考古学にとって，人との接触ができない状態は，学習・研究に大きな妨げとなっていた。

2023年５月に，新型コロナ感染症も感染症２類から５類へと移行することにより，本格的なポストコロナ時代が始まっている。考古学研究室の様々な活動も元に復しつつある。学会などはオンライン併用で開催し，より多くの参加者を得て活発な議論が行われているように思える。また，国際会議など海外との対面での交流も，韓国を中心に本格的に再開し始めてきている。

私事ではあるが，私は来年３月末を以て退職することとなった。『九州大学考古学研究室の記録Ⅱ―考古学研究室60周年記念―』では，私が九州大学に赴任した1994年より前までの記録を残した。九州大学に赴任した30年前は，大学院比較社会文化研究科が設立された年でもある。ここに『九州大学考古学研究室の記録Ⅲ―考古学研究室65周年記念―』と題して，この時期以降の助手や助教の方に当時の考古学研究室を語っていただいた。私もこの30年間のフィールド調査を振り返り，この30年間の考古学研究室の記録とするところである。この間，九州や中国・モンゴル・ロシア沿海州で発掘調査を実施することができ，研究成果をあげることができたと思っている。この30年間の皆様のご厚情に感謝するところである。

卒業生の皆様には，九州大学考古学研究室へ引き続きご支援・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げる。

2023年12月25日

九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門考古学講座
宮本　一夫

目　　次

序…… 宮本　一夫 …　1

第１章　九州大学在職30年（1994～2024年）―私的な野外調査の記録―
…… 宮本　一夫 …　5

第２章　九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座の初代助手として（1995年度）
…… 高久　健二 …　58

第３章　九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座の1996～2000年
…… 金　　宰賢 …　63

第４章　2002年４月から2004年３月までの考古学研究室
…… 岡田　裕之 …　68

第５章　2007年度の基層構造講座
…… 板倉　有大 …　75

第６章　2008～2011年度の基層構造講座
…… 端野　晋平 …　77

第７章　2009年６月から2010年３月の考古学研究室のこと
…… 村野　正景 …　88

第８章　箱崎末伊都初の考古学研究室
…… 松本　圭太 …　92

第９章　九州大学考古学研究室の記録（2019年２月以降）
１．新入生歓迎考古学談話会 …… 106
２．卒業論文・修士論文発表会 …… 106
３．九州大学考古学関係博士号学位取得者 …… 109
４．野外調査（2018年以降） …… 109
５．出版物 …… 110

第１章　九州大学在職30年（1994～2024年）
―私的な野外調査の記録―

宮　本　一　夫

はじめに

私は1994年４月１日に，愛媛大学法文学部助教授から九州大学文学部考古学講座助教授として赴任した。これは，前任者の岡村秀典助教授が京都大学人文科学研究所助教授に転出するのに伴うものであった。さらに，この年から，教養部解体に伴い教養部の一部と文学部文化史研究施設などを基にして，独立大学院比較社会文化研究科が成立した。この成立にあたって，文学部考古学講座は，大学院比較社会文化研究科に基層文明講座として協力講座という形で参画することになったため，助教授ポストを埋めておく必要があった。そのため，私の着任は1993年度後半期の急遽の人事となるとともに，愛媛大学在職中に大学院担当教員の審査を受けるための書類作りも行った。

愛媛大学では，1993年９月～10月の試験休み期間中に，愛媛県越智郡上浦町にある縄文晩期前葉の萩ノ岡貝塚を発掘していた。その整理作業を1994年３月の春休みに３週間集中して行い，さらに３月末には長女蕗が生まれるなど慌ただしい中で引っ越しを行い，九州大学へ赴任した。赴任後は，文学部学生さらに文学研究科に在籍していた大学院生，そして比較社会文化研究科の新たに入学した大学院生の教育を担当することとなった。萩ノ岡貝塚の報告書作成は，九州大学に持ち越すこととなり，大学院生の崔鐘赫さんの協力も得て，翌々年の1996年１月には報告書を出版することができた（愛媛県越智郡上浦町教育委員会・愛媛大学法文学部考古学研究室編1996『萩ノ岡貝塚』）。さらに，2000年の大学院重点化に伴い，文学部考古学講座は，文学部とともに大学院人文科学府と比較社会文化学府の二つの大学院を重担することとなる。こうした経緯については，別に文章で記録しているのでそれを参照していただきたい（宮本一夫2004「比較社会文化研究科・比較社会文化学府と私」『比文創立十周年記念文集』九州大学大学院比較社会学府・研究院，351-356頁）。

九州大学で在職していた30年間で様々な野外調査の機会を得ることができ，自己の研究を進展させることができた。ここでは，そうした野外調査の記録を残すことにより，この30年の九州大学考古学研究室の記録の一端とすることにしたい。

１．唐津市久里双水古墳発掘調査（1994年７月19日～９月１日）

唐津市は，東亜考古学会の調査や日仏合同調査（岡崎敬編1982『末盧国』六興出版），また横山浩一教授による宇木汲田貝塚の発掘調査（宮本一夫編2021『宇木汲田貝塚―1966・1984年発掘調査の再整理調査報告書―』）など，九州大学考古学研究室には古くからなじみの深い場所で

あった。なによりも壱岐・対馬を経て朝鮮半島に最も近い場所として，常に対外交流史において注目されていた地域である。1994年には，西谷正教授が久里双水古墳学術調査委員会の委員長に就任され，九州大学考古学研究室と唐津市教育委員会との共同発掘調査を実施することとなった。私は，愛媛大学在職中に，同じ古墳時代前期の愛媛県今治市大西町の妙見山1号墳の主体部の発掘を担当する機会を得ていたので（愛媛県今治市教育委員会・愛媛大学考古学研究室2008『愛媛県今治市大西町妙見山１号墳』），久里双水古墳の主体部の調査にも参加することとなった。

九州大学考古学研究室は，1994年７月19日から９月１日まで発掘調査に参加した。７月19日の初日は，それまで行っていた九州大学考古学研究室・釜山大学校考古学研究室第８回合同研究会の見学会の途中に，唐津で下車する形で慌ただしく始まっている。また，７月23・24日には第１回九州考古学会・嶺南考古学会合同学会へも運営・参加している。この間，学部生と大学院生とともに，実質，現場主任は私という形で行った。助手の中園聡さんは，西谷正先生とともに中国の新疆への調査旅行に出かけており，助教授と学生が主体で発掘調査を行った。学生諸君と私の間で，博士課程学生であった重藤輝行さんが活躍してくれた。

この調査では，墳裾を確定して墳丘の規模と形態を確認すること，さらに墳丘に流れ落ちた土器から年代を確定すること，そして主体部の構造と副葬品を明らかにすることを目的とした。これにより，全長約90m，後円部長47mの段築のない前方後円墳であることが明らかとなった。年代は，二重口縁壺から布留０式から布留1式にかけてのものと考えられた。竪穴式石室は比較的小型で，石室内面には鮮やかなベンガラが塗られていたことが鮮明に思い出される。そして，粘土床の形態から舟形木棺が安置されていたことが判明した。木棺内部からは盤龍鏡が出土したが，私は第１発見者の恩恵を被った。前期古墳の鏡を掘り出したのは妙見山1号墳２号石室の半肉彫獣帯鏡以来で，発見時に身震いをするように感動したことを覚えている。

発掘報告書は，発掘後10年以上経って出版することとなったが，参加した学部学生であった辻田淳一郎さんや岡田裕之さんの論考を加えて発刊することができた（唐津市教育委員会2009『久里双水古墳』唐津市文化財調査報告書　第95集）。

同じ年，西谷正教授代表の科学研究費（基盤研究（A）（２））『東アジアにおける支石墓の総合的研究』（1994～1996年）が採択された。この科学研究費は，採択前から始まっていた支石墓

図１　唐津市久里双水古墳の発掘調査

研究会に基づくものであった。この年から３年間で８回の研究会を行っている。また，科学研究費に基づき，初年度は長崎県西彼杵郡西海町天久保支石墓を調査対象とした。1994年10月に３日間事前調査を行い，本調査は1995年２月27日～３月20日に行った。発掘調査は，助手の中園聡さんに任せ，私は最初と最後のみ発掘指導に当たった。この調査は，３号支石墓の石棺墓内から15点の管玉が出土するという調査成果となった（九州大学文学部考古学研究室1997「長崎県・天久保支石墓の調査」『東アジアにおける支石墓の総合的研究』）。発掘調査後の整理調査は，私が指導して行った。

２．中国湖北省陰湘城遺跡第１回発掘調査（1995年４月14日～５月14日）

1995年春に「文明のクロスロード・福岡」地域文化フォーラム主催の日中共同発掘調査に参加した。1991年に中国の考古渉外工作管理弁法が改正され，外国人も中国の研究機関との共同発掘調査という形で発掘調査が可能となった。この調査は，国務院の特別許可を得た、日本としては戦後最初の発掘調査となった。これは，前任者である京都大学人文科学研究所の岡村秀典さんが中心となってまとめたもので，1995年１月に湖北省荊州博物館と陰湘城遺跡共同発掘調査の正式な議定書を取り交わした。岡村さんは，九州大学文学部考古学研究室の私の前任者であるが，京都大学の２年先輩であるとともに，学生時代以来，金文研究会などにともに参加して中国考古学を学んできた間柄である。

日本側の本隊は，1995年４月14日から５月14日までの１ヶ月間参加した。日本側は岡村さんと私，そして福岡市教育委員会から３名の調査技師，そして測量のために朝日航洋（株）の１名の測量技師である。私の発掘調査への実際の参加は，４月15日～５月５日までである。荊州のホテルに宿泊して，片道１時間の車とその後40分歩いてやっとで遺跡に達するものであったが，初めての中国での発掘はすべてが新鮮なものであるとともに，地元の農民の生活に触れることができた。荊州博物館は張緒球館長が隊長であったが，その他の館員たちは地元の農家に宿泊し，約２ヶ月間の発掘を行っていた。参加していた館員の何駑さんは，後に社会科学院考古研究所に移り，陶寺遺跡の調査隊長となったが，この時期から交友が始まった。この陰湘城遺跡第1回発掘調査では，大渓文化の環濠の上に，屈家嶺文化期の城壁と環濠からなる城址遺跡が存在することが判明した（岡村秀典1995「湖北省陰湘城址の日中共同調査―城郭集落の源流を掘る―」『福岡からアジアへ３　環濠集落の源流を探る』西日本新聞社）。後発の西谷正先生や都出比呂志先生らの視察団とともに，５月６日～11日まで，湖北省の陰湘城や石家河遺跡を始めとし，湖南省の新石器時代の城址遺跡の見学を行った。初めての中国での発掘調査とともに，長江中流域の屈家嶺文化

図２　湖北省陰湘城遺跡1995年の発掘調査

から石家河文化の城址遺跡の見学は，この地域の新石器文化を理解する上で大いに参考となった。

３．内蒙古王墓山坡上遺跡の発掘調査（1995年８月４日～９月４日）

1994年来，内蒙古文物考古研究所との協議により，文物局の許可を得て，内蒙古の涼城県岱海周辺における先史遺跡の共同発掘調査を実施することが可能となった。秋山進午（大手前女子大学）先生を代表とする科学研究費（国際共同研究）「遊牧民族文化形成と発展過程」による共同発掘調査である。日本側の調査グループは，1990年から３年間，遼寧省文物考古研究所との共同研究で遺跡の測量調査や遺物実測調査を実施してきた（秋山進午・郭大順編1995『東北アジアの考古学的研究』同朋舎出版）。その共同研究を踏まえて，農耕社会と牧畜社会の耕作地帯である内蒙古の調査を行うことにした。内蒙古との共同調査は，私も主体的に協議段階から関わっており，自身の研究課題とも重なり，私にとって重要な発掘調査となった。共同研究の中国側代表は，北方青銅器研究の大家である内蒙古文物考古研究所長の田広金さんである。

調査開始前には，北京からミニバスで，河北省の石家荘を経て，陽高漢墓，山西省の雲崗石窟を見学して，内蒙古の老虎山工作站にたどり着いた。この間，燕山山脈を超え，草原地帯への地形変化を知ることができ，農耕社会と遊牧社会の交錯地帯を肌で感じることができた。

1995年の調査は，岱海周辺の仰韶文化後期の集落遺跡である王墓山坡上遺跡を調査することとなった。日本隊は，8月４日～９月４日まで発掘調査に参加し，雨天以外は休日のない本格的な発掘調査である。遼寧省での共同調査以来のチームである秋山進午先生，東京大学大貫静夫さん，

図３　内蒙古王墓山坡上遺跡の発掘調査

泉屋博古館廣川守さん，天理参考館小田木治太郎さんらが参加した。岱海東側の老虎山に工作站があり，ここを宿舎として車で２時間かけて現場へ通う日々が続いた。山腹の砂地土壌で掘りやすいが，傾斜地であるため層位の確認にやや手間取ったものの，多くの住居址を検出することができた。私と大貫さんらは，それぞれ検出した住居址を選び，現地作業員を使い掘りあげることとした。大貫さんとは，遼東半島を中心とする中国東北部の土器研究において，学生以来の研究者仲間であり，いろいろと教えをいただいた。私は７号住居，11号住居，17号住居などを発掘し，華北の竪穴住居址を発掘できる貴重な経験を得た。雨天時などを利用し遺物整理も行い，中国語で発掘報告書を刊行した（内蒙古文物考古研究所・日本京都中国考古学研究会岱海地区考察隊「王墓山坡上遺址発掘報告」2001『岱海考古（二）―中日岱海地区考察研究報告集』科学出版社，146-205頁）。

発掘後，岡村秀典さんも加わり，９月９日にフフホトを出発し，ミニバスで寧夏へと踏査に向かった。途中，陰山山脈や黄河流域の砂漠地帯を眺めながらから，銀川まで１日半の旅である。銀川では寧夏自治区博物館や西夏王陵を見学した。本来，固原まで行き菅谷文則さんらが発掘していた北周墓を見学する予定であったが，銀川から先の道が通行不可とのことでやむなくフフホトへ帰ることとなる。帰途途中，オルドス博物館に立ち寄り見学した。フフホトへの帰着は，９月15日夕刻となる。しかし，寧夏やオルドス市での北方青銅器の見学は，私にとってその後の北方青銅器の研究において，大いに参考となった。また，オルドス市周辺の砂漠地帯が，いわゆるオルドス青銅器の不時の発見地点であることを理解できた。

図４　唐津市森田支石墓の発掘調査

４．唐津市森田支石墓の発掘調査（1995年10月４日～10月16日）

1994～1996年度科学研究費（基盤研究（A）(2)）『東アジアにおける支石墓の総合的研究』（西谷正教授代表）の２年目の発掘調査は，唐津市教育委員の援助の基，唐津で行うこととした。事前調査の末，1966年に日仏合同調査で発掘された森田支石墓を選定した。森田支石墓は，弥生早期の単純層の発見で有名な宇木汲田貝塚に隣接し，その段階の墓地と考えられる遺跡である。助手の中園聡さんはこの年が任期最後の年であったので，私が一人で発掘調査現場を取り仕切ることとした。発掘調査は1995年10月４日から10月16日までの約２週間行った。支石墓の測量と４・８号墓の支石墓を発掘した。副葬品は検出できなかったが，４号墓付近からは夜臼Ⅱ式の小児棺を発見し，年代の特定ができた。とともに，支石墓の下部構造について見識を深めることができた。この調査が，私にとっては支石墓調査の端緒となっている。なお，森田支石墓は，2014年に唐津松浦墳墓群として国史跡に指定されており，感慨深いものがある。

５．江蘇省草鞋山の発掘調査（1995年12月２日～12月13日）

1995年12月２日から12月13日まで，馬家濵文化中期の草鞋山遺跡の発掘調査に参加した。この調査は，宮崎大学藤原宏志先生と南京博物院との合同調査であり，その発掘途中での参加である。宮崎大学の柳沢一男さんは，遺跡の地形測量を平板測量で行われていた。私は，南京博物院の研究者とともに，現場で直に連結式の水田遺構を発掘することができ，その後の水稲農耕の研究の端緒となった。この調査を通じ，宮崎大学の宇田津徹朗さんと知り合いになり，その後の山東で

図５　江蘇省草鞋山遺跡の発掘調査

のプラント・オパール分析の研究をお願いすることになる。また，宿舎で藤原先生からイネに関する話を伺い，農耕に関する学問的な刺激をいただき，これまた，後に山東での農耕起源に関する研究の切掛となっている。

６．中国湖北省陰湘城遺跡第２次発掘調査（1996年４月10日～４月27日）

1996年３月から４月にかけて，陰湘城の２度目の発掘調査を実施した。今回は，前半が岡村秀典さん（京都大学人文科学研究所）と３名の埋蔵文化財職員による４名の先発隊と，私と２名の福岡市教育委員会職員の３名による後発隊に分かれて，発掘調査が実施された。中国隊は，前年に引き続き張緒球さんを始めとする荊州博物館の館員である。先発隊は３月８日に現地に入ったが，実質に調査が行われたのは，３月18日から４月３日までであった。

我々後発隊は，４月3日に現地に入り，４月５日から８日までは，先発隊と樋口隆康先生らとともに，宜昌城背溪遺跡や荊州周辺の紀南城や楚墓を見学した。４月９日は荊州博物館で打ち合わせの後，４月10日から４月27日まで発掘調査に参加した。今回新たに設定した発掘地点は，城址の西側半分のⅡ区からⅣ区までのトレンチである。昨年のⅠ区での発掘で東城壁の城壁と環濠が検出できていたので，Ⅳ区では西城壁と環濠を探ることを目的としたが，残念ながらそれらを検出できなかった。日本隊は東城壁の層位図作成など，検出された遺構の実測を主に担当した。私は，解析谷に設定したⅡ区の発掘に注目した。ここでは，江蘇省草鞋山遺跡と同じような連結土坑を検出し，水田などの稲作関連遺構である可能性を考えた。また，Ⅲ区では，屈家嶺文化の住居址4棟が発見された。基槽（溝）を持つ壁立ち住居である。中国南方の新石器時代の典型的な住居構造であるが，これを目の当りにできたことは，この地域の新石器時代の集落を考える上で，大きな参考となった（岡村秀典1996「湖北省陰湘城址1996年の調査」『福岡からアジアへ４　弥生文化の二つの道』西日本新聞社）。

図６　湖北省陰湘城遺跡1996年の発掘調査

７．内蒙古石虎山の発掘調査（1996年８月６日～８月29日）

1995～1998年度科学研究費補助金（国際共同研究）「遊牧民族文化形成と発展過程」（秋山進午代表）による内蒙古文物考古研究所との第２次共同発掘調査である。この度は，新石器時代前期の石虎山遺跡を選び，発掘調査を行った。私は，大学院生の濱名弘二くんと連れ立って発掘途中から参加し，1996年８月６日～８月29日まで発掘を行った。濱名くんは，昨年調査した王墓山坡上の遺物整理が主な仕事で，老虎山の工作站に張り付いていた。今回の調査では，日本側から昨年のメンバーに加え，天理大学の山本忠尚さん，京都大学大学院生の今井晃樹くんが参加し，大

所帯となる。

石虎山遺跡は，岱海南岸の斜面部に王墓山遺跡から西へ500m離れた遺跡である。集落は東西二つの丘陵の斜面部にⅠ，Ⅱ遺跡として二つ存在していた。この内，Ⅰ遺跡は環濠集落であり，Ⅰ集落がⅡ集落より古いと考えていた。しかし，北京大学の厳文明先生のご教授により，Ⅱ集落の土器の方がⅠ集落より古いものであることが明らかとなった（宮本一夫・小田木治太郎「石虎山遺址陶器研究」2001『岱海考古（二）―中日岱海地区考察研究報告集』科学出版社，344-359頁）。

図７　内蒙古石虎山遺跡の発掘調査

石虎山Ⅱ・Ⅰ期は，河北の後岡１期文化に相当するものであり，丸底の釜形土器が長江下流域から山東，さらに北方へと広がったものと考えられ，新石器時代前期の地域間関係に新たな見解を加えることとなった。さらに，Ⅰ集落の環濠には野生の水牛の骨が廃棄されており，環濠集落の廃棄の際に祭祀が行われていたと考えられた。また，これらの水牛は旧石器時代以来のものであり，新石器時代中期には死滅する。現世の華南地域にみられる水牛とは，遺伝形質を異にする

図８　糸島市岐志元村遺跡1997年の発掘調査

ものである（内蒙古文物考古研究所・日本京都中国考古学研究会岱海地区考察隊「王墓山坡上遺址発掘報告」2001『岱海考古（二）―中日岱海地区考察研究報告集』科学出版社，146-205頁）。

８．糸島市岐志元村遺跡の第１次発掘調査（1997年７月15日～７月26月）

1997～2001年度科学研究費補助金（特定領域研究（A）（１））「弥生早期の渡来人」（春成秀爾代表）の分担研究者として経費を頂き，調査を行った。当初，科研のテーマに沿って糸島市の新町支石墓の発掘調査を行うため，福岡県教育委員会文化課と交渉したがかなわず，新町遺跡に隣接する縄文貝塚である岐志元村遺跡を調査することとなった。比較社会文化研究科大学院生と文学部考古学研究室の学部生とともに，1997年７月15日～７月26日に行った。当時，岐志元村遺跡は海徳寺の西側の海側の畑に貝や縄文土器が散布していたところから，縄文貝塚の可能性が考えられ，古人骨が遺存している可能性も考えられたところから，発掘を行った。発掘に先立って，奈良文化財研究所の西村康さんに地中レーダー探査を行ってもらい，貝層が存在する可能性が高まった。しかし，発掘の結果，その貝層は近世に埋め立てられたもので，周辺に貝塚が存在していた可能性が判明した。遺物には，縄文後期の北久根山式，縄文晩期の黒川式，弥生中期の須玖式などが出土しており，周辺に縄文後期から弥生中期の遺跡が存在する可能性が考えられた。また，海徳寺の南側丘陵部に支石墓状の大きな蓋石が配置されていたところから，蓋石墓として発掘したところ，近世後半期の甕棺墓であることが判明した。また，その北側の丘陵部に二つのトレンチを設置した。一つのトレンチからは砂層中に屈葬された近世前期の古人骨が遺存していた。この墓は縄文後・晩期の包含層を切って作られており，縄文後・晩期の貝塚が存在することが期待され，翌年の調査に備えることとした（宮本一夫編2000『福岡県岐志元村遺跡―縄文貝塚・江戸墓地の発掘調査』平成12年度文部省科学研究費補助金特定領域研究Ａ（１）考古学資料集15）。

９．内蒙古飲牛溝墓地の発掘調査（1997年８月３日～８月16日）

1997年８月３日～８月16日まで飲牛溝墓地の発掘に参加する。これまでのメンバーに加え，国立歴史民俗博物館の西本豊弘さんも同行することとなった。西本さんは，昨年調査した石虎山遺跡出土の動物遺存体の分析が主な目的である。飲牛溝墓地は，毛慶溝墓地などのオルドス青銅器文化墓に続く戦国後期平行の墓地遺跡である。戦国趙の領域が北方青銅器文化圏におよび，青銅器時代墓が戦国墓に変容している。この共同発掘では小規模な木槨墓を掘ることができ，初めて戦国墓を掘ることができた。副葬品の帯鉤は中原系であり，鉄帯鉤であった（内蒙古文物考古研究所・日本京都中国考古学研究会岱海地区考察隊「飲牛溝墓地1997年発掘報告」2001『岱海考古

図９　内蒙古飲牛溝遺跡の発掘調査

（二）―中日岱海地区考察研究報告集』科学出版社，278-343頁）。岱海周辺が北方の牧畜文化と華北の農耕文化の交錯地帯であり，時期に応じて文化の主体が変化していくことを，発掘調査で目の当たりにすることができた。

飲牛溝の発掘に平行して，老虎山の工作站で昨年調査した石虎山遺跡の土器の実測を行った。８月末には渡米予定があるため，本隊に先んじて帰国したが，８月18日には帰国途中に北京に立ち寄った。ここで，北京大学の厳文明先生のお宅を訪れ，石虎山遺跡の土器について教えを請うた。ならびに，北京市考古研究所で鎮江営子遺跡の土器を観察するなど，石虎山遺跡の土器について調べることができた。

一方，本隊では，天理大学の山本忠尚さんが加わり，龍山文化（老虎山文化）期の石城である板城遺跡を８月19日～27日まで調査している（内蒙古文物考古研究所・日本京都中国考古学研究会岱海地区考察隊「板城遺址勘査与発掘報告」2001『岱海考古（二）―中日岱海地区考察研究報告集』科学出版社，206-277頁）。

10. 糸島市岐志元村遺跡の第２次発掘調査（1998年９月25日～10月11日）

飲牛溝の発掘を終えた直後の1997年８月28日から翌1998年７月27日までアメリカのハーバード大学エンチン研究所に研究員として受け入れていただいた。この留学期間は，家族と共にするものではあったが，私の研究生活の上で最も充実した日々となった。その後，８月21日～８月31日には将来の共同調査を打診するため甘粛省を訪れている。その後の９月25日～10月11日まで，岐

図10　糸島市岐志元村遺跡1998年の発掘調査

志元村遺跡の第２次調査を実施した。第１次調査と同様に，1997～2001年度科学研究費補助金（特定領域研究（A）（１））「弥生早期の渡来人」（春成秀爾代表）に基づくものである。第２次調査は，前年に発見した縄文文化層を発掘することを主目的とした。前年度に発見した近世初期の屈葬墓の地点を広げる形で発掘を行った。３層の古代～弥生前期，４層の縄文後晩期層の下位に，北久根山式の貝層が認められた。最下層はおそらく住居址と推定された。貝層の発掘は愛媛大学時代の江口貝塚や萩ノ岡貝塚の経験が生かされ，分層発掘に努めた。また，貝層の土層をすべて５～２mm メッシュのふるいにかけ，動物遺存体や貝などの自然遺物や植物遺体などの微細遺物の採集にも努めた。そのため，発掘班と篩班に分けて発掘を行ったが，篩班では水洗までして発掘中の短期間にすべての自然遺物を採集してくれた。お蔭で，発掘で見逃した結合式釣針を発見することができた。このほか，３層上面の２層を切る形で近世の座棺の古人骨が20体以上発見された。なお，整理調査の過程で，動物遺存体の分析を西本豊弘さんらにお願いするとともに，古人骨の分析は中橋孝博さんにお願いした。また，人骨の取り上げは田中良之さんや金宰賢さんが担当した。さらに人骨の年代測定は小池裕子さんらにお願いした。このように学内外の研究者を動員した学際的な研究となった（宮本一夫編2000『福岡県岐志元村遺跡―縄文貝塚・江戸墓地の発掘調査』平成12年度文部省科学研究費補助金特定領域研究Ａ（１）考古学資料集15）。

11. 佐賀県唐津市呼子町大友遺跡第５次調査（1999年９月１日～９月20日）

1997～2001年度科学研究費補助金（特定領域研究（A）（１））「弥生早期の渡来人」（春成秀爾代表）で調査した岐志元村貝塚では，「弥生早期の渡来人」のテーマに沿うような弥生早期の古人骨を得ることができなかった。新町遺跡と同じく海浜部に位置し，支石墓や箱式石棺墓からは良好な古人骨が発見されていた大友遺跡を調査することとした。1999年９月１日～９月20日までの発掘で，比較社会文化研究科大学院生と文学部学生の多くが参加してくれた。発掘区は，佐賀県教育委員会が行った1980年の第4次調査Ｂ区で発見された支石墓と1979年第３次調査区の間に設定した。表土層の大半が山からの崩落土であったため，表土層が深く，学生たちの手掘りではとても歯が立たないことが分かったため，急遽，重機を導入して表土層を剥ぎ取ってもらった。支石墓の蓋石を外す際にはクレーン車を出していただくなど，地元の業者さんには安価でクレーン車や重機を提供していただき，科研費の小規模な予算での発掘にとって，大いに助かった。

図11　唐津市大友遺跡1999年の発掘調査

こうして，予想もしなかった支石墓８基が見つかり，さらに多くの土坑墓，甕棺墓，石棺墓が見つかった。しかも，念願の弥生時代古人骨を発見することができた。古人骨の分析は中橋孝博さんにお願いした。支石

墓の古人骨は，形質人類学的には縄文系であることが分かり，新町支石墓と同じ結果が判明した。一方で，副葬小壺と支石墓の下部構造からその型式変化を考えることができた。森田支石墓の調査以来継続的に支石墓の発掘ができただけでなく，土坑墓，甕棺墓，箱式石棺墓といった弥生時代の墓制の変遷を考えることができた。また，整理過程では，古人骨の形質人類学的分析だけでなく，現在主流の研究になりつつある歯牙のミトコンドリアDNA分析を篠田謙一さん（現，科学博物館館長）に試みてもらった（宮本一夫編2001『佐賀県大友遺跡―弥生墓地の発掘調査―』平成12年度文部省科学研究費補助金特定領域研究Ａ（１）考古学資料集16）。

しかし，多くの遺構が出土したためすべてを掘りきることができず，翌年まで調査を継続することとした。予算が底をついたため，９月20日の夕刻には遺跡から立ち去り，福岡へ一度帰還した。福岡大学の七隈史学会で研究発表した後，再び少人数の学生とともに埋め戻しを行ったことが思い出される。

12. 佐賀県唐津市呼子町大友遺跡第６次調査（2000年９月25日～10月５日）

2000年９月25日～10月５日に，大友遺跡の再発掘を行った。2000年４月からは大学院重点化により，私は人文科学研究院に配属され，比較社会文化学府と人文科学府の二つの大学院と文学部の学部教育に当たることになった。そのため，この年の発掘から二つの大学院学生と文学部の学部生が発掘に参加してくれている。第６次調査では，第５次調査より山手側に調査区をいく分伸ばし，墓地の限界線を明確にした。こうして，調査区全体の墓葬を掘りきることができた。これにより，これまで調査されてきた大友墓地全体の墓制の変遷を明らかにすることができた。それによれば，支石墓，土壙墓（木棺墓），甕棺墓，石棺墓と漸移的に墓地内で墓葬が変化していくことが分かった。支石墓，土壙墓，甕棺墓が弥生早期から弥生中期と連続している。年代については，小池裕子さんらによって古人骨のコラーゲンからC14年代を探る試みを始めている。後にリザーバー効果の存在が明らかになったが，弥生早期の年代値がかなり古いものとなり，違和感を覚えた記憶がある。この年代値は，その後の歴博の弥生年代論の先駆けをなすものであった。また，副葬品がない石棺墓は，古人骨のC14年代から，弥生終末～古墳時代前期までであることが，おおよそ分かった。石棺墓には複数の人が埋葬されていたが，舟橋京子さんによって歯冠計

図12　唐津市大友遺跡2000年の発掘調査

測分析が行われ，それらが血縁家族であることが判明した（宮本一夫編2003『佐賀県大友遺跡Ⅱ―弥生墓地の発掘調査―』平成12年度文部省科学研究費補助金特定領域研究Ａ（１）考古学資料集30）。

なお，大友遺跡も2014年に唐津松浦墳墓群の一つとして国史跡に指定された。

13. 長崎県対馬市峰町吉田遺跡の発掘調査（2001年９月28日～10月８日）

2001年９月28日～10月８日に，平成13（2001）年度日本学術振興会科学研究費（基盤研究Ｂ(2)）「弥生時代成立期における渡来人問題の考古学的研究」（宮本一夫代表）によって，発掘を行った。大友遺跡で支石墓を発見できたところから，引き続き渡来人問題を対象として，弥生早期の遺跡を狙った。対馬において弥生早期の刻目突帯文土器が出土している吉田遺跡を再調査することを考えた。吉田遺跡は貝塚遺跡として知られており，あわよくば古人骨の発見も期待された。また，対馬は朝鮮半島に最も近く，当然半島の無文土器文化との接触が予想されたからである。しかし，残念ながら，刻目突帯文土器期の貝塚は，国道382号線敷設によって既に消滅していた。

1975年に国道で切られた丘陵の切通し部分で縄文中期から後期の包含層が確認されていた。そこで，その部分に近いと予想される丘陵上部にトレンチを設定して発掘を行った。幸いに，縄文の文化層を発見し，阿高式・南福寺式の縄文中期末～後期初頭であることが明らかとなった。また，朝鮮半島新石器時代晩期の二重口縁土器が発見され，縄文土器との共伴関係から，両地域の

図13　対馬市吉田遺跡の発掘調査

年代的平行関係を知る上で，重要な発見となった。また，中世後期15～16世紀の掘立柱建物が発見されたが，柱穴内からは中国産・朝鮮産陶磁器とともにスコータイ窯系タイ産陶磁が出土し，中世の広汎な流通網が明らかとなるとともに，交易関係において対馬が重要な位置を占めていたことが、考古学的に確認された。二つの発見は，当初の目的とはかけ離れたものであったが，重要な発見であり，発掘調査の醍醐味を感じた調査でもあった（宮本一夫編2004『対馬吉田遺跡―縄文時代遺跡の発掘調査―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室）。

14. ロシア沿海州クロウノフカ１遺跡第１次調査（2002年７月29日～８月７日）

熊本大学の甲元眞之さん代表の三菱財団の助成金で，前年度の2001年５月から熊本大学の小畑弘己さんとともにロシア科学アカデミー極東支部のヴォストレツォフさんと発掘の交渉を始めた。2001年10月には予備調査を行い，ウラジオストックから西北の内陸部ウスリー江支流のクロウノフカ川河畔に位置するクロウノフカ1遺跡を発掘調査対象地とすることとした。調査目的は，新石器時代における植物利用の問題であった。当時，沿海州の青銅器時代にキビ・アワの雑穀が存在することは明らかであったが，雑穀が新石器時代後期に遡る可能性があった。ともかく新石器時代遺跡を発掘し，フローテーションによって生業形態を復元することを目的とした。日本の縄文研究者にとっては，山内清男・佐藤達夫以来，シベリアや極東の新石器時代土器は関心の的であった。何はともあれ沿海州の新石器時代遺跡を発掘調査できることがうれしかったのである。10月の予備調査では，クロウノフカ１遺跡が川の攻撃面にあたっており崩落し消滅の危機にあった。また，川床から遺跡の断面がむき出しになっており，当時位置づけがまだ不確かであった新石器時代前期末の縄線文土器が見つかったのである。緊急調査的な要素とともに，本来の調査目的とは別に，珍しい縄線文土器を調査する必要性を感じたのである。さらに，クロウノフカ１遺跡は沿海州の初期鉄器時代のクロウノフカ文化の標式遺跡であった。個人的には，新石器時代の調査で成果を挙げなくとも，初期鉄器時代の調査ができることに大きな関心があった。

ロシア側はボストレツォフさん，日本側は甲元眞之さんが代表であった。熊本大学考古学研究室とロシア科学アカデミー極東支部考古学研究所との共同調査である。日本側は７月29日～８月７日まで参加し，小畑弘己さんが発掘調査の段取りを行い，私と大学院生の徳留大輔くん，東京大学大学院生の庄田慎矢さん，熊本大学留学生の呉パンソクさんが参加した。

７月29日に現場に入ったときには，既にロシア隊がクロウノフカ文化期の住居址を検出し掘り始めていた。その日が暑かったせいか，ロシアの女性はビキニ姿で発掘しており，目のやり場に困った記憶がある。この日から慣れないテント生活が始まる

図14　ロシア沿海州クロウノフカⅠ遺跡2002年の発掘調査

が，蚊の多さに悩まされる。昼間でも曇り空になると蚊が多く，実測中の顔をかみ始め，発掘の終わりには顔が腫れ上がっていた。また，夕方の川での水浴も蚊と水温の低さそして川の汚さに困惑した。どれも現代の文明生活に甘んじているからに過ぎない。先史学の研究者こそ自然に任せた生活をしなければならないと感じたものである。ともあれ，発掘では待望の初期鉄器時代の住居址を掘ることとした。火災住居で，土器がそのまま潰れた状態で残っていた。また，鉄器や管玉などの遺物とともに，カマドを発見した。このカマドは壁面を経て煙り出しがあるものであり，一字式オンドルとも呼ばれる暖房施設の最も古い型式であることが判明した（宮本一夫2020『東アジア初期鉄器時代の研究』雄山閣）。これが私にとって初期鉄器時代に興味を覚える端緒になった。一方で，地表下約１ｍ下にあった新石器時代文化層を掘り出し，住居址を検出するに至った（Komoto,M. & Obata, H. ed. 2004 *Krounovka 1 Site -Excavation in 2002 and 2003-*. Department of Archeology, Kumamoto University）。この段階で，調査終了時期が迫り，新石器時代文化層は，次年度に継続調査することとした。

なお，遺物整理には，同年12月に私と小畑さんらが参加し，私は土器を，小畑さんは石器を担当した。

15. 長崎県五島市小値賀島遺跡群第１次調査（2002年９月26日～10月９日）

2002年９月26日～10月９日で，神ノ崎遺跡，シャラジ遺跡，殿崎遺跡の発掘調査を行った。本調査も，平成14（2002）年度日本学術振興会科学研究費（基盤研究Ｂ（２））「弥生時代成立期に

図15　小値賀島遺跡群の第１次発掘調査

おける渡来人問題の考古学的研究」（宮本一夫代表）によるものである。小値賀島に隣接する宇久島には，宇久松原支石墓が存在し，小値賀島の神ノ崎遺跡にも支石墓らしい石蓋墓が存在していた。そこで，弥生早期の支石墓を求めて神ノ崎遺跡を発掘することとした。発掘の結果，遺物も出土せず，下部構造の形態からも支石墓と断定できない結果となった。また，弥生前期の甕棺墓が出土したシャラジ遺跡も発掘対象として発掘を行ったが，ここも弥生の甕棺は出土せず，中近世の遺構・遺物が出土した。とりわけ12～13世紀の貿易陶磁が多量に出土し，博多と寧波を結ぶ交易航路の中継地として賑わった片鱗を示していた。さらに，縄文中・後期の遺跡として知られる殿崎遺跡を調査した。これは，対岸の野崎島の野首遺跡において朝鮮半島系の土器が出土していたところから，前年の吉田遺跡の発掘成果の延長を期待したものである。殿崎遺跡では豊富な縄文時代の遺物が出土し，調査予定期間中に調査を終了できなかったため埋め戻しを行い，翌年にも調査を継続することとした（宮本一夫編2005『小値賀島遺跡群の調査―縄文時代・中世遺跡の発掘調査―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室）。

16. ロシア沿海州クロウノフカ遺跡第２次調査（2003年７月28日～８月６日）

今年度から2003年～2006年度科学研究費補助金基盤研究（A）「極東地域における前期完新世の環境変化と生業システムの適応に関する研究」（甲元眞之代表）が採択され，沿海州での発掘を継続することができた。今後，この共同調査については，九州大学からは私だけが参加することになる。

発掘調査は，新石器時代前期末の縄線文土器の住居址２基を検出し，４号住居址，５号住居址として掘りあげた。それぞれの住居址の地焼炉内の土を，セルグシェヴァが水洗選別したところ，アワ・キビが採取され大発見となった。炉の木炭の年代は紀元前3300年頃で，この段階に沿海州南部までアワ・キビが拡散していたという画期的な発見であり，共同調査の当初の目的を果たす金星となったのである（Komoto,M. & Obata,H. ed. 2004 *Krounovka 1 Site -Excavation in 2002 and 2003-*. Department of Archeology, Kumamoto University）。発掘後の整理調査で，土器型式からみて相対的に５号住居址が４号住居址より古いとともに，それに応じるようにキビの実の大きさが大きくなるといった農耕の進展が認められた。このアワ・キビの拡散時期には，土器型式と華北型農耕石器がともに拡散するものであり，私が東北アジア初期農耕化第１段階を提唱する根拠となった（宮本一夫2017『東北アジア初期農耕と弥生の起源』同成社）。なお，同年12月には，甲元眞之さん，小畑弘己さんらと，ウラジオストックのロシア科学アカデミー極東支部考古学研究所で出土遺物の整理を行った。

図16　ロシア沿海州クロウノフカⅠ遺跡2003年の発掘調査

17. 長崎県五島市小値賀島遺跡群（殿崎遺跡）第２次調査（2003年９月19日～９月30日）

昨年度に行った小値賀島遺跡群の調査の内，殿崎遺跡は調査の途中で終了した。平成15年（2003）度日本学術振興会科学研究費（基盤研究Ｂ（２））「弥生時代成立期における渡来人問題の考古学的研究」（宮本一夫代表）による殿崎遺跡第２次調査は，2003年９月19日～９月30日にかけて実施した。昨年度調査途中のＡ～Ｅトレンチ以外に，Ｆ・Ｇ・Ｈトレンチを設定した。これらのトレンチ調査では，大量の縄文中・後期の遺物が出土した。細かい分層発掘が難しかったところから，遺物の出土位置を全点記録しながら取り上げることにより，縄文中期の並木・阿高式から後期の南福寺式へと変化し，さらに小池原下層式・鐘崎式・北久根山式などの縁帯文土器へと変化しながら谷部に漸移的に堆積していった遺物の埋没過程を明らかにすることができた。また，土器や石器の総合的な検討から，縄文中期末から，このような島嶼部において漁撈活動を中心とした定住的な生活が始まることを示すことができた。このように，発掘調査の本来の目的であった弥生早期の支石墓や弥生前期の甕棺墓は発見できなかったが，縄文中・後期と中世における島嶼部の歴史的な位置づけが可能になったといえよう（宮本一夫編2005『小値賀島遺跡群の調査―縄文時代・中世遺跡の発掘調査―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室）。

図17　小値賀島殿崎遺跡の発掘調査

18. ロシア沿海州ザイサノフカ７遺跡（2004年７月29日～８月8日）

熊本大学考古学研究室とロシア科学アカデミー極東支部考古学研究所の共同調査３年目は，ポシェット湾に位置するザイサノフカ７遺跡を発掘対象とした。オクラドニコフらが調査した有名なザイサノフカ1遺跡から南へ約２km はなれたザイサノフカ7遺跡である。なお，ザイサノフカ１遺跡の資料は現在モスクワの歴史博物館に保管されており，2006年11月に小畑弘己さんとともにここを訪れ，土器・石器の実測を行い，報告書に掲載した（Komoto,M.& Obata H. ed. 2007 *Archeological Collections in the Posjet Bay -Archeological Monograph in the Southern Primorye, Russia-*. Department of Archeology, Kumamoto University）。

ザイサノフカ７遺跡は貝塚である。地表下僅か20cm のところで貝層が露出し，新石器時代の貝層を切ってヤンコフスキー文化期の墓葬が発見された。貝層内から出土する土器は，クロウノフカ遺跡の縄線文土器が沈線化したザイサノフカ文化期初期の土器である。型式学的には，ザイサノフカ１遺跡の土器がこのザイサノフカ７遺跡の土器に続く型式である。すなわち、クロウノフカ遺跡資料と比較することにより，新石器時代前期から中期への移行過程を明らかにすることができた。磨盤・磨棒などの華北型農耕石器は出土したが，貝層のフローテーションでは穀物種子は発見することができなかった。その年の12月に行った整理調査では，小畑弘己さんが初めてレプリカ SEM 法による土器圧痕分析を試み，ザイサノフカ７遺跡の土器底部からキビを発見した。クロウノフカ１時期以後も雑穀農耕の存在が明らかとなった。小畑さんは、この段階から本格的に土器圧痕分析をはじめ，石器屋さんから植物考古学者へ転身していく。なお，磨盤・磨棒

図18　ロシア沿海州ザイサノフカ7遺跡の発掘調査

の分析は，大学院生の上條信彦さんが進め，華北型農耕石器であることを明らかにした（Komoto,M. & Obata,H. ed. 2004 *Zaisanovka 7 Site -Excavation in 2004-*. Department of Archeology, Kumamoto University）。

19. 長崎県壱岐市カラカミ遺跡第１次調査（2004年９月20日～９月30日）

平成13（2001）～平成16（2004）年度日本学術振興会科学研究費（基盤研究Ｂ（２））「弥生時代成立期における渡来人問題の考古学的研究」（宮本一夫代表）では，弥生早期の渡来人問題を扱い，対馬や小値賀島で弥生早期の遺跡を求めて発掘調査を行ったが，残念ながら弥生早期の遺物・遺構は発見できなかった。しかしながら，島嶼部における対外交流の跡を示す遺構・遺物を発見し，先史時代や中世の対外交流史の一端を明らかにすることができた。そこで，本科学研究費の最後の年である2004年では，壱岐島を調査対象とすることとした。壱岐島では，これまで弥生早期の支石墓は発見されていなかったが，弥生時代には原の辻遺跡やカラカミ遺跡が対外交流を示す遺跡として知られていた。この二つの遺跡は，1951年～1965年まで，水野清一京都大学人文科学研究所教授を中心とする東亜考古学会が発掘を行っていたが，正式な報告書が出されていなかった。調査に参加されていた九州大学文学部考古学研究室の岡崎敬先生は，それらの発掘資料を京都大学人文科学研究所から九州大学文学部考古学研究室に1982年頃に移管されていた。しかし，残念なことに岡崎先生は退職後まもなく病没され，発掘資料はそのままになっていた。二つの遺跡の内，原の辻遺跡は長崎県教育委員会による発掘調査により，弥生時代の多重環濠の拠点集落であることが明らかとなっていた。一方で，カラカミ遺跡は楽浪土器や三韓土器の存在は知られていたが，遺跡の実態は不明であった。カラカミ遺跡の整理調査をするにあたって，層位や遺構の関係が東亜考古学会の調査日誌からは不明であった。そこで，遺跡の現況を確認するため，本科学研究費で小規模なトレンチ調査を実施することとした。この調査から前年度の2003年後期に赴任した辻田淳一郎さんも参加することとなり，考古学研究室の教員二人で，考古学実習を兼ねた考古学研究室の発掘が始まった。

1952年の東亜考古学会の発掘調査は，小川貝塚と辻屋敷貝塚の二地点で行われていた。本第一次調査では，小川貝塚の東亜考古学会調査地点の南側にトレンチを設定することとした。発掘調査は，2004年９月20日～９月30日である。この調査により，Ｖ字環濠の基底部を発見し，環濠内から弥生中期後葉から弥生終末期土器を発見した。この発見により，環濠がカラカミ遺跡の東側にも巡ることが明らかとなり，カラカミ遺跡も環濠集落であることが明らかとなった（宮本一夫編2005『弥生時代成立期における渡来人問

図19　壱岐市カラカミ遺跡第１次発掘調査

題の考古学的研究』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室)。

なお，小川貝塚は東亜考古学会発掘調査の第２地点であるが，2004年調査時点では第２地点の位置が誤って認識されており，実際には第２地点の南西側にトレンチを設定していた。本調査の成果により，カラカミ遺跡の再発掘を進める必要性を感じ，科学研究費を申請したところ，平成17（2005）～平成20（2010）年度日本学術振興会科学研究費（基盤研究Ｂ（２））「弥生時代における北部九州と朝鮮半島における交流史の考古学的研究」（宮本一夫代表）が採択された。これにより，東亜考古学会第２地点調査資料の再整理を進め，第２地点の発掘報告書を刊行することができた（宮本一夫編2008『壱岐カラカミ遺跡Ⅰ－カラカミ遺跡東亜考古学会第２地点の発掘調査－』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室)。

20. 中国山東省楊家圈遺跡のボーリング調査（2004年10月27日～31日）

2004～2007年度日本学術振興会科学研究費基盤研究（A）（海外学術調査）「日本水稲農耕の起源地に関する総合的研究」（宮本一夫代表）が採択された。無文土器文化や弥生文化に始まる畦畔水田がどこに起源するのかが問題の所在であった。中国新石器時代遺跡では，私も発掘調査に参加した草鞋山遺跡のように長江下流域において土坑連結型の水田は発見されていたが，畦畔水田は見つかっていなかった。私は，遼東半島の四平山遺跡の再整理（澄田正一・小野山節・宮本一夫編2008『遼東半島四平山摘石塚の研究』柳原出版）などを通じて，山東半島と遼東半島には強い結びつきがあり，この両地域間を通じて東北アジア初期農耕化第２段階と第３段階が存在するという仮説を考えていた（宮本一夫2017『東アジアの初期農耕と弥生の起源』同成社)。無文土器文化や弥生文化に見られる大陸系磨製石器の由来も、山東半島の東端の膠東半島にあるというのが仮説であった。畦畔水田も，大陸系磨製石器と同じくその発信源が膠東半島にあると考えていた。これらの仮説を実証するため，山東での野外調査の必要性を感じていた。本基盤研究では，九州大学人文科学研究院考古学研究室と山東大学東方考古研究センターと協定を結び，水田遺跡探査調査，膠東半島先史時代石器の悉皆的実測調査，黒陶の安定同位体比分析，古人骨の形質人類学的分析を行った（宮本一夫編2008『日本水稲農耕の起源地に関する総合的研究』)。この

図20　山東省棲霞県楊家圈遺跡2004年ボーリング調査

総合的研究では，九州大学比較社会文化研究院の小池裕子さん，中橋孝博さん，田中良之さんらにも参加してもらい，九州大学としての学際研究ができたものと思っている。

2004年の本科研費初年には，分担研究者の皆さんとともに山東地域，とりわけ膠東半島を中心に水田遺構を探索するための踏査を実施した。そこで選ばれたのが，山東省棲霞県楊家圏遺跡である。本遺跡は龍山文化期の紅焼土内からコメが出土した遺跡として知られ，龍山文化期にはイネが山東半島の東端まで達していたことが判明していた。その遺跡にはコメを生産した水田遺跡が存在する可能性が高いと考えられる。その可能性を探るため，科研費１年目の2004年10月27日～31日までの５日間楊家圏遺跡でのボーリング調査を行った。ボーリング調査は，日本側からプラント・オパール分析を担当した宮崎大学の宇田津徹朗さん，大学院生の濱名弘二・徳留大輔・上條信彦くんが参加した。宇田津さんとは草鞋山遺跡の発掘調査以来のお付き合いで，本調査に参加していただいた。遺跡の北側谷部からボーリング調査をしたが，コメのプラント・オパールは見つからず，遺跡南側谷部に移って諦めかけた時に，コメのプラント・オパールが見つかり，大喜びとなった（宮本一夫「農耕の起源を探る　イネの来た道」（歴史文化ライブラリー276）吉川弘文館）。仮説検証への光が差し始めたのである。

21．ロシア沿海州クラーク５遺跡の発掘調査（2005年７月30日～８月５日）

熊本大学考古学研究室とロシア科学アカデミー極東支部考古学研究所の共同発掘調査として最後に行ったのがクラーク５遺跡である。遺跡はボイスマン湾に面した貝塚であり，新石器時代

図21　ロシア沿海州クラーク５遺跡の発掘調査

早・前期のボイスマン貝塚とは対岸の岬基部に位置している。2005年７月30日から８月５日まで参加したが，この年は雨が多く，調査がはかどらなかった。小畑弘己さんなど熊本大学チームは既に１週間前に発掘に参加していたが，発掘ができたのは１日半と仕事にならない。この年初めて一人テントでの生活になったが，雨が多く，朝起きてみれば海辺に面して張ったテント近くまで水が来ていることもあった。

発掘調査は２ｍ×１ｍの小さなトレンチを三つしか設定できず，雨のため，結局は上層のヤンコフスキー文化層のみしか発掘ができなかった。上層のヤンコフスキー文化層の中には，下位層の新石器時代の貝塚層の遺物が混じっていた。そこでは新石器時代前期のボイスマン文化とクロウノフカ１（縄線文土器）時期以外，新石器時代後期土器が出土していた。この新石器時代後期土器は，東北朝鮮の西浦項第４期後半に平行し，ザイサノフカ１遺跡に継ぐ土器型式である。

このように，クロウノフカ１遺跡の調査以来，クラーク７遺跡までの調査で，沿海州南部の新石器時代後半期の土器編年を構築することができた（宮本一夫2017『東アジアの初期農耕と弥生の起源』同成社）。さらに，クラーク７遺跡のヤンコフスキー文化層の出土土器とクロウノフカ１遺跡の３号住居址資料は，沿海州南部の初期鉄器時代の土器編年構築にも役立った（宮本一夫2023『東アジア初期鉄器時代の研究』同成社）。何よりも，本共同調査では，この地域のアワ・キビ農耕がクロウノフカ１遺跡の縄線文土器段階まで遡ることが明らかとなり，国際的に注目される調査成果となった。

図22　壱岐市カラカミ遺跡第２次発掘調査

22. 長崎県壱岐市カラカミ遺跡第２次調査（2005年９月15日～９月30日）

2005年度日本学術振興会科学研究費（基盤研究Ｂ（２））「弥生時代における北部九州と朝鮮半島における交流史の考古学的研究」（宮本一夫代表）では，東亜考古学会が発掘した辻屋敷貝塚の第１地点の発掘調査を実施した。発掘調査は，2005年９月15日～９月30日まで実施した。

発掘調査では，第１地点と予想される地点に東西15m，幅２ｍのＢトレンチを設定した。旧来の地表面が現地表下50～60cm のところで発見されたが，この面が地山面と認識されていたため，長崎県教育委員会の範囲確認調査では，遺跡包含層が発見されていなかった。２層を剥いだ下面の３層から弥生時代包含層が始まり，第１地点が遺存していることが確認された。さらに，東亜考古学会第１地点のトレンチ跡を確認し，そのトレンチ跡を掘りきった。これにより，東亜考古学会の整理調査において，トレンチグリッドと現遺跡との対応が可能になった。Ｂトレンチ西端近くでは，トレンチ床面で焼土を発見し，炉跡の可能性が考えられ，住居址（２号住居址）の可能性が考えられた。また，最下層の５層は，混土貝層となっており，動物遺存体のみならず小麦など炭化種子も採集されたところから，５層すべての土壌を浮遊水洗選別した。このフローテーション分析には，長崎県原の辻遺跡調査事務所の設備を貸していただき，原の辻遺跡調査事務所で浮遊水洗選別を行った。一方，Ｂトレンチから１段下の畑にも東西に長いＡトレンチを設定した。従来の旧斜面を大きく削っており，包含層などは遺存していなかった。一部斜面側に住居址の可能性のある遺構が認められた（宮本一夫編2009『壱岐カラカミ遺跡Ⅱ－カラカミ遺跡東亜考古学会第1地点の発掘調査－』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室）。

23. 中国山東省楊家圈遺跡の試掘調査（2005年10月11日～10月15日）

山東大学東方考古研究センターとの共同研究２年目は，楊家圈遺跡の試掘調査を行った。前年度のボーリング調査で，地表下２ｍ以下でイネのプラント・オパール分析が見つかった部分が，水田の可能性があるかを探る試掘調査である。日本側は大学院生の徳留大輔・上條信彦くんと宮崎大学の宇田津徹朗さんと，水田の調査の第一人者である愛媛大学の田崎博之さんが参加した。5b 層以下がプラント・オパール分析の結果を含め，水田層である可能性が高まった。また，出

図23　山東省棲霞県楊家圈遺跡2005年試掘調査

土遺物からはそれらが龍山文化期のものであると判断された（宮本一夫編2008『日本水稲農耕の起源地に関する総合的研究』）。但し，これらの水田が畦畔水田であるかどうかは，全面的な発掘調査が必要であると判断された。この試掘調査の結果を受け，龍山文化期の水田遺跡である可能性が高まったところから，プラント・オパール分析の結果のみを中国で公開することとした（欒豊実・靳桂雲・王富強・宮本一夫・宇田津徹朗・田崎博之2007「山東棲霞県楊家圏遺址稲作遺存的調査和初歩研究」『考古』2007年12期，78-84頁）。

24. 長崎県壱岐市カラカミ遺跡第３次調査（2006年９月14日～９月28日）

2006年度日本学術振興会科学研究費（基盤研究Ｂ（２））「弥生時代における北部九州と朝鮮半島における交流史の考古学的研究」（宮本一夫代表）でカラカミ遺跡東亜考古学会第1地点のＢトレンチを継続調査した。前年度調査のＢトレンチの北側にトレンチを延ばし，東亜考古学会トレンチの全貌をつかむことを目的とした。トレンチの北側部分から包含層が南側に向かって斜面堆積していることが分かった。さらに，４層は厚い弥生後期の包含層であることが判明した。また，前年度に発見されていた混貝土層の５層を，土壌の水洗選別しながら掘り，須玖Ⅱ式の単純層であることが判明した。トレンチの北側では，１号住居址や４号住居址が検出された（宮本一夫編2009『壱岐カラカミ遺跡Ⅲ－カラカミ遺跡第1地点の発掘調査（2005～2008年）－』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室）。

図24　壱岐市カラカミ遺跡第３次発掘調査

図25　山東省日照市両城鎮ボーリング調査

25. 中国山東省両城鎮遺跡のボーリング調査（2006年10月３日～10月７日）

2004年の踏査で，ボーリング調査の候補として上がったのが山東省日照市両城鎮遺跡であった。両城鎮遺跡は龍山文化期の城址遺跡であるが，発掘調査のフローテーション調査で多量の炭化米が発見されていた。そこで，集落遺跡周辺に水田遺跡が存在する可能性があった。このボーリング調査を2006年10月３日～10月７日まで行った。地形から判断して水田が存在する可能性が高い３カ所をボーリング調査した。調査に参加したのは，宮崎大学の宇田津徹朗さんとともに，大学院生の徳留大輔・上條信彦・李作婷・松本圭太くんであった。この中で，両城鎮遺跡の北東部の低地で多量のイネのプラント・オパールが発見された（宇田津徹朗2016「両城鎮遺址農業生産遺存探査」『東方考古』第13輯，113-133頁）。

26. 長崎県壱岐市カラカミ遺跡第４次調査（2007年９月13日～９月26日）

平成18（2006）年度日本学術振興会科学研究費（基盤研究Ｂ（２））「弥生時代における北部九州と朝鮮半島における交流史の考古学的研究」（宮本一夫代表）で，カラカミ遺跡東亜考古学会第1地点の発掘を継続し，2007年９月13日～９月26日まで行った。前年度に発見した１号住居址を含め，東亜考古学会第１地点トレンチを目安にＢトレンチを拡大しながら層位的に調査を進めた。これにより，第１トレンチの一部に須玖Ⅱ式を主体とする１号住居址が発見された。４層は厚い弥生後期の包含層であることが判明した。また，混貝土層の５層について，土壌の水洗選別をしながら掘りきった。しかし，すべての調査区を掘りきることができず，次年度に調査を残すこととした（宮本一夫編2009『壱岐カラカミ遺跡Ⅲ－カラカミ遺跡第１地点の発掘調査（2005～2008年）－』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室）。

27. 中国山東省両城鎮遺跡の試掘調査（2007年11月８日～11月13日）

前年度のボーリング調査によって，イネのプラント・オパールが多量に見つかった地点を，試掘調査することとなった。発掘主体は山東大学側であり，試掘調査は11月６日から始まっていた。日本側は愛媛大学の田﨑博之さん，宮崎大学の宇田津徹朗さん，大学院生の上條信彦・白石渓冴

図26　壱岐市カラカミ遺跡第４次発掘調査

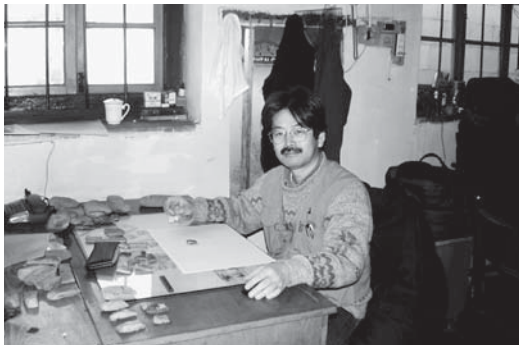
くんが11月８日から参加し，11月13日に終了した。試掘調査の結果，楊家圏遺跡のような水田の堆積層は確認されず，龍山文化期の遺物を包含する堆積層が多層に渡っていることが確認された。発掘調査そのものは，龍山文化の遺物を発掘できたところから，大変楽しいものであった。遺物整理は，翌年の2008年２月に谷直子さんをはじめとして多くの大学院生が参加して行い，実測を完了している。しかし，発掘報告書は出版していない。唯一私が発掘報告書を出していない発掘調査であり，未だ心残りのある調査である。ただ主体が山東大学の発掘であり，正式な共同調査

図27　山東省日照市両城鎮試掘調査・ボーリング調査

になっていないものであるとともに，中国側では大きな成果と捉えていない調査であったところから，報告書は出さないままになっている。

一方，2004～2007年度日本学術振興会科学研究費基盤研究（A）（海外学術調査）「日本水稲農耕の起源地に関する総合的研究」（宮本一夫代表）の成果は，宮本一夫編2008『日本水稲農耕の起源地に関する総合的研究』九州大学大学院人文科学研究院にまとめたが，中国でも欒豊実・宮本一夫編2008『海岱地区早期農協和人類学研究』科学出版社として中文で出版している。本総合研究が九州大学大学院人文科学研究院と山東大学東方考古研究センターとの共同研究と言うだけでなく，当初の目的にあったように，考古学，農学，形質人類学の学際的研究の賜であることを示している。とともに，共同研究の成果が，日中それぞれの言語で出版されたことを誇りに思っている。

なお，膠東半島の石器の悉皆的調査では，３回にわたって膠東半島各地の博物館・文物管理処を訪れ，多くの大学院生の参加の下，石器の実測調査を行っている。第１回は2005年２月15日～２月25日，第２回は2006年２月19日～２月26日，第３回は2007年３月４日～３月12日であった。私とともに，第１回は山口県立萩美術館浦上記念館の今村佳子さんと大学院生の徳留大輔・上條信彦くん，第２回は大学院生の徳留大輔・端野晋平・村野正景・上條信彦くん，第３回は大学院



2005年　煙台市博物館

2006年　煙台市博物館

図28　膠東半島石器実測調査

生の谷直子・上條信彦・三阪一徳・徳留大輔・李作婷・松本圭太くんが参加した。これらの石器の資料集成は，欒豊実・宮本一夫編2008『海岱地区早期農業和人類学研究』科学出版社で公開している。また，それらの石器と遼東半島・朝鮮半島の石器を比較し，東北アジア初期農耕化第２・第３段階において，膠東半島から遼東半島・朝鮮半島へ伝播していく過程を明らかにした（宮本一夫2017『東北アジアの初期農耕と弥生の起源』同成社）。

28. 長崎県壱岐市カラカミ遺跡第５次調査（2008年９月11日～９月28日）

平成19（2007）年度日本学術振興会科学研究費（基盤研究Ｂ（２））「弥生時代における北部九州と朝鮮半島における交流史の考古学的研究」（宮本一夫代表）の最終年度の発掘調査は，2008年９月11日～９月28日に行った。本調査では，韓国，フランス，スペインなどの留学生も参加し，国際色の豊かなものになった。前年度まで包含層から鉄器や鉄素材が多く出土しているとともに，２号住居址床面や４層内から焼土がみられたところから，鍛冶炉の可能性を考慮した上で，発掘に臨んだ。焼土などの炉周辺の土壌をすべて水洗したところ，炉壁や鉄片・鍛造剥片が出土し，さらに焼土近くから鞴の羽口状の土製品が出土したところから，鍛冶炉である可能性が考えられた。しかも炉壁が存在することから，弥生時代にはみられない地上式炉の可能性が考えられた。この炉構造に関しては，後の2013年の壱岐市教育委員会の第１地点の発掘調査によって確かめられている（壱岐市教育委員会2014『天手長男神社遺跡（T-8区）市史跡カラカミ遺跡２次（カラカミⅢ区　カラカミⅣ区）』壱岐市文化財調査報告書第23集）。現在，鞴の羽口の存在や鉄素材の

図29　壱岐市カラカミ遺跡第５次発掘調査

存在から，地上式炉は鋳鉄脱炭による鉄素材を加工する鋳鉄脱炭炉の可能性を考えている（宮本一夫2023『東アジア初期鉄器時代の研究』雄山閣）。

この第１地点からは，弥生中期後葉の２号・４号住居址の屋内炉とともに，弥生後期の４基の鍛冶関連屋外炉が発見された。この地域が，鍛冶炉による環濠集落内部の鉄関連工房区であることが判明したのである。こうした調査成果に併せて，1952年の東亜考古学会による第１地点の整理調査を行い，資料の報告を行うことができた（宮本一夫編2009『壱岐カラカミ遺跡Ⅲ―カラカミ遺跡第1地点の発掘調査（2005～2008年）―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室）。

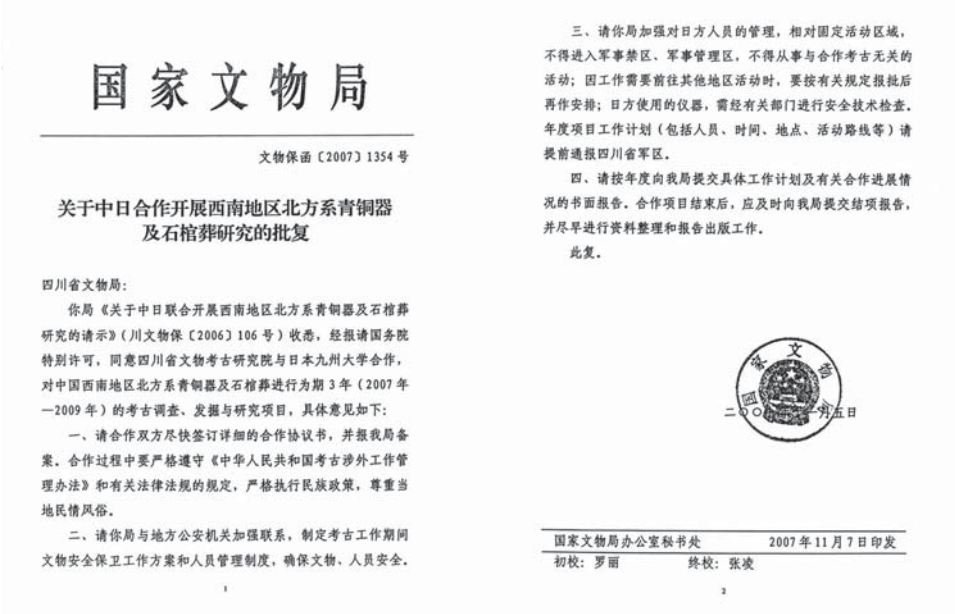
29. 中国四川省炉霍県晏爾龍遺跡発掘調査（2008年10月11日～30日）

2006年８月21日～８月27日に，四川大学の李映福さん，四川省文物考古研究院の陳衛東さん，そして大学院生の徳留大輔さんとともに，四川省甘孜チベット自治州炉霍県を訪れ，晏爾龍遺跡石棺墓の見学や卡莎湖石棺墓の青銅器の実測を行った。この調査は，財団法人福武学術文化振興財団2006年度歴史学・地理学助成「中国西南地区における北方系青銅器文化の生成と展開」（宮本一夫代表）で行った。そこで観察した青銅器は，北方青銅器文化の青銅器に類似するというのがその時の感想である。また，炉霍県では斉家文化の土器や北方系帯飾板が出土しており，北方青銅器文化との関連性が強い地域であると感じられた。当時，川西高原の石棺墓は遡っても紀元前６世紀頃の春秋末期を上限とするものと考えられていた。このような石棺墓の青銅器文化は，四川盆地の三星堆などの青銅器文化とは異なり，北方青銅器文化の系統にあると考えられたのである。一方，晏爾龍遺跡では，家屋の建設などで石棺墓が破壊される危険性が感じられ，早急な遺跡調査の必要性が考えられた。そこで，成都に戻って後，四川省文物考古研究院との共同発掘調査を考え，交渉の末，「中国西南地区北方系青銅器および石棺墓研究」という研究テーマで国家文物局に申請を出すこととなった。

この間，2007・2008年度九州大学教育プログラム・研究拠点形成プロジェクト教育研究Ｂ（２）「中国西南地区における北方系青銅器文化の生成と展開」（宮本一夫代表）を申請し，採択された。共同研究の準備期間として，2007年８月には中橋孝博さんと田中良之さんらによって卡莎湖石棺墓の古人骨の調査が行われた。また，2007年11月18日～11月28日には，大学院生の森貴教・白石溪冴くんとともに川西高原石棺墓出土青銅器の実測調査を行った。この調査のため，11月17日に成都に到着した際に，国務院から共同発掘調査の特別許可が下りたことを知った（図30）。1991年の「考古渉外工作管理弁法」の改正により，外国人も中国の研究機関との合同調査によって発掘調査が可能となった。その許可は国家文物局のさらに上部機関である国務院の特別許可が必要であった。おそらく中国での共同発掘調査の国務院の特別許可が下りたのは，これが日本人研究者に対して21世紀で最後のものになったであろう。この許可は，私の業績を評価してというより，政治的な背景があったと思われる。この時期，日中関係が悪化した第１次安倍晋三内閣が終焉し，福田康夫内閣が誕生した時であり，日中関係改善の一つのシグナルとして出されたものではないかというのが私の推測である。しかし，既に11月であり冬場の発掘は難しいところから，翌年から晏爾龍の発掘を行うこととなった。

2008年は３月にチベット暴動，５月には汶川大地震が発生し，四川省西部では政情不安や自然

災害により，甘孜チベット自治州炉霍県での発掘が危ぶまれた。しかし国務院の特別許可という重みからか，地元政府も努力してくれたおかげで，10月から晏爾龍の発掘を行うことができた。これが，九州大学による初めての海外発掘調査隊の派遣となる記念碑的な発掘であった。初年度の発掘経費は，2008年度九州大学教育プログラム・研究拠点形成プロジェクト教育研究Ｂ（２）



国家文物局

文物保函〔2007〕1354号

关于中日合作开展西南地区北方系青铜器及石棺葬研究的批复

四川省文物局：

你局《关于中日联合开展西南地区北方系青铜器及石棺葬研究的请示》（川文物保〔2006〕106号）收悉，经报请国务院特别许可，同意四川省文物考古研究院与日本九州大学合作，对中国西南地区北方系青铜器及石棺葬进行为期3年（2007年—2009年）的考古调查、发掘与研究项目，具体意见如下：

一、请合作双方尽快签订详细的合作协议书，并报我局备案。合作过程中要严格遵守《中华人民共和国考古涉外工作管理办法》和有关法律法规的规定，严格执行民族政策，尊重当地民情风俗。

二、请你局与地方公安机关加强联系，制定考古工作期间文物安全保卫工作方案和人员管理制度，确保文物、人员安全。

三、请你局加强对日方人员的管理，相对固定活动区域，不得进入军事禁区、军事管理区，不得从事与合作考古无关的活动；因工作需要前往其他地区活动时，要按有关规定报批后再作安排；日方使用的仪器，需经有关部门进行安全技术检查。年度项目工作计划（包括人员、时间、地点、活动路线等）请提前通报四川省军区。

四、请按年度向我局提交具体工作计划及有关合作进展情况的书面报告。合作项目结束后，应及时向我局提交结项报告，并尽早进行资料整理和报告出版工作。

此复。

国家文物局办公室秘书处　　2007年11月7日印发

初校：罗丽　　终校：张凌

図30　国家文物局共同発掘調査許可証

図31　四川省炉霍県晏爾龍遺跡発掘調査

「中国西南地区における北方系青銅器文化の生成と展開」（宮本一夫代表）で行うこととした。九州大学からは，吉林大学留学中の岡崎健治くん，北京大学留学中の松本圭太・宮下浩太朗くん，そして大学院生の高椋浩史・白石溪冴くんが参加した。

海抜3500m の高地での発掘は，予想以上の困難があった。炉霍県招待所に宿泊していたが，断水や寒さに悩まされた。また，10月のチベット高原は，朝は零下で10時頃までは土が凍っていて掘ることができないが，昼は20度以上と寒暖の差が激しい。しかしながら，発掘では石棺墓を13基と近世のチベット寺院址を掘ることができた。調査前に仮説として，川西高原の石棺墓が北方青銅器文化のカラスク文化併行期である商代まで遡ると考えていた。それが，８号墓の商代の青銅戈を発見することで明らかにできたことが，何よりもうれしかった。この事実で，発掘開始まもなく私の仮説が検証されたのである。後に出土古人骨の年代測定を北京大学で行ったが，同様の年代値が出ている。石棺墓の副葬品は，古人骨で判明した性別に対応して副葬品構成が異なる性別分業の等質的な社会であると捉えられた。墓域は卡莎湖遺跡と同じく，列状をなし，列墓が血縁関係を示す可能性がある。田中良之さんによる卡莎湖遺跡の古人骨の歯冠計測分析では母系社会あるいは双系社会とされた。また，墓内部の土壌を札幌大学（現，鹿児島大学）の高宮広土さんにフローテーション分析してもらった結果，大麦を発見した。高原での青銅器社会が牧畜と農耕を営んでいたと想定していたが，その証拠となったと喜んだ。しかし，大麦の年代測定をしたところ，15世紀代のもので，この時期に石棺内部へ混入したものであった。しかし，西南中国における大麦の系統問題は重要な研究課題である（宮本一夫・高大倫編2013『東チベットの先史社会　四川省チベット自治州における日中共同発掘調査』中国書店）。

このように，第１回目の発掘は成功裏に終わり，霙から雪に変わり始める10月末に撤収し成都に戻った。なお，晏爾龍遺跡の遺物・古人骨整理調査は，中橋孝博さんや大学院生らとともに2009年３月６日～３月９日までの４日間，四川省文物考古研究院で行った。

30. モンゴル国ダーラム遺跡第１次調査（2009年８月20日～８月29日）

モンゴルの青銅器文化への関心は，2006年の８月２日～８月９日のモンゴル調査に始まる。金沢大学の髙濱秀さんらが行っていた，モンゴル国ムルンのオーラン・オシグのヘレクスールや鹿石の発掘調査に同行し，発掘現場を観察させてもらった。その後に，ウランバートルのモンゴル科学アカデミー考古学研究所でモンゴル出土の青銅器を実測させてもらった（宮本一夫編2008『長城地帯青銅器文化の研究』（シルクロード学研究 VOL.29））。前年度の四川省晏爾龍遺跡の発掘で，川西高原の青銅器文化が北方青銅器文化と関連することが明らかとなり，北方青銅器文化のフィールド調査の必要性を感じて

図32　モンゴル国ヘンティ県ダーラム遺跡第１次発掘調査

いた。卡莎湖石棺墓や晏爾龍石棺墓の古人骨の調査を行っていただいた中橋孝博さん代表の2008～2011年度日本学術振興会科学研究費基盤研究（A）「日本列島と大陸との人の交流に関する人類学的研究」が採択された。弥生の古人骨との比較研究のためモンゴル高原でのモンゴロイドの古人骨の研究の必要から，私の関心の青銅器文化と人類学的研究が可能なモンゴル青銅器時代墓を発掘することを考えた。2009年１月26日には，科研代表の中橋孝博さんと，沿海州での調査が一緒であった熊本大学の小畑さんとともに，ウランバートルのモンゴル科学アカデミー考古学研究所を訪れ，協定を結び，モンゴル青銅器時代墓葬を調査することとした。モンゴル側の代表は，モンゴル科学アカデミー考古学研究所のツォクトバータルさんである。日本側は隊長を熊本大学の小畑弘己さんになっていただき，発掘の会計など雑務を引き受けていただいた。

初年度のダーラム遺跡を選定するにあたって，モンゴルの調査に不案内であった我々は，モンゴル考古学に造詣の深い新潟大学の白石典之さんに相談した。白石さんが調査していたモンゴル帝国時代の副都であるアウラガ遺跡には，宿泊施設ができていた。この宿泊施設を利用させていただき，まずアウラガ周辺の青銅器時代墓葬の踏査を行い，発掘対象の遺跡を選択することとした。宿舎から近く比較的コンパクトな墓地と思われたダーラム遺跡を発掘対象とした。発掘には，私とともに熊本大学の小畑弘己さんと大坪志子さんの3名が参加し，2009年８月20日～８月29日まで行った。

ダーラム遺跡は板石墓というモンゴル高原東半部に分布する青銅器時代墓葬である。当初，コンパクトな墓地と考えていたが，丘陵頂部近くと斜面部に分かれて二つの墓地からなることが判明した。小畑さんと大坪さんは，遺跡全体の地形測量に全力を注いだ。私は，墓地の中で最も板石が大きい１号墓を選び，モンゴル科学アカデミー考古学研究所のアムガラントゥグスさんとモンゴル大学学生らとともに発掘を行った。アムガラントゥグスさんは古人骨の専門家であり，この後15年間にわたる私のモンゴル調査のパートナーとなる。１号墓は２段墓壙をなす厚葬墓で，土器を副葬品としウマの犠牲が行われていた。一般的に地表に露出している板石墓は盗掘を受ける場合が多く，この１号墓も盗掘を受けており，蓋石などは荒らされていた。そのため，調査目的の一つである古人骨は発見できなかった。

31. 中国四川省炉霍県呷拉宗遺跡発掘調査（2009年９月13日～10月６日）

本年から2009～2012年度科学研究費補助金（基盤研究（A））「中国西南地区における北方系青銅器文化の生成と展開」（宮本一夫代表）が採択され，研究費を確保することができた。四川省文物考古研究院との合同発掘２年目に選んだ調査地点は，同じ炉霍県にある呷拉宗遺跡である。日本隊は，助教の村野正景さん，大学院生の三阪一徳・森貴教・白石溪冴くんと北京大学留学中の松本圭太くんであった。日本隊は2009年９月13日から10月６日まで参加し，留学中の松本圭太君一人が残り発掘終了日まで参加した。成都から炉霍県までは，早朝に車で出発してその日の夜遅くに到着できるが，この年は途中でチベット人によって道路が封鎖され，武装警察が出動するなど物々しいものとなった。到着は翌日の午前３時頃であったかと思う。中国における少数民族問題をまざまざと感じた。

呷拉宗遺跡は，石棺墓のみならず製銅炉が存在するという話で，生産遺跡と消費地である墓葬

図33　四川省炉霍県呷拉宗遺跡発掘調査

がセットをなす遺跡として注目された。製銅炉とされているものは，道の拡張時に発見されたものであったが，発掘の結果，製鉄炉であることが分かった。製鉄炉の発掘の際には，九州大学総合研究博物館の中西哲也さんにも来ていただき分析をお願いした。その製鉄炉は自然の風力を利用したトンネル式の製鉄炉であり，７世紀の吐蕃初期のものであることが分かった。廃棄後は，動物や人の犠牲が行われており，人はシャンクガイというペルシャ湾産の貝をもったシャーマンである可能性がある。青銅器時代のものではなかったが，吐蕃という古代国家が誕生する時期の特異な製鉄炉に興味が持たれた。さらにシャンクガイという南アジアとの交流の片鱗に触れることができた。

また，石棺墓調査では，晏爾龍の列墓とは異なった集塊状の墓域を形成するとともに，双耳罐などの土器の副葬が始まる段階であり，新たな時期の青銅器時代墓地を発見することができた。これは古人骨などの炭素年代測定からも支持されている（宮本一夫・高大倫編2013『東チベットの先史社会　四川省チベット自治州における日中共同発掘調査』中国書店）。なお，呷拉宗遺跡の遺物整理は，2010年３月７日～３月10日まで4日間，発掘参加者とともに成都の四川省文物考古研究院で行った。中橋孝博さんや田中良之さんらも，合わせて古人骨の整理を行った。

32. 福岡市奈多砂丘Ｂの発掘調査（2010年３月15日～３月21日）

福岡市史編集委員会考古専門部会では，特別編『自然と遺跡からみた福岡の歴史』を当時編集していた。その過程で，考古学と自然地理の専門家で，福岡市内の遺跡を共同で調査研究する機会が与えられた。そこで選ばれたのが，海の中道に位置する奈多砂丘Ｂ遺跡である。この遺跡は，福岡市教育委員会の調査で弥生後期の住居址などが発見されていた。また，後期旧石器の遺物も採集されていた。玄界灘に面したこの遺跡は，砂丘の後退により遺跡包含層が崩落しつつあり，

図34　福岡市奈多砂丘Ｂ遺跡発掘調査

遺跡の記録の必要があった。洪積世から完新世における博多湾の形成過程と人類の歴史を探るために重要な遺跡であり，学際的な調査の必要性があった。福岡市史編さん委員会考古専門部会長を務めていた私は，2009年度の発掘実習の機会として捉え，九州大学考古学研究室の学生を連れて発掘調査に臨んだ。熊本大学の小畑弘己さんは植物考古学の立場からフローテーション分析をするため熊本大学の大学院生とともに参加し，海浜部の遺跡から炭化米を発見した。また，岡山理科大学の富岡直人さんは学生とともに参加し，堆積層の観察と堆積層の年代測定を行った。このように，愛媛大学から転出後初めて九州大学以外の大学の学生との共同発掘になった。さらに西南学院大学の磯望さんら自然地理学の研究者はボーリング調査を行い，砂丘の形成過程を探った。

このような学際的共同研究により，後期旧石器時代，縄文時代早期，縄文時代後期，弥生時代後期後半～終末期に生活面が存在し，奈多砂丘の形成過程と関連づけて捉えることができた（宮本一夫2013「環境の変遷と遺跡からみた福岡の歴史」『新修福岡の歴史－特別編　自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市）。また，発掘調査では弥生時代後期後半～終末期の遺物包含層を確認するとともに，そこに炭化米が発見された。鍛冶炉の可能性も想定されるように，カラカミ遺跡に継ぐ弥生終末期の交易拠点である可能性が考えられた（宮本一夫2012「奈多砂丘Ｂ遺跡の発掘調査」『市史研究　ふくおか』第７号（福岡市博物館市史編さん室），宮本一夫2024「奈多砂丘Ｂ遺跡出土炭化米の実年代」『市史研究ふくおか』第19号（福岡市博物館市史編さん室））。

33. モンゴル国ヘンティ県ダーラム遺跡第２次調査（2010年８月17日～８月29日）

ダーラム遺跡第２次調査の日本隊は昨年と同様なメンバーで，2010年８月17日から８月29日まで行った。今回も，新潟大学の白石典之さんたちのアウラガ遺跡発掘調査チームと一緒にさせて

図35　モンゴル国ヘンティ県ダーラム遺跡第２次発掘調査（モンゴル考古学研究所にて）

いただき，その宿舎を利用させてもらった。私はダーラム遺跡内で最も大きい４号墓を選び，発掘することとした。４号墓は中心部の石が剥がされており，既に攪乱を受けている可能性が高かった。一方，熊本大学の小畑弘己さんと大坪志子さんは，８号墓と41号墓の発掘を行った。８号墓では土器片とトルコ石製玉，41号墓では土器片とウマの犠牲が発見されたが，人骨は残っていなかった。

当初盗掘の可能性のあった４号は，大きな蓋石の存在で，盗掘を免れたとともに，蓋石の近くに二次埋葬の古人骨が発見された。さらに，蓋石の主体部は土壙であったが，脛骨などの人骨片が残るとともに，３個の銅泡と1000個にも及ぶ管玉とカーネリアン製の玉が出土した。主体部は成人女性であり，厚葬墓であった。このような多くの玉をもつ墓はモンゴルでも珍しく，大発見となった。しかし，主体部の発掘は，最終日の８月29日の午後３時から始まり，私一人で墓壙を日没の８時頃までで掘りきった。翌日までに発掘を延ばしてじっくり掘りたいところであったが，モンゴル側の日程の都合でこの日に終わらなければならなかった。発掘は時間との闘いで，とかく雑にならざるを得なかったが，墓壙の横で大坪さんとアムガラントゥグスさんが廃土を篩でふるって多くの管玉を回収してくれた。その後，モンゴルの学生を中心に，車のライトの中，４号墓の埋め戻しが始まったが，終了したのは夜10時頃となった（宮本一夫2015「モンゴル高原の先史時代を探る―青銅器時代板石墓の発掘調査から―」『東アジアの砂漠化進行地域における持続可能な環境保全』九州大学東アジア環境研究機構 RIEAE 叢書Ⅵ，花書院，99-135頁）。

34. 中国四川省雅江県本家地遺跡の調査（2010年９月12日～10月５日）

３回目の四川省文物考古研究院との合同発掘調査は，治安の問題もあり，炉霍から雅礱江を南に下った雅江県で行うこととなった。雅江での発掘地点を選定するため，2010年５月８日～５月14日まで単身成都と雅江を訪れ，本家地遺跡を調査地と決めた。日本隊は，私以外はすべて大学院生の松本圭太・主税英徳・三阪一徳・森貴教・藤元正太くんの６名である。日本隊が発掘調査に参加したのは，途中参加の2010年９月12日～10月５日である。

発掘対象の石棺墓がある本家地遺跡は，発掘の結果，青銅器時代ではない11～12世紀のものであった。また，９～10世紀の吐蕃末期の竪穴住居や11～12世紀のチベット中世前期の石壁住居を発掘するなど歴史時代の遺跡であった。発掘調査と並行して，雅江県内で農民が発見した石棺墓の土器・青銅器資料を実測調査した。脚泥堡１号石棺墓と湾地石棺墓の資料である。土器の型式からいって，呷拉宗遺跡との比較によって，湾地→呷拉宗15号墓→脚泥堡１号墓といった編年が考えられた。また，川西高原の石棺墓全体を比較検討することにより，６期に区分した編年を示すとともに，北方青銅器の受容と山字形格銅剣の創出に至るこの地域の青銅器文化の変遷を明らかにすることができた（宮本一夫2000『東アジア青銅器時代の研究』雄山閣）。

共同発掘調査ならびに研究成果の発表会を，翌2011年９月２・３日に成都で開催した。日本からは中橋孝博・田中良之・中西哲也・高宮広土・菊地大樹さんが参加して行った。その後，2012年３月には雲南省東部の青銅器遺跡踏査，2013年７月には貴州省の青銅器遺跡踏査を川本芳昭・

図36　四川省雅江県本家地遺跡発掘調査

辻田淳一郎さんと四川大学の李映福さんとで行った。また，2012年９月には四川省西昌の青銅器遺跡の踏査を大学院生の松本圭太・齋藤希さんと行った。こうして共同研究の成果を日本と中国でそれぞれ出版することができた（(宮本一夫・高大倫編2013『東チベットの先史社会　四川省チベット自治州における日中共同発掘調査』中国書店，高大倫・宮本一夫編2013『西南地区北方譜系青銅器及石棺葬文化研究』科学出版社)。

35. モンゴル国ヘンティ県ダーラム第３次調査（2011年８月25日～８月29日）

ダーラム遺跡調査の最後は，2011年８月25日～８月29日までと限られていたので，これまで調査を十分行ってこなかった，板石墓Ⅰb式と考えられる９号墓発掘を行った。この度もアウラガ遺跡研究施設での宿泊である。熊本大学の小畑弘己さんは，今回は，中世アウラガ遺跡の祭祀遺構のフローテーションに専念することになり，日本隊は私と大坪志子さんだけの参加となった。９号墓は長方形プランで四隅石をもたない私がⅠ式とするタイプで，さらに長方形の縁石の外側に控え積みをもつⅠb式である。墓壙内からウマの肩甲骨の犠牲が出土し，年代測定値が紀元前９世紀のものであり，私の仮説が検証されることとなる。

ダーラム遺跡１次～３次調査で，ダーラム遺跡は紀元前９～前３世紀の板石墓の墓地遺跡であることが分かった。これらの発掘により，板石墓の墓葬構造の型式学的分類により，編年を構築することができた。２・９号墓が板石墓Ⅰb式（紀元前９～前７世紀），４号墓が板石墓Ⅱa式（紀元前８～前６世紀），８号墓が板石墓Ⅱb式（紀元前６～４世紀），１号墓が板石墓Ⅱc式（紀

図37　モンゴル国ヘンティ県ダーラム遺跡第３次発掘調査

元前５～３世紀）である。４号墓は成人女性の墓で，約1000個の管玉と３個の銅泡の副葬品があった。８号墓は土器とトルコ石製玉を副葬品に，１号墓は２段墓壙をなす厚葬墓であった。これら板石墓Ⅱ式は典型板石墓とも呼ばれ，モンゴル高原中・東部を中心にタガール文化期（紀元前９～前３世紀）に展開する。４号墓や１号墓のような首長層の登場にみられるように，牧畜社会において個人の階層化が進む段階であることが判明した（Kazuo Miyamoto & Hiroki Obata ed. 2016 *Excavations at Daram and Tevsh Sites: A report on Joint Mongolian-Japanese Excavations in Outer Mongolia*. Department of Archaeology, Faculty of Humanities, Kyushu University）。

36. 長崎県壱岐市カラカミ遺跡第６次調査（2011年９月18日～９月24日）

1952年の東亜考古学会によるカラカミ遺跡の辻屋敷貝塚（第１地点）と小川貝塚（第２地点）の発掘調査の後，1977年には九州大学文学部考古学研究室では西谷正先生を中心としてカラカミ遺跡の白川貝塚が発掘調査されていた。この調査についても，発掘調査に参加した木村幾多郎さんによって卜骨が紹介されているのみで（木村幾多郎1979「長崎県壱岐出土の卜骨」『考古学雑誌』第64巻第４号），発掘調査報告書が出されていなかった。1977年の白川貝塚の再整理のために，白川貝塚の再調査の必要性を感じていた。折しも，2011年から壱岐市教育委員会がカラカミ遺跡の史跡整備を行うことになり，そのため白川貝塚の発掘調査が計画された。そこで，九州大学の考古学研究室も参加し，共同で発掘調査にあたることにした。経費は研究室経費を充てての

図38　壱岐市カラカミ遺跡第６次発掘調査

発掘であった。また，辻田淳一郎さんが海外出張のため，私一人で担当することとなった。九州大学の考古学研究室は，2011年９月18日～９月24日までの１週間で1977年の第６トレンチ付近を発掘した。壱岐市教育委員会は第７トレンチ付近やその他の地点を発掘した。これらの発掘によって，1977年に溝状遺構とされていたものが，環濠であることが判明した。環濠部分の遺物は，層位ごとにかつ全点の位置を記録して掘りあげた。これにより，環濠は弥生中期後葉の須玖Ⅱ式に始まり，弥生後期後半の下大隈式段階に暴力的な廃棄が行われていることが判明した。

整理調査では，1977年資料を再評価するとともに，東亜考古学会発掘資料と６次にわたる九州大学考古学研究室の再発掘を含めた総括を試みた。そのため報告書では，単に考古学的成果を報告するのみでなく，鉄製品の金属学的分析，土器胎土分析や植物考古学・動物考古学的分析を加えた学際的な研究を行うことを目指した（宮本一夫編2013『壱岐カラカミ遺跡Ⅳ―カラカミ遺跡第５～７地点の発掘調査（1997・2011年）―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室）。

本発掘調査を最後とし，考古学研究室の実習発掘は准教授の辻田淳一郎さんに任せることにし，私自身は海外調査に専念することにした。平成23（2011）～平成26（2014）日本学術振興会（基盤研究（B））「「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に」（辻田淳一郎代表）が採択され，2012年から辻田さんによる桂川町の金比羅山古墳の発掘が始まっている（辻田淳一郎2015『山の神古墳の研究―「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室）。

なお，考古学実習では，その後，東亜考古学会が1951年から1965年にかけて５次にわたって行った原の辻遺跡の発掘資料を再整理し，整理調査報告書を出版している（宮本一夫編2018『壱岐原の辻遺跡閨繰遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳 - 東亜考古学会壱岐原の辻遺跡調査報告書Ⅰ－』九州大学人文科学研究院考古学研究室，宮本一夫編2023『壱岐原の辻遺跡―東亞考古学会壱岐原の辻遺跡調査報告書Ⅱ―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室）。また，1966年の日仏合同調査や1984～1985年度文部省科学研究費補助金・総合研究「九州における弥生文化の成立」（横山浩一代表）で行われた宇木汲田遺跡の発掘調査資料の再整理を行った。ならびに土壌サンプルの水洗選別により弥生早期の多量の炭化米を発見した。これらの資料も整理調査報告書で公開することができた（宮本一夫編2021『宇木汲田貝塚再整理調査報告書』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室）。

37．モンゴル国ウブルハンガイ県テブシ遺跡発掘調査（2012年８月17日～８月27日）

2012・2013年度九州大学教育プログラム・研究拠点形成プロジェクト教育研究「モンゴル高原における古代牧畜民の移住と集団再編に関する総合的研究」（宮本一夫代表）が採択され，モンゴルでの発掘調査を継続することができた。本発掘は九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室とモンゴル科学アカデミー考古学研究所との共同発掘とした。共同調査は「Monngolian Khun Projekt」と命名され，モンゴル高原青銅器時代墓葬と古人骨の学際的研究を目指すものであり，以後のモンゴルでの調査はすべてこのプロジェクトによるものとなる。モンゴル考古学研究所の代表はツォクトバータルさんであったが，モンゴル側の実質の発掘隊長はダーラム遺跡以来のアムガラトゥグスさんであった。以後，最後までアムガラントゥグスさんがモンゴル側の発掘隊長

図39　モンゴル国ウブルハンガイ県テブシ遺跡発掘調査

で継続している。

ダーラム遺跡でモンゴル高原東部の板石墓の変遷を把握することができたところから，モンゴル高原中部に分布する撥形墓の発掘を計画した。撥形墓の遺跡としては既にロシア人が発掘していたテブシ遺跡が有名であり，そこを調査対象とすることとした。発掘調査は，トゥブ県とウブルハンガイ県での踏査の途中で行う形となった。発掘期間は2012年８月17日～８月27日である。日本隊は大学院生の松本圭太・藤元正太くん，研究生のハタンバートルくんと学部生の福永将大くんが参加した。その後の整理調査には，中橋孝博さんと鳥取大学の岡崎健治さんが参加し，出土古人骨の整理を行っている。

テブシ遺跡では，１号墓と３号墓の撥形墓を発掘した。１号墓の被葬者は，仰臥伸展葬の成人女性で，紀元前10～前９世紀である。３号墓の被葬者は，土壙内に俯せ葬をなす青年男性で，紀元前14～前13世紀である。ともに副葬品は持たない。同じ撥形墓でありながら下部構造を異にするとともに，頭位方向も違っている。米元史織さんの歯牙のストロンチウム分析の結果では，両者は生誕地を異にする可能性が分かっている（Kazuo Miyamoto & Hiroki Obata ed. 2016 *Excavations at Daram and Tevsh Sites: A report on Joint Mongolian-Japanese Excavations in Outer Mongolia*. Department of Archaeology, Faculty of Humanities, Kyushu University）。

撥形墓は，平面形が長方形をなす板石墓Ⅰ式から変化したものであり，モンゴル高原中部に分布する。カラスク文化期（紀元前15～前９世紀）のモンゴル高原中・東部では，板石墓Ⅰ式が分

布するが，中部では撥形墓が分布している。この発掘を通じて，撥形墓の位置づけが可能になった（宮本一夫2020『東アジア青銅器時代の研究』雄山閣）。

38. モンゴル国バヤンホンゴール県ボル・オボー遺跡（2013年８月14日～８月26日）

2013年度九州大学教育プログラム・研究拠点形成プロジェクト教育研究「モンゴル高原における古代牧畜民の移住と集団再編に関する総合的研究」（宮本一夫代表）では，ボル・オボー遺跡の発掘を行った。前年度までの発掘調査で，モンゴル高原東部・中部の板石墓や撥形墓の様相を掴むことができたため，モンゴル高原西部を中心に分布するヘレクスールを対象とすることにし，ボル・オボー遺跡を調査対象とした。発掘調査は８月14日～８月26日まで行い，九州大学からは私と大学院生の松本圭太・藤元正太・福永将大くん，研究生のハタンバータルくんが参加した。発掘後の古人骨整理には鳥取大学の岡崎健治さんがあたり，古人骨のストロンチウム分析には田中良之さんがあたった。

ボル・オボー遺跡は，円形あるいは方形の囲い列石と円形石積からなるヘレクスールと，囲い石列を持たない円形石積の円形墓，さらに撥形墓からなる墓地遺跡である。円形墓はヘレクスールの一種と考えられるが，ヘレクスールと円形墓では規模が異なり，墓を作る集団の力の差を示すものであろう。１号墓の円形墓は，土壙内に全身を横向きにした30代前半の性別未詳の被葬者が安置されていた。紀元前14～前13世紀の墓である。８号墓の撥形墓の被葬者は，青年の性別未

図40　モンゴル国バヤンホンゴール県ボル・オボー遺跡発掘調査

詳で，紀元前14～前13世紀の墓である。モンゴル高原西部から中部のタガール文化期（紀元前15～前9世紀）には，円形墓を含むヘレクスールが主体的に分布する（Kazuo Miyamoto ed. 2017 *Excavations at Bor Ovoo and Khyar Kharaach Sites: The second Report on Joint Mongolian-Japanese Excavations in Outer Mongolia.* Department of Archaeology, Faculty of Humanities, Kyushu University）。

39. モンゴル国ゴビ・アルタイ県ヒャル・ハラーチ遺跡の発掘調査（2015年８月13日～８月23日）

平成2015～2020年度科学研究費補助金（基盤研究（A））海外学術調査「ユーラシア東部草原地帯における騎馬遊牧社会形成過程の総合的研究」（宮本一夫代表）が採択され，引き続きモンゴルの青銅器文化墓葬の調査が可能になった。この基盤研究（A）では，モンゴル科学アカデミー歴史学研究所と九州大学アジア埋蔵文化財研究センターと協定を結び，「Monngolian Khun Projekt」として，発掘調査を進めた。ボル・オボー遺跡に続き，ヘレクスールを調査対象とし，アルタイに近いモンゴル高原西部のゴビ・アルタイ県のヒャル・ハラーチ遺跡を調査地とした。発掘調査は８月13日から８月25日まで実施し，九州大学では私とアジア埋蔵文化財研究センターの田尻義了さん，大学院生の松本圭太・福永将大くんが参加した。ヒャル・ハラーチはアルタイに近い高原であり，朝方はかなり冷え込み，８月にもかかわらず３度まで気温が下がることもあった。発掘後の古人骨整理は鳥取大学の岡崎健治さんと九州大学総合研究博物館の米元史織さんがあたった。その年の３月に田中良之さんが急逝されたところから，米元さんが古人骨のスト

図41　モンゴル国ゴビ・アルタイ県ヒャル・ハラーチ遺跡発掘調査

ロンチウム分析を引き継ぎ担当している。この後のモンゴルでの青銅器時代墓調査の古人骨整理は，岡崎さんと米元さんが参加している。

ヒャル・ハラーチ遺跡は，第２地点墓地では，円形囲い石列からなるヘレクスール１類と円形墓のヘレクスール２類，方形墓であるヘレクスール４類からなる。四隅立石の有無でａ類とｂ類に細分できる。2b 類の20号墓の被葬者は，紀元前14～前13世紀の40代前半の男性で，土壙内に横向きに埋葬されていた。4b 類の１号墓の被葬者は，紀元前14世紀～前11世紀の老人男性で，地上の石槨内に横向きに埋葬されていた。同時期の両者は，墓葬形態を異にするとともに，米元史織さんが行ったストロンチウム分析の結果，生誕地を異にしている。また，古人骨の形質を分析した岡崎健治さんに寄れば，両人骨には形質差が認められた。おそらく20号墓が移住者であろう。モンゴル高原西部のカラスク文化期の墓制は，このようなヘレクスールが主体である（Kazuo Miyamoto ed. 2017 *Excavations at Bor Ovoo and Khyar Kharaach Sites: The second Report on Joint Mongolian-Japanese Excavations in Outer Mongolia*. Department of Archaeology, Faculty of Humanities, Kyushu University）。

40. 中国山東省楊家圏遺跡ボーリング（2015年11月２日～11月６日）

2015～2018年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究」（宮本一夫代表）が採択された。欒豊実さんを始めとする山東大学歴史文化学院と九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室と共同研究の４年間の協定を結び，共同研究を始めた。共同研究では，遼寧省大連市王家村遺跡・膠東半島先史遺跡の遺物調査や土器圧痕分析，炭化米の DNA 分析，楊家圏遺跡でのボーリング調査を行った。

2004年のボーリング調査で，楊家圏遺跡の集落址の南側谷部に水田が存在する可能性が高まった。今次調査では，2004年調査地点より南側の谷部に水田址が広がるかどうかを，ボーリング調査と土壌のプラント・オパール分析で明らかにするものである。ボーリング調査は2015年11月２日から11月６日まで行い，私と宮崎大学の宇田津徹朗さん，大学院生の齊藤希さんが参加し，プラント・オパール分析を行った（宮本一夫編2019『東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究』）。日程の都合で，すべての範囲でのボーリングをし終えず，次年度に残すこととなった。

図42　山東省棲霞県楊家圏遺跡2015年ボーリング調査

図43　モンゴル国バヤン・ホンゴール県エメールト・トルゴイ遺跡第１次発掘調査

41. モンゴル国バヤン・ホンゴール県エメールト・トルゴイ遺跡の第１次発掘調査（2016年７月27～８月５日）

2016年度科学研究費補助金（基盤研究（A））海外学術調査「ユーラシア東部草原地帯における騎馬遊牧社会形成過程の総合的研究」（宮本一夫代表）で，ヘレクスールと板石墓・撥型墓が共存するエメールト・トルゴイ遺跡の発掘調査を実施した。発掘調査は2016年７月27日～８月５日まで実施，九州大学からは私と田尻義了さん，助教の松本圭太さん，大学院生の福永将大・小澤利満くんが参加した。

円形囲い列石に四隅立石を持つ1b 類ヘレクスールの30号墓，円形墓で四隅立石を持つヘレクスール2b 類の40号墓を発掘した。この内，ヘレクスール2b 類の40号墓は20代の男性で紀元前13～前12世紀であった（Kazuo Miyamoto ed. 2018 *Excavations at Emeelt Tolgoi Site: The third Report on Joint Mongolian-Japanese Excavations in Outer Mongolia*. Department of Archaeology, Faculty of Humanities, Kyushu University）。

42. 中国山東省楊家圏遺跡ボーリング調査・地形測量調査（2016年11月３日～11月７日）

2016年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究」（宮本一夫代表）で，前年度のボーリングができなかった部分の継続調査と，地形測量を行った。ボーリング調査は，宮崎大学の宇田津徹朗さん，さらに山東大学の欒豊実さん

図44　山東省棲霞県楊家圏遺跡2016年ボーリング調査

と煙台市博物館の王富強さん，山東大学院生が行い，地形測量を私と九州大学大学院生の齊藤希さんと福永将大くんが行った。地形測量とプラント・オパール分析の結果から，旧地形や河川の復元を行い，水田の位置を推測した（宇田津澈朗・宮本一夫・欒豊実・靳桂雲・王富強2019「楊家圏遺址水田遺跡探査」『東方考古』第15集、pp.261-281，科学出版）。

43. モンゴル国バヤン・ホンゴール県エメールト・トルゴイ遺跡の第２次発掘調査（2017年８月９日～23日）

2017年度科学研究費補助金（基盤研究（A））海外学術調査「ユーラシア東部草原地帯における騎馬遊牧社会形成過程の総合的研究」（宮本一夫代表）で，エメールト・トルゴイ遺跡の第２次発掘調査を実施した。発掘調査は2016年８月９日から８月23日まで実施し，九州大学からは私と田尻義了さん，研究員の松本圭太さん，大学院生の福永将大・小澤利満くんが参加した。日本から持って行ったテントを倉庫にそれまで保管していたが，この年は調査直前に盗まれ，現地で不良なテントを買わざるを得ず，就寝に支障を来すことがあった。

円形墓で四隅立石を持つヘレクスール2b 類の44号墓，長方形墓で四隅立石をもつＩｂ式板石墓の82号墓，ヘレクスール4b 類の49号墓，撥形墓の18号墓を発掘した。44号墓は紀元前13世紀から12世紀の壮年女性が，墓壙内に横向きに埋葬されていた。ヘレクスール4b 類の49号墓の被葬者は，成人の性別未詳で紀元前15～前13世紀である。撥形墓の18号墓は，成人で性別不詳の紀

図45　モンゴル国バヤン・ホンゴール県エメールト・トルゴイ遺跡第２次発掘調査

元前15～前13世紀である。盗掘坑から三翼銅鏃が出土した。これら一連のヘレクスール墓を発掘することにより，ヘレクスール墓の墓葬構造の分類と編年を打ち立てることができた（宮本一夫2020『東アジア青銅器時代の研究』雄山閣）。

44. モンゴル国ザブハン県アブダライ・ヒャサー遺跡第１次調査（2019年８月10日～８月22日）

2019年～2023年（基盤研究（S））「東アジアにおける農耕の拡散・変容と牧畜社会生成過程の総合的研究」（宮本一夫代表）が採択された。本研究は農耕社会の拡散過程として灌漑水稲農耕である畦畔水田が山東半島から遼東半島・朝鮮半島を経て日本列島へ拡散する過程と，一方で牧畜社会と北方青銅器文化の伝播過程をモンゴル高原の青銅器時代墓を調査することにより明らかにすることを目的とする。前者の研究としては，中国山東省楊家圏遺跡を調査し水田遺構を明らかにするものである。そのため，本研究では楊家圏遺跡で発掘調査を2020年から２年間２回実施する予定であったが，2020年に始まるコロナ感染症拡大により延期となり，その後，中止された。2004年のボーリング調査以来，龍山文化期の畦畔水田の存在を発掘調査により明らかにしたかったが，それも叶わないこととなり，内心忸怩たる思いがある。後者の研究は，これまで実施してきたモンゴル高原の青銅器時代墓の発掘調査を継続するものであった。

2018年９月の踏査により，アブダライ・ヒャサー遺跡で，これまで認められなかったアファナシヴォ文化墓葬やムンフハイルハン文化墓葬を確認した。それらはヘレクスール文化墓葬より古

図46　モンゴル国ザブハン県アブダライ・ヒャサー遺跡第１次発掘調査

い段階の青銅器文化墓葬であり，ヘレクスール文化の成立を解明するために発掘調査の必要を感じていた。しかし，基盤研究（S）の採択発表が2019年６月26日と遅かったため，準備期間もままならず，発掘調査を行うこととした。基盤研究（S）に伴う共同研究の５年間の協定も急遽発掘直前にウランバートルで結び，モンゴル科学アカデミー考古学研究所と九州大学大学院人文科学研究院考古学研究所による「Monngolian Khun Projekt」とした。発掘調査は2019年８月10日から８月22日に行い，私と助教の松本圭太さん，九州大学埋蔵文化財調査室助教の福永将大さん，大学院生の譚永超さんが参加した。

初年度の発掘は，紀元前18～前17世紀のムンフハイルハン文化の15号墓と８号墓の二つの墓のみを発掘した。15号墓の２号土壙からは，被葬者が青銅耳飾を装い屈葬で埋葬されており，副葬品に木製スプーンを持ったムンフハイルハン文化墓葬の特徴を示していた。また，８号墓はムンフハイルハン文化墓葬に紀元前13～前９世紀に再埋葬がされていた。それは丁度ヘレクスール文化が始まる時期であり，その被葬者は，米元史織さんのストロンチウム同位体比分析によれば，他地域からの移住者であった。

45. モンゴル国ザブハン県アブダライ・ヒャサー遺跡第２次調査（2022年７月30日～８月11日）

アブダライ・ヒャサー遺跡第２次調査は，第１次調査翌年の2020年に実施する予定であったが，コロナ感染症拡大のため２年間延期せざるを得ず，2022年度（基盤研究（S））「東アジアにおけ

図47　モンゴル国ザブハン県アブダライ・ヒャサー遺跡第２次発掘調査

る農耕の拡散・変容と牧畜社会生成過程の総合的研究」（宮本一夫代表）で，2022年７月30日から８月11日まで実施することができた。日本側の参加者は，私と助教の松本圭太さん，九州大学総合研究博物館助教の福永将大さんである。依然としてコロナが流行していたため，帰国時にはPCR 検査の陰性証明が必要な段階であった。しかも，これが私にとって大学人最後の発掘あるいは生涯最後の発掘であるという気概を持って臨んだ発掘である。

紀元前28～前18世紀に遡るアファナシェヴォ文化（チェムルチェグ文化）タイプの16号墓を発掘した。16号墓は，カラスク文化の始まりである紀元前15世紀～前13世紀に乱されていた。その際にシカとヒツジ・ヤギによる祭祀行為が行われており，この時期が牧畜社会の始まりにあたることを示している。その後，カラスク文化の紀元前14～前９世紀にかけて，この墓地ではヘレクスール文化１～４類の墓葬が営まれていることが分かった。円形の囲い列石を持つ1a 類の11号墓の被葬者は紀元前13～前11世紀，2a 類の９号墓と31号墓は紀元前12～前９世紀の墓である。さらに，1a 類ヘレクスール18号墓のウマ祭祀抗と3a 類ヘレクスール４号墓のウマ祭祀抗を発掘した。それぞれ紀元前10～前８世紀と紀元前13～前９世紀の年代が判明した（Kazuo Miyamoto ed. 2023 *Excavations at Avdalai Khyasaa Site: The Fourth Report on Joint Mongolian-Japanese Excavations in Outer Mongolia.* Department of Archaeology, Faculty of Humanities, Kyushu University）。

その後，2023年９月には，モンゴル国オブス県で遺跡踏査を行い，初期鉄器時代のチャンドマニ文化墓葬を中心に調査ができた。このように，ダーラム墓地からアブダライ・ヒャサー墓地ま

での約15年間の発掘調査により，モンゴル高原の青銅器時代墓の変遷とともに，人や青銅器文化の動きや社会変化を知ることができた。さらに匈奴に至る地域首長の統合過程を描くことができた（宮本一夫2024「モンゴル青銅器時代墓制と北方青銅器文化」『史淵』161輯）。

46. その他の調査

九州大学統合移転による伊都キャンパス予定地内の前方後円墳の測量調査を私と辻田淳一郎さんや大学院生・学部生とともに実施している。これは，平成16・17年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクトＢ（３）「新キャンパス地域の物理探査」（牛島恵輔代表）によるものである。これは墳丘測量調査のみならず，九州大学工学研究院の牛島恵輔さんや水永秀樹さんらによる古墳主体部の電気探査を加えた共同研究である。移転地に保存された前方後円墳の実態を探る研究であった。一つは塩除古墳の墳丘測量調査で，2005年２月21日～３月18日に実施した（宮本一夫・辻田淳一郎・牛島恵輔・水永秀樹・田中俊昭・今井隆博2005「福岡市西区元岡・塩除古墳の墳丘測量調査と電気探査の成果」『九州考古学』第80号）。さらに，池ノ浦古墳と峰古墳の墳丘測量調査を2006年２月17日～３月７日に行った（宮本一夫・辻田淳一郎・牛島恵輔・水永秀樹・田中俊昭・黒木貴一2006「福岡市西区元岡池ノ浦・峰古墳の墳丘測量調査と電気探査の成果」『九州考古学』第81号）。

その他，遺物の実測調査を行っており，主な調査を挙げておきたい。

1999年３月28日から４月11日まで，ハーバード大学ピーボディ考古民族学博物館でベトナム漢墓のヤンセコレクションの調査を行った。参加したのは私と大学院生の俵寛司くんと濱名弘二くんである。この調査は，ハーバード大学エンチン研究所の助成によるものである。オロフ・ヤンセが1938～1940年にベトナム・タインホア省の四つの漢墓群で発掘調査した資料が，ハーバード大学にあることを、前年度ハーバード大学で在外研究中に確認した上で行った調査である。ヤンセの報告書には遺物の写真は掲載されているものの実測図がなく，再整理することにより実測図作成とともに，漢墓の編年を作成することを試みた。その後，実年代の鍵となる「建和三（149）年」銘灰釉陶壺を2000年７月２・３日にブリュッセル王立美術歴史博物館で実測調査した。さらに，2000年12月８・９日に、ベトナム留学中の俵寛司くんと共に，1963年にアメリカから返還されていたヤンセ資料を，ホーチミン市ベトナム歴史博物館にて実測調査した。なお，ハーバード大学とベトナム考古学研究所では，ヤンセコレクションの整理調査の成果発表を行っている。こうして，ベトナム漢墓の１世紀から３世紀までの編年を作ることができ，後漢から士燮政権期の歴史復元を行った（宮本一夫・俵寛司2002「ベトナム漢墓ヤンセ資料の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第97集，123～193頁，宮本一夫2023『東アジア初期鉄器時代の研究』雄山閣）。

九州大学考古学研究室と吉林大学考古学系との共同研究として，1999～2001年度文部省科学研究費補助金基盤研究（A）（２）「東北アジアにおける先史文化の比較考古学的研究」（西谷正代表）が採択された。考古学研究班と人類学研究班に分け，考古学研究班は私と西谷正先生，人類学研究班は中橋孝博さんと金宰賢さんが，九州大学側から参加した。中国東北部からロシア沿海州の遺跡見学とともに，青銅器の実測調査や古人骨の計測調査を行った（九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室2002『東北アジアにおける先史文化の比較考古学的研究』（平成11年度～

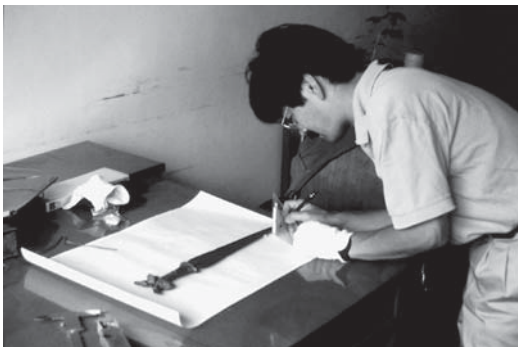
13年科学研究費補助金（基盤研究（A）（2）研究成果報告書））。この共同研究期間中，1999年８月15日～８月18日に吉林大学辺疆考古センターと吉林市博物館にて触角式銅剣の実測調査を行うことができた（宮本一夫2020『東アジア青銅器時代の研究』雄山閣）。

2002～2006年度九州大学21世紀 COE プログラム「東アジアと日本」が採択された。その一項目として「中国初期青銅器文化の研究」という研究プロジェクトを立ち上げ，中国社会科学院考古学研究所と九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室と３年間の共同研究を行うこととした。中国国家文物局の批准を得て2003年から開始した。この2003年は SARS が中国を震撼させた年で，その終息を待って，中国初期青銅器すなわち二里頭文化以前の青銅器の実測調査を開始した。2003年10月９日～10月17日は甘粛，2003年12月26日～12月27日はエルミタージュ美術館，2004年５月25日～６月５日は山西・洛陽・二里頭工作站，2004年11月26日～12月５日は北京・西安・鄭州・済南，2005年６月８日～６月18日は青海・甘粛，2005年９月１日～９月８日はフフホト・天津・西安・上海で青銅器実測調査を行った。参加したのは，私と大学院生の濱名弘二くん，徳留大輔くん，佐野和美さん，谷直子さん，田尻義了くん，村野正景くんである。この他，補足調査として，2006年４月に奈良国立博物館と泉屋博古館で，2007年４月にカナダ・トロントのロイヤ

1999年ハーバード大学

2000年ベトナム考古学研究所

図48　ヤンセ・コレクションの遺物調査



1999年吉林市博物館

1999年吉林大学

図49　1999年吉林大学共同研究

2003年甘粛

2004年洛陽市博物館

2005年青海省博物館

2005年甘粛

2005年フフホト

2006年新疆

図50　2003～2006年中国初期青銅器調査

ルオンタリオ美術館にて青銅器実測調査を行った。本研究にて，中原における陶寺文化から二里頭文化・二里岡文化の製作技法に基づく青銅彝器の編年を示すとともに，青銅彝器の威信財システムを明らかにすることができた（宮本一夫2020『東アジア青銅器時代の研究』雄山閣）。こうした研究成果の公開は，2009年度科学研究費（研究成果公開促進費）で可能になった（宮本一夫・白雲翔編2009『中国初期青銅器文化の研究』九州大学出版会）。

九州大学21世紀 COE プログラム「東アジアと日本」が終了した2006～2007年度には，シルクロード学研究センターの助成金を頂き，研究を続けた。そこでは，2006年２月に日中共同研究成果報告会を開き，白雲翔・許宏・陳国梁・趙海濤（中国社会科学院考古研究所）・王輝（甘粛省文物考古研究所）を招聘した。また，2006年６月21日～７月１日に新疆自治区での遺跡・遺物見学を行った。参加したのは私と大学院生の田尻義了・徳留大輔・松本圭太くんである。この過程で，北方青銅器文化の研究をまとめることができた（宮本一夫編2008『長城地帯青銅器文化の研究』シルクロード学研究 VOL.29，宮本一夫2020『東アジア青銅器時代の研究』雄山閣）。

21世紀 COE プログラム「東アジアと日本」の別の研究プロジェクトとして「東アジアの交流と変容」があったが，その一環で，2003年２月と2003年９月に，韓国において遼寧式銅剣や細形銅剣などの青銅器の実測調査を行った。この調査に参加したのは、私と大学院生の田尻義了・鐘ヶ江賢二くんと学部生の古澤義久・船越陽くんであった（宮本一夫編2005『弥生早期の渡来人問題の考古学的研究』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室）。

おわりに

この30年間は，科学研究費を中心に様々な助成金をいただくことによって，ほぼ毎年フィールド調査を行うことができた。さらに，それぞれ素晴らしい遺跡に出会うことができ，かつ素晴らしい調査成果を得ることができた。こうした調査には九州大学を中心とする様々な研究者の参加を得，かつ九州大学の大学院生と学部学生の参加を得て可能になったものである。そうしたフィールド調査が，考古学と人類学を中心とした学際的な研究成果を生んでいる。こうした学際的研究は，鏡山猛先生と金関丈夫先生以来の九州大学の考古学の伝統の賜であると考えている。これを継続できたことを感謝するとともに，今後も継続して頂きたく願うところである。その意味で，中橋孝博さんや田中良之さんと共に考古学と形質人類学の学際的研究を進めてこられて来たことは，何よりも貴重で得がたい経験であった。そして，こうした発掘調査とその後の整理調査、そして発掘報告書の作成こそが，学生の考古学教育において重要であると確信している。私は，濱田耕作先生の教えにあるように，発掘調査後はいち早く発掘報告書を公開し，その研究成果を発信しなければならないことを戒めとしている。九州大学考古学研究室で行った発掘は、ほぼすべて発掘報告書を刊行してきた。そのことを誇りとしたい。

学生以来，中国青銅器と中国東北部から朝鮮半島・日本の先史土器を研究してきたが，こうした研究にあって，遼東半島の一次資料を手に取って観察することができたことが私自身の研究の推進力となっている。それが東亞考古学会によって行われてきた調査資料であった。また，梅原末治先生によって行われた1940・1941年の先史時代遺跡調査資料であった。後者の資料は、京都大学で収蔵されているが，戦後になっても発掘報告書が出版されていないままであった。これら

資料のうち，四平山積石塚と上馬石貝塚を再整理し，報告書を出版できたのは，九州大学考古学研究室在籍中であった。四平山の報告書（澄田正一・小野山節・宮本一夫編2008『遼東半島四平山積石塚の研究』柳原出版）は，2004～2007年度日本学術振興会科学研究費基盤研究（A）（海外学術調査）「日本水稲農耕の起源地に関する総合的研究」（宮本一夫代表）によって可能になった。上馬石貝塚の再整理は，2010～2013年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「遼東半島土器編年からみた弥生開始期の実年代研究」（宮本一夫代表）によって行われ，森貴教さんや三阪一徳さんら多くの大学院生が参加してくれた。出版にあたっては，2014年度科学研究費（研究成果公開促進費）によって可能になった（宮本一夫編2015『遼東半島上馬石貝塚の研究』九州大学出版会）。こうした戦前の植民地主義の下に行われた調査資料の発掘報告書を刊行でき，日本人研究者として責務を果たし安堵しているところである。そして何よりも，こうした１次資料を扱うことにより，学生以来の研究テーマである中国から九州に至る先史土器の編年大綱を確立できたことに感謝している（宮本一夫2017『東北アジア初期農耕と弥生の起源』同成社）。

以上のように，この30年間のフィールド調査を振り返ってきた。この過程が九州大学考古学研究室の歴史の一端を示していよう。そして，私の研究として，東アジアを横断する農耕の始まりと展開・拡散過程（宮本一夫2017『東北アジア初期農耕と弥生の起源』同成社），さらに牧畜社会の形成過程と，その両者を繋ぐ青銅器文化（宮本一夫2020『東アジア青銅器時代の研究』雄山閣）や初期鉄器文化（宮本一夫2023『東アジア初期鉄器時代の研究』雄山閣）の変遷を研究することができた。このことは，東アジア諸地域における古代国家成立に関わる問題でもあり，そうした研究ができたことをありがたく思っている。

第２章　九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座の初代助手として（1995年度）

高　久　健　二

初代助手とはいっても，在任していたのは1995年10月から1996年３月までのわずか６ヶ月間であり，しかも退職してから27年が過ぎており，当時の資料は手もとにはほとんど残っていない。当時の記憶もかなり曖昧なため，詳細について記述することは困難であるが，思い出として残っていることを中心に記してみたい。

九州大学大学院比較社会文化研究科は，当時，文部省が進めていた大学院重点化政策にともない，1994年４月に新たに発足した大学院大学であり，旧教養部を母体としつつも，そこに新たな教員を加えて再構築したものであった。９つの基幹講座と９つの協力講座からなり，カリキュラム上は日本社会文化専攻と国際社会文化専攻の二専攻に分かれていた。

助手の公募のお話をいただいたのは1995年６月頃であったかと記憶する。この年の２月に韓国の東亜大学校の博士課程を修了した後も，附属博物館で発掘調査資料の整理などを続けながら韓国に滞在していた。９月26日に留学先の釜山を後にして帰国し，10月１日に日本社会文化専攻の基層構造講座の助手として着任した。着任当時の基層構造講座には，講座を作られた田中良之先生をはじめとして，形質人類学の中橋孝博先生，ネパール調査から帰国したばかりの地理学の小林茂先生，ケンブリッジ大学の留学を終えて着任された溝口孝司先生がおられた。一方，箱崎キャンパスの考古学研究室も同じ比較社会文化研究科日本社会文化専攻の基層文明講座に所属するようになったが，学年進行上，従来の文学研究科も継続していた。箱崎キャンパスの考古学研究室には，在学時の指導教授であった西谷正先生，岡村秀典先生の後任として1994年に着任された宮本一夫先生がおられ，先輩である中園聡先生が助手を務められておられた（当時の考古学研究室については『九州大学考古学研究室の記録Ⅱ』を参照）。九大の考古学は六本松と箱崎に分かれて，それぞれ協力しつつも独自の路線を歩みはじめた時期といえる。

基層構造講座があった六本松キャンパスは，旧教養部キャンパスであり，中心部の天神にも近く便利な場所であった。ここは１・２年生時に通ったキャンパスでもあり，住んでいた田島寮も近くにあった。何年か前に六本松を久しぶりに訪れたことがあったが，キャンパスは跡形もなくなり福岡地方裁判所となっていた。着任当時は教養部時代に講義を受けた先生方が多く残られていた。とくに着任時の比較社会文化研究科長は福岡のテレビにもよく出演されていた西洋史の志垣嘉夫先生であり，教養部時代にフランス革命の授業を受けたことがある。在任中には中洲の料亭に連れて行っていただいたこともある（割り勘であったが）。1997年に先生の訃報を耳にしたときは，とても信じられなかった。

趣旨は異なるが，ここで少し教養部時代の六本松キャンパスでの思い出について記しておきた

い。当時，教養部の授業に考古学の科目が１コマだけあった。専門課程に進学する前に唯一受けられる考古学の授業ということもあり，考古学研究室に進学する１年生は必ず受講する科目となっていた。私の入学前は，当時佐賀大学におられた佐田茂先生がご担当されていたが，1986年度からは当時まだ九州大学医学部におられた田中良之先生が担当されることになった。ところが何かの必修科目と重なってしまい，考古学進学志望の１年生が履修できなかった。それを知った田中先生は不憫に思われたのか，正規の授業が終わった後に考古学進学希望の１年生のためだけに特別授業をしていただけることになった。場所は教養部キャンパス内の西側にあった学生会館（通称，学館）に決まった。学生会館の２階は学生たちが集会などで比較的自由に使える部屋がいくつかあった。授業内容については，正規授業と同じ内容のお話をされるのかと思いきや，James Deetz, 1967. *Invitation to archaeology*, Natural History Press. を講読することになった。当時はまだ翻訳本が出版される前であり，受験勉強の直後とはいえ，英語がそれほど得意でなかった私はみんなに付いていくのがやっとであった。それまで思っていた考古学の内容とは大きく異なっていたが，大学で考古学を学んでいるという実感が湧いてきて嬉しかったことを思い出す。この特別授業で学んだことは，その後，専門課程に進学したのちに大いに役立った。有名な墓石デザインのセリエーション図や考古資料の分布と時間の関係図などは今でも授業で使用している。

教養部キャンパスには旧制福岡高等学校歴史地理資料室の「玉泉館」があったが，1987年に校舎増築にともない解体されることになった。そこで所蔵資料を附属図書館に移すために，1987年の春に考古学研究室の助手であった藤尾慎一郎先生を中心に資料整理をおこなうこととなった。田中先生の特別授業を受けていた経緯で，まだ進学前の１年生であった私達にも声がかかった。玉泉館には旧制福岡高等学校教授であった玉泉大梁先生が教育・研究のために収集された考古資料や古文書類が多数保管されていた。時代を感じさせる展示棚と引出しのなかに土器や石器類が保管されており，さながら時間が止まったタイムカプセルのようであった。右も左もわからぬままに黙々と作業を手伝ったが，資料館の考古資料に触れるのははじめてであり，貴重な機会であった。写真撮影は文学部技官であったベテランの林崎价男先生が担当され，本格的な資料撮影をはじめて見ることができた。林崎さんにはその後，番塚古墳出土鉄器のＸ線撮影でも大変お世話になった。

話を基層構造講座に戻そう。韓国留学を終えて帰国したばかりであったため，九大のことはおろか日本の状況にも疎くなっており，研究室の重鎮であった金宰賢さんに研究室のことをいろいろと教えてもらう有様であった。基層構造講座の研究室は旧教養部本館の最上階のほうにあったと記憶する。本館にいる学生のほとんどは大学院生であり，モラトリアムを謳歌していた教養部の時とは雰囲気が一変していた。研究室は北側にあり，窓からは博多湾を望むことができた。夏に開催される大濠公園の花火大会がよく見え（残念ながらそれを堪能する前に退職をしてしまったが），花火を鑑賞しながら恒例の飲み会も行われていた。本館３階あたりに共同の助手部屋をもらってはいたが，日中は研究室にいることが多かった。基本的に助手は授業をもっていなかったが，田中先生と溝口先生が一緒におこなっていた「総合演習」には参加させてもらった。それは事前に日本文・英文のリーディングリストを読んで，授業では課題テーマに関してディスカッ

ションするというものであった。これは大学院の時に苦しんだ田中先生の授業と同じ形式であり，レベルも高く厳しいものであった。

いうまでもなく，田中先生と中橋先生は人骨考古学を進められており，先生の助手として発掘現場に行く機会もあった。田中先生からは大学院の授業で D. R. Brothwell, 1981. *Digging up Bones*, Cornell University press. をテキストとして手ほどきを受けたことはあったが，発掘現場で人骨の取り上げ作業を手伝うのははじめてであり，できるだけ邪魔にならないように気をつけた。田中先生とは宗像市の横穴墓，中橋先生とは小郡市の横穴墓の調査にご一緒させていただき，現場でしか学べない細かなノウハウを教えていただいた。1995年12月には鈴木孝雄先生の古病理に関する集中講義もおこなわれ，大学院生たちが人骨考古学を学ぶ環境が整えられていった。

当時，九州大学所蔵の古人骨資料は基層構造講座に所管が移っていたが，保管場所はまだ馬出キャンパスの医学部解剖学教室であった。ある日，田中先生からテレビ局が金関丈夫先生の取材に来るから手伝ってほしいといわれた。日本テレビ系列で放映されていた『午後は〇〇おもいッきりテレビ』の「きょうは何の日」のコーナーで「人類学者・金関丈夫が亡くなった日」の特集を組むらしい。医学部には教授であった金関丈夫先生のご遺体（骨格標本）が安置されており，それを取材したいとのことであった。はじめて公開されることもあり，緊張した雰囲気のなか取材は続いた。ご遺体を納めた木棺と合わせて金関丈夫先生のデスマスクが置かれており，それを見ていると，田中先生が「それは永井先生の作品だよ」とおっしゃられたことを覚えている。医学部解剖学教室の教授でおられた永井昌文先生には，考古学研究室の宴会で一度だけお目にかかったことがある。金関丈夫先生の命日である２月27日に番組が放映され，本館にあった談話室で田中先生たちと一緒に見たが，意外と真面目な内容にまとめられていたことに安堵した。

溝口先生は英国留学を終えて帰国されたのちに，基層構造講座の助教授として着任された。私が学部生の時の大学院生であり，たいへんお世話になったが，助手として着任した後も比較社会文化研究科の内情をいろいろと教えていただいた。当時，先生は考古資料が社会的諸関係の再生産にどのような役割を果たしたのかを明らかにする社会考古学の実践的研究を進められていた。とくに，筑紫野市永岡遺跡や朝倉市栗山遺跡をフィールドとして研究成果を発表されていた。また，前述した旧玉泉館所蔵資料の整理・報告も進められており，その後まもなく，縄文時代の土器と石器の資料紹介が『九州文化史研究所紀要』第40・41号に発表された。考古学を志す者であれば，物質資料から社会的諸関係を明らかにしたいと思うのは当然であり，先生からは最新の社会考古学やポストプロセス考古学について，もっと学びたかったが，残念ながら時間が足りなかった。

もうお一方，触れておくべき先生がおられた。地域資料情報講座の小池裕子先生である。先生は比較社会文化研究科の発足時に合わせて，埼玉大学教養部から教授として赴任された。先生はいうまでもなく貝殻成長線の研究で世界的に有名な方であったが，九大に来られてからは DNA 分析を中心に研究されていた。たしか先生の研究室（ラボ）は基層構造講座の研究室の向かい側にあり，ドアには“DNA Hunters”と書かれたポスターが貼られていたのを覚えている。地域資料情報講座には別に助手がいたが，研究室が近いためか，あるいは単に使いやすかったためか，先生は私に用事を頼まれることがしばしばあった。私が埼玉大学教養学部に赴任することが決ま

ると，以前におられた埼玉の考古学事情についていろいろと教えていただいた。

こうしている間にすぐに最後の３月がやってきた。３月は，５月11日に開催予定であった横山浩一先生の古稀記念パーティーの準備や赴任準備などで忙しく過ぎていったような気がする。横山先生は1989年３月に九州大学を定年退官され，その後は福岡市博物館長を務められていたが，私の留学中に東亜大学校にお越しになられたことがあった。年度末のあわただしいなかにおいても，様々な送別会をおこなっていただいた。とくに田中先生のご自宅にご招待いただいたことが思い出として残っている。３月23日に引越を済ませ，３月27日に大学院修了式に出席し，３月29日に福岡を発って埼玉に向かい，４月１日に埼玉大学教養学部の講師に着任した。

助手を務めた６ヶ月間はあっという間に過ぎ去っていったが，この間に学んだことは，その後，教員を務めていくうえで大いに役立った。九州大学では助手に１台ずつ最新型のパソコンが支給され，当時の最先端 OS であった Windows95がインストールされていた。それまで MS-DOS のパソコンしか使ったことがなく，当時はまだ１人１台個人用パソコンを持てる時代ではなかったので，たいへん驚いた。書籍や実物資料も豊富にあり，潤沢な研究費が支給されていた。これがいかに恵まれた研究環境であったかは，埼玉大学に行ってから痛感することになる。埼玉大学に赴任する際に，個人のパソコンを持たなかった私を不憫に思われたのか，田中先生がお持ちであったご自身のノートパソコンを餞別代りにいただいた。当時の個人研究費ではすぐにパソコンを購入するのが難しい状況であったので，このパソコンはその後しばらくの間，大いに活躍した。九州大学とのあまりにも大きな違いに戸惑いながらも，何とか研究環境の整備を最優先して進めていったが，結局，それらがある程度整うまでに約10年の歳月を要した。短期間とはいえ，素晴らしい研究環境のもとで働けたことは，その後の教員人生に大きな影響を与えた。私が助手として着任した時に，田中先生は40代前半であった。その歳をはるかに超えてしまった現在，はたし

図51　平成7年度九州大学大学院比較社会文化研究科修了記念写真（1996年３月27日）

て当時の研究環境レベルにどれほど近づけたのか不安である。もし，田中先生がご健在でおられたならば，何とおっしゃられるだろうか。

付記

当時，基層構造講座には多くの大学院生が所属していたが，箱崎の基層文明講座と分かれており，さらに文学研究科所属の院生もいて，とても複雑な状況であった。ある程度は覚えているが，記憶が曖昧な部分もあり，間違いがあると失礼になると思い，所属院生についてはあえて触れなかった。申し訳ないが，これについては次の助手を担当された金宰賢先生にお願いしたい。

第３章　九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座の1996～2000年

金　　宰　賢

1991年４月から箱崎キャンパスの文学研究科考古学研究室の研究生として留学生活を始めた私は1996年３月に博士後期課程を退学し，96年４月から高久健二先生が埼玉大学に移った後の基層構造講座の助手を突然に任された。言葉はもちろん学校生活でも不安が多かったが，個人的には多くのことを経験できるよい機会であった。助手という職を引き受けて，それを無事に終えることができたのは，当時の先生方と大学院生たちのおかげであり，今でもその感謝の気持は忘れていない。

1995年の前半期まで箱崎キャンパスと馬出キャンパスを行ったり来たりして，九州文化史研究施設で古人骨について学んでいた私は，大学院中心の比較社会文化研究科基層構造講座が新たに編成され，六本松キャンパスに研究室が作られることを正確には知らなかった。実をいうと，大学院大学が編成され，基層構造講座という名前の課程が新設されるが，考古学研究室の大学院生は大きく所属を区別せず，むしろ専攻選択の幅が広がり，単に箱崎の授業が多い院生と六本松の授業が多い院生に分かれる程度であると思っていた。ただ，私の場合は大学院移転が具体化され，大学院生として，そしてその後の助手として，箱崎 - 馬出（解剖学室）－六本松キャンパスすべてに通うことができたことは幸運であった。1994年に田中良之先生，中橋孝博先生，溝口孝司先生を中心とした基層構造講座が六本松キャンパスに作られ，新たな大学院生活を始めるようになった私たちは，新しい研究環境に適応するために努力を惜しまなかった。もともと六本松キャンパスには教養部があったが，新たに大学院が移り，基層構造講座は国体道路（国道202号線）に面する本部建物の最上階である６階に研究室を確保し，毎日夜遅くまで明かりがついているという研究室の雰囲気を作っていった。毎週演習が終わった後には，当時大学院生であった石川健，小沢佳憲，辻田淳一郎，濱名弘二，田尻義了，端野晋平，石井博司，徳留大輔，崔鐘赫氏たちの飲み会に付き合った。ある日，飲み屋で私たちがあまりにも考古学の話に熱をあげていると，店長が「六本松に大学院が移ってきたと聞いたが，どうも学部生ではないようなので，大学院生なのか」と尋ねてきたので，「そうだ」と言ったら，店長はこれまでの生徒たちの会話とあまりにも違うので不思議に思ったそうである。新たに始まった六本松の生活に適応するために大学院生たちも努力していた時期であった。1995年12月には鈴木隆雄先生の古病理に関する特講が開講されるなど，本格的に基層構造講座の姿が出来上がっていく時期でもあった。

1996年４月から私が助手を務めるようになって，最初に直面したことは九州考古学会の仕事であった。1996年３月に中園聡先生が助手を退職するにともない，それまで考古学研究室の助手が担当してきた九州考古学会の事務と雑誌編集の仕事を基層構造講座の助手が引き受けることに

なったのである。また，これまで西谷正先生が九州大学と釜山大学を中心に進めてきた合同考古学会を大きく拡大し，九州考古学会として本格的な合同考古学大会を初めて韓国で開催するという年でもあった。合同考古学大会はあまりにも規模が大きくなりすぎてしまったため，九州考古学会では手に負えず，初めて旅行専門イベント会社に依頼して実施した。この時から合同考古学大会は，九州側も釜山側も旅行専門のイベント会社を通じて実施するという形態になった。

1996年７月に開催された九州考古学会・嶺南考古学会第２回合同考古学大会は，「４・５世紀の日韓考古学」というテーマで韓国大邱市の啓明大学校で開催された。九州地域だけでなく全国の考古学関係者と学生たちが参加することとなり，日本側の参加者だけでも200人を超えた。結局，飛行機をチャーターして行くことになり，大加耶の遺跡の見学をする時も日本側だけでも大型バス７台に分乗するという異様な状況であった。日本の考古学者たちがこんなに韓国に来てしまって，果たしてこの期間，日本の考古学は大丈夫だろうかという笑い話も出るほどであった。合同考古学大会は盛況に終わり，大量のバスを動員した遺跡見学会も無事に終え，大会の最終日の送別会は牛１頭が丸ごと用意されるという大焼き肉パーティーとなり，日本側も韓国側も戦死者が続出し，パスポートを紛失して翌日帰国できなくなった学生まで出てしまったが，幸い九大の大学院生は皆無事であった。おそらく，これもこれまで積み重ねてきた練習の賜物であるに違いない。とにかく合同考古学会を成功裏に終えることができたのは，それまで九州大学と釜山大学が積み上げてきた努力の結果であることは言うまでもない。

田中先生と中橋先生を中心とした古人骨調査法の特講を，九州地域の福岡，大分，佐賀，熊本などの市，県の埋蔵文化財関係者を集めて実施したのも，この年の冬に入る頃であった。箱崎キャンパスの九州文化史研究施設にいた時にも古人骨の調査はあったが，六本松キャンパスに基層構造講座が作られると，古人骨調査の依頼はますます増えて，私は毎年180日以上が古人骨調査のための出張であった。この時期，一緒に古人骨を専攻していた大森円，舟橋京子両氏の活躍も顕著であった。

そして毎年12月の第２土曜日と日曜日の九州考古学会で一年を終え，学会終了後は箱崎の焼き鳥店である「陣太鼓」をスタートに，ラーメン店の「赤のれん」で焼酎・ラーメン・餃子で締めるというのが定番であった。

1997年は古人類資料準備室が整備された時期であった。古人骨調査の増加により，毎年研究室に入ってくる古人骨資料も増えて，当初，６階の研究室にあった保管場所も限界に達してしまった。このため田中先生のご努力によって新たに古人類資料準備室が確保できたが，その場所が旧教養部時代に教官休憩室として使われていた亦楽齊の建物であった。古い２階建の建物であったが，１階に古人骨資料を収蔵し，２階の畳部屋を古人骨整理室として使用することになった。単独の建物であったため，周囲を気にせず私を含む大森円，石井博司，舟橋京子氏たちが存分に人骨の分析作業をすることができた。亦楽齊の２階では韓国の蔚山のラジオ放送もキャッチすることができたので，特に私が一人で作業をする時はラジオを聞きながら古人骨整理をするという好事にも恵まれた。

六本松キャンパスの大学院大学がさらに充実しつつあった５月に，初代の比較社会文化研究科長であった志垣嘉夫先生が突然亡くなられ，大学が悲しみに包まれた。

1997年６月７日～29日に福岡市博物館の特別展示室Ｂで，九州大学と福岡市博物館との共同により「九州大学古人骨資料からみた日本人の形成，倭人の形成」を開催した。馬出キャンパスの古人骨資料をはじめとして，九州大学が持っている古人骨資料を展示し，多くの一般人の関心を集めた。そして，元岡遺跡に対する大規模な発掘調査計画もこの時期から始まった。

６月25日～28日に溝口孝司先生の招請によって，Ian Hodder 先生が九州大学を訪問され，私たちは26日に Ian Hodder 先生の特講を直接聞くことができるという幸運に恵まれた。そして，いつものように箱崎の「陣太鼓」で Hodder 先生を囲んで先生方と大学院生たちによる歓迎会がおこなわれた。座敷に慣れていない Hodder 先生は苦労して座っておられたようだが，それでも考古学についての真剣な話が続き，全員一生懸命に聞いていた姿が今でも思い出される。会の最後には飲んだ焼酎の一升瓶に Hodder 先生がサインをし，構口先生がそれを大切に持ち帰られた。

1998年２月には西田正規先生の集中講義があり，３月25日は地理学の小林茂先生の送別会があった。小林茂先生は６階の研究室に頻繁に来られて大学院生と話し，いつも考古学の話に興味を示されて楽しんでおられた記憶が残る。７月25日・26日には熊本市で九州考古学会・嶺南考古学会の第３回合同考古学大会が開催され，事務的な仕事は基層構造講座で担当していた。大会のテーマは「環濠集落と農耕社会の形成」とし，熊本市内の熊本テルサホテルでおこなわれた。熊本大学や熊本市のご尽力により，韓国側からは100人を超える参加者があった。

1999年から基層構造講座の行事はほぼ従来のパターンに戻った。新年の始まりは常に前年の九州考古学会の研究発表要旨と総会の概要が掲載された『九州考古学』の発送であった。４月には福岡城の花見大会をスタートに，新入生歓迎コンパが行われた。これは新たに入学する大学院生を対象とした集中講義が終わった後に行われたものであり，大学院生にとっては良い記憶として残っているはずである。ほぼ毎月，九州考古学会の会議があり，北九州市で行われた古文化研究会にも参加した。古文化研究会には常に小田富士雄先生と武末純一先生が出席され，亡くなった松永幸男氏が事務的なことを担当され，九州の考古学はもちろんのこと韓国や中国の考古学に至るまで様々なテーマが取り上げられていた。日曜日の午後１時から研究会がある日には，いつも田中先生と私は小倉駅に降りた後に駅の立ち食いうどんを食べてから向かったことを覚えており，今でもそのうどんを食べたくなる時がある。九州考古学会は２年ごとに合同考古学会が開催されたため，会議の回数も多かった。事務局が六本松にあったため，武末先生は基層構造講座の研究室に頻繁に来られ，大学院生ともよく対話されていた。毎年夏に大濠公園で開催される花火大会には，六本松の基層構造講座の研究室に先生方と学生たちが集まり，窓から花火を見ながらビールを飲む口実を与えてくれた。そして，六本松でのもう一つの楽しみが，演習の日が福岡ドームでのダイエーホークス（現ソフトバンクホークス）の試合と重なると，演習の後に皆で福岡ドームへ応援に行くことであった。田中先生，溝口先生と大学院生の皆がビールを飲みながらホークスを応援した。1999年10月28日，中日ドラゴンズとの日本シリーズ第５戦でホークスが優勝した日は，私も間違いなく九州人であることを確信した。今でもホークスの応援歌を聞くと右腕に力が入る。優勝した年に買った純白の応援セットは今でも大切にしている。

大学院中心の比較社会文化研究科が誕生し，考古学研究室から引き継がれた基層文明講座と新しく設置された基層構造講座は，1990年代から2000年代へと移り変わる時期に九州大学の考古学

を大きく変化させ，発展させる役割を担ったといえる。

演習・研究会の後の懇親会や歓迎会は常に「陣太鼓」で行われ，そこにはいつも田中先生が一緒におられた。田中先生は私たちと話をするとき，よく両手でネクタイをパタパタする癖があった。ある日，私と石川健，小沢佳憲，辻田淳一郎，濱名弘二，田尻義了，端野晋平，原田智也，崔鐘赫の諸氏がネクタイを締めてきて先生の前でパタパタして先生を笑わせたこともあった。

1996～2000年は田中先生をはじめとして，溝口先生，中橋先生，西谷先生，宮本先生がおられ，先生方から学ぶために全国から集った大学院生がいた。1999年に比較社会文化研究科に所属していた大学院生は以下のとおりである。

博士課程：今村佳子，大森円，黄建秋，俵寛司，崔鐘赫，石川健，小沢佳憲，辻田淳一郎，濱名弘二，岡田裕之，舟橋京子，陳洪

修士課程：平美典，井村公洋，貞國行義，佐野和美，田尻義了，德留大輔，端野晋平，原田智也

1999年と2000年には，韓国の泗川勒島遺跡の古人骨調査と大邱林堂遺跡の古人骨調査に，大森円，舟橋京子，石川健，石井博士，小沢佳憲，辻田淳一郎，平晋平，上角智希の諸氏が田中先生と共に参加した。この時期は九州大学の大学院生全員が韓国語と古人骨調査ができると周りから認識されていた。

図52　1996年第２回九州考古学会・嶺南考古学会合同考古学大会記念写真

付記

古人骨の調査は，九州全域はもちろんのこと，山口，近畿，東京の近辺まで行われた。一緒に調査を行った大学院生の名前をすべて記すことができなかった点はご容赦願いたい。覚えていることを何とか書こうとしたが，なにせ20年も前のことなので思い違いがあるかもしれない。特に1999年の後半期から2000年に助手を終えるまでの期間は博士論文の準備で多忙な時期であった。現在のようにスマートフォンが普及している時代ではなかったので，残念ながら当時の写真はほとんど手もとに残っていない。私自身に刻み込まれた九州大学の思い出は幸運の記憶でしかない。しかし，2015年３月に61歳で突然に亡くなられた田中先生を思い出すと胸が痛む。

第４章　2002年４月から2004年３月までの考古学研究室

岡　田　裕　之

１．はじめに

気がつけば，私が考古学研究室の助手を務めてから，早や20年が経とうとしている。大学が伊都キャンパスに移転してからというもの，箱崎や六本松キャンパスのあった街並みもすっかり様変わりし，かつて学んだキャンパスへの郷愁も次第に失われつつある。また，ここ数年はコロナ禍が席巻し，すっかり出不精になってしまった。そんなこともあってか，大学や考古学研究室への足も遠のき，とんとご無沙汰している。

ようやくコロナ禍から回復の兆しが見えはじめた2022（令和４）年の夏頃，宮本一夫先生の退職記念論集の執筆案内がメールで届いた。宮本先生も来年で退職かと感慨にふけりながら，論集への寄稿を決め，ぼちぼちと準備を進めようと考えていた矢先，当のご本人の名義で封書が届いた。中身は，助手在任期間の記録の執筆を依頼する手紙と『九州大学考古学研究室の記録Ⅱ』の冊子であった。「そんな昔のことを・・・」と思いながらも，その冊子に目を通すと，過去の助手の先輩方はかなり詳細な記録を記されており，流石は考古学界の第一線で活躍されてきた方々だとあらためて感銘を受けた。このような華々しい考古学研究室における歴史の生き証人たちの末席に置いていただくのは分不相応ではあったが，助手の任を担った以上，ともかくも引き受けることとした。

とはいえ，20年前の記憶などほとんど遠のいており，当時の記録・資料等も引越しの度に散逸または廃棄してしまい，頼みの綱であった当時の同窓会報も残っていなかったので，まずは材料集めから始めなければならなかった。幸い当時の手帳が残っていたため，本文はその記述を参考にしつつ，当時の発掘調査報告書や写真等から断片的な記憶を掘り起こしながら執筆している。

２．考古学研究室の構成員

１）考古学研究室の体制

2002（平成14）年３月に西谷正先生（現・名誉教授）が退官された後，当面は新たな教官の採用がないため，たまたま博士後期課程を満期退学する予定であった私が助手として採用されることとなった。大学制度改革のため，文学部全体での助手の人数は大幅に削減されたが，なおも２年間の任期付きの助手が，各講座持ち回りで６名程度在籍していた。考古学講座では，1996（平成８）年３月に中園聡助手（現・鹿児島国際大学教授）が退かれて以降は，助手のポストは空白であったため，６年ぶりの採用ということになる。なお，「助手」（当時は文部科学教官）という名称は，私の退任後，「助教」に名実ともに変更されたため，私が名目上は最後の考古学講座の

「助手」ということになろう。

さて，助手不在の間には，先述のとおり大学制度改革が着々と進められており，2000（平成12）年４月からは，大学院重点化により大学院人文科学研究院と人文科学府が誕生し，教官は人文科学研究院，大学院生は人文科学府の所属ということとなった。これによって，箱崎の研究室には，従来の大学院比較社会文化学府比較基層文明講座の大学院生と合わせて，多くの大学院生と学部生が在籍することとなった。

2002年度の箱崎キャンパスの研究室では，主に宮本一夫助教授（当時）が，講義や演習，実習を担当し，私も実習の一部を受け持った。2002年11月には，宮本先生が教授に昇任され，その後，2003（平成15）年10月に，福岡県教育庁から，辻田淳一郎先生（現・准教授）を専任講師として迎え，教授・講師・助手の３人体制となった。

一方，六本松キャンパスの比較社会文化研究院基層構造講座では，亡くなられた田中良之教授をはじめ，岩永省三総合研究博物館教授，溝口孝司助教授，中橋孝博教授，佐藤廉也助教授，石川健助手（いずれも当時の職名）が指導に当たられた。

また，埋蔵文化財調査室には西健一郎助手が在籍され，春日キャンパスの発掘調査や整理等を担当されていた。

２）学部生・大学院生等

当時の学部生は，２年次から専攻に振り分けられるようになっており，2002年度の進学生として，今井隆博（現・福岡市役所）・上原利恵・鈴木克・東本宗一郎・松葉祐輝・丸尾弘介（現・山口市教育委員会）・山口小百合（いずれも当時の姓。以下同じ）を迎えた。2003年度には，奥野正人（現・下関市立考古博物館）・金子光太・久保あかね・下澤聡・関戸英樹・砥綿こずえ・藤本佳孝・松本圭太（現・九州大学）・吉村由美子・渡部芳久（現・佐賀県教育庁）が進学した。

2002年度の卒業生には，大下真輝・小田裕樹（現・奈良文化財研究所）・木村友宏・猿渡由佳・西田絵美・前野みさき・山根謙二（現・美祢市教育委員会）・渡辺誠（現・香川県教育庁）がおり，2003年度の卒業生には，石田智子（現・鹿児島大学准教授）・内田耕一・城門義廣（現・福岡県教育庁）・春別府紗里・福本裕一・船越陽・古澤義久（現・福岡大学准教授）・三宅美帆・森博子・森田貢代がいる。

大学院生は，2002年度の大学院人文科学府修士課程の入学生として，金子朋子・久保朋子・丹羽崇史（現・奈良文化財研究所）・福田匡朗（現・熊本県教育庁）がおり，2003年度には榊原俊行・神野晋作・竹内康介・前野みさきが入学した。当時の博士後期課程には，比較社会文化学府比較基層文明講座に濱名弘二・田尻義了（現・九州大学准教授）・佐野和美・徳留大輔（現・出光美術館）が，人文科学府に谷直子（現・九州大学埋蔵文化財調査室助教）・降矢哲男（現・京都国立博物館）・上條信彦（現・弘前大学教授）が在籍していた。

この年代の学部生や大学院生の多くが，大学や研究機関，埋蔵文化財行政等，考古学関係の分野で現在も活躍している。そして，私が大学院生の頃から開始された５月の新歓懇話会と，２月の卒論・修論発表会は，現在に至るまで継続して行われており，学部・大学院生と卒業・修了生が交流する機会ともなっている。

また，私の助手在任中には，学部・大学院への海外からの留学生はいなかったが，2002年度は，韓国忠南大学校大学院から李宰旭氏が研究生として在籍し，2003年３月には，ドイツからバーバラ・ザイオク氏が短期間の研究員として来訪した。

３．授業

学部と大学院人文科学府，比較社会文化学府比較基層文明講座の授業は，西谷先生退職後，辻田先生着任までの間は，宮本先生が一人で講義と演習，実習のほか，英書・中国書・ハングルのすべての講読の授業をこなされた。私も演習と実習の一部を任された。辻田先生着任後は，講義と英書講読を担当し，演習は教官３人で担当した。

すでに教養部は廃止されており，１年次から４年次を対象とした学部共通教育が実施されていた。その関係で比較社会文化研究院から田中先生や溝口先生が来られ，箱崎キャンパスで講義を行った。

また，最も大きな変化として，2003年度から，九州大学21世紀 COE プログラム（人文科学）「東アジアと日本：交流と変容」が採択され，同年度から，大学院人文科学府考古学講座と，比較社会文化学府基層構造講座・比較基層文明講座の間で領域横断ゼミが実施された。六本松キャンパスで実施された領域横断ゼミは，上記の講座共同で学生の研究発表の場を設けたもので，指導教官も田中良之教授，岩永省三教授，宮本一夫教授，中橋孝博教授，溝口孝司助教授，佐藤廉也助教授，辻田淳一郎講師，石川健助手（いずれも当時の肩書）のそうそうたる顔ぶれに加え，岡田も加わった。とくに大学院人文科学府から参加した大学院生たちは，前年度までの演習発表と全く異なる雰囲気に戦々恐々としたろうことは，想像に難くない。教官の側も，一人ずつコメントを行うため，かなり授業時間が長くなったことを記憶している。最後の方になるとコメントがなくなる恐れがあるので，助手から発言させていただいたのは，せめてもの救いであったが，やはり他の先生方は，いろいろな角度から発言されるので，コメントが出尽くすということはなかった。演習の後は，比較社会文化学府の大学院生の恒例にしたがい，六本松界隈に繰り出し，教官も交えて飲み会を行った。

これらの授業に加え，外部講師による集中講義も実施された。これも，大学院人文科学府及び文学部，大学院比較社会文化学府それぞれで，講師をお迎えした。2002年度は，博物館概論で出光美術館の弓場紀知先生（９月２日～６日），大学院人文科学府と学部では，京都大学の上原真人先生（７月15日～19日）と早稲田大学の岡内三眞先生（12月9日～13日），大学院比較社会文化学府基層構造講座では，明治大学の石川日出志先生（９月９日～13日）をそれぞれお招きした。博物館学の視聴覚教育論は，通年で北九州市立いのちのたび博物館の藤丸詔八郎先生にお願いした。2003年度は，大学院人文科学府と学部では，韓国円光大学校の李タウン先生を２度にわたってお招きし（７月７日～11日，12月22日～26日），大学院比較社会文化学府基層構造講座では，愛媛大学の下條信行先生（12月８日～12日）と，専修大学の土生田純之先生（2004年１月27日～31日）をそれぞれお招きした。慣習に倣い，集中講義を実施する週の木曜日には，学生主催の懇親会が設けられたが，それに先立って，招聘した先生と教官方との懇親会をセッティングするのは，考古学講座と基層構造講座それぞれの助手の役割であった。集中講義が近づくと，先生方の

予定を調整し，『美味本』をめくりながらお店を探したものである。

４．発掘調査等

2002年度から2003年度にかけて，２次にわたる長崎県小値賀島遺跡群の発掘調査を実施した。この調査は，宮本先生による日本学術振興会科学研究費の「弥生時代成立期における渡来人問題の考古学的研究」に基づいて実施されたものであった。第１次調査は，2002年９月26日から10月７日まで，小値賀島内の殿崎遺跡，神ノ崎遺跡，シャラジ遺跡の発掘調査を実施した。殿崎遺跡では縄文時代中期～後期の遺物包含層を，神ノ崎遺跡では弥生時代中期前半以前の石棺墓を確認した。私が主に担当したシャラジ遺跡は，弥生時代前期の甕棺墓が確認された地区にトレンチを入れたが，期待に反して，12～13世紀代に築かれたと考える石積み遺構を確認した。その一方で，当初の予定にはなかったが，当時，博士後期課程の大学院生であった降矢哲男君が中心となって，近くに所在する西林寺の石塔や板碑を調査し，成果をおさめた。第２次調査は，2003年９月19日から９月30日まで，第１次調査で縄文時代の遺物包含層と多数の遺物を確認したことから，殿崎遺跡に絞って発掘調査を実施するとともに，GPS を用いた遺跡分布調査を併せて実施した。

さて，小値賀島への旅程は，調査前日の深夜に博多港を出港するフェリー「太古丸」に乗船し，小値賀港に早朝５時前に到着するため，フェリーで若干の睡眠をとった。小値賀島に到着後，港近くの民宿「小西旅館」で仮眠と朝食を済ませ，眠い目をこすりながら現場へと向かい，運搬の手配をしておいた発掘機材の到着を待った。調査期間中は，小値賀町若者交流センターに宿泊し，炊事・洗濯等は大学院生・学部生が交替で行った。現地へは，朝８時に宿舎を出発し，昼休みと少しの休憩を挟んで，夕方６時までぶっ通しで発掘調査を行った。現場にトイレがないので，途中，宿舎まで，車で女子学生の送り迎えを行った。現在，行政の現場に携わっている身からみても，結構，過酷な日程であったと思うが，その分，宿舎での夕食と飲み会は疲れを癒せた気がする。ちなみに，朝夕食は，ご飯と味噌汁に加え，メインディッシュが島名産のあごの蒲鉾で，それがほぼ毎日続き，昼食のほか弁が待ち遠しかったことを記憶している。一方，資金不足ではあったが，関係者からの差し入れで，ビール等の酒類には事欠かなかった。

５．九州史学会と九州考古学会

かつては九州考古学会総会と九州史学会考古学部会が共催されていたが，両者が分離し，九州考古学会総会は11月に，九州史学会考古学部会は従来通り12月第２週に実施されるようになった。以前は，12月第２週には，多くの埋文関係者の姿が箱崎キャンパスでみられたが，分離して以降，随分と閑散とした。とはいえ，史学会全体の運営は助手の重要な役割であり，そのために史学科に助手２名が残されたといっても過言ではない。2002年度は朝鮮史学講座の李美子助手，2003年度は日本史学講座の松尾弘毅助手と一緒に運営に当たった。

大きな仕事としては，史学会の会場予約や発表要旨集の編集・作成，当日の会費徴収や弁当販売等があった。なかでも，弁当は事前に適当な数を注文しなければならず，当日になって参加者の注文をとるため，売れ残らないかが心配であったが，その辺りは史学科の先生方のご配慮でなんとかなった。

史学会当日は，１日目の土曜日に講演やシンポジウムが行われた後，大学院生・学生が会場設営に当たるほか，２日目の発表レジュメをホッチキスで止め，その後に研究室で打上げを行う風景は，以前のままであった。

なお，九州考古学会については，比較社会文化研究院の石川助手を中心とする基層構造講座の大学院生が主に運営に当たった。かつては，『九州考古学』の編集業務も考古学研究室の助手が担当していたようだが，この作業がない点はかなり気が楽であった。

６．研究事業等

先述のとおり，2003年度は，九州大学21世紀 COE プログラム（人文科学）「東アジアと日本：交流と変容」が採択され，先ほどの領域横断ゼミにみるように，その後の考古学講座のあり方を大きく変えていった。史学系の教官や院生・学生間の交流のみならず，海外大学とのコンソーシアムの締結に向けて具体的に動き出した年でもあった。その前年度は，採択に向けて，先生方は夜遅くまで会議や資料等の作成で大変そうに見えた。

COE プログラムと関連して，2003年２月７日から２月11日にかけて，宮本先生が中心となって韓国釜山の東亜大学校博物館や東義大学校博物館で青銅器の調査を行ったほか，周辺の倭城等の踏査も実施している。余談だが，その際に，以前九大に在籍された崔鐘赫氏（現・慶南文化財

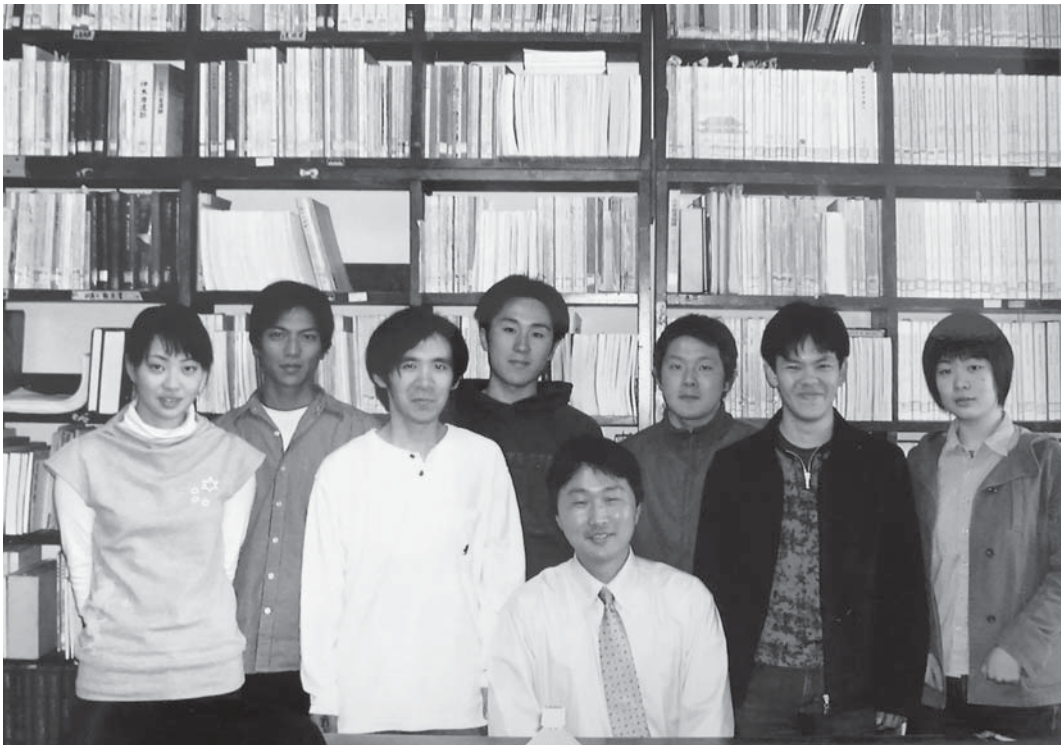


図53　2002年度進学生（研究室の本棚をバックに，写真左から，山口小百合・鈴木克・丸尾弘介・東本宗一郎・岡田・松葉祐輝・今井隆博・上原利恵）

図54　第１次小値賀島遺跡群発掘調査の記念撮影

研究院）の結婚祝いと称して，釜山・海雲台のホテルで宴会を催し，崔氏の計らいにより，そのままホテルのスウィートルームに無料で宿泊できたことが印象に残っている。

2003年11月19日から11月24日にかけては，大学院比較社会文化研究院の溝口孝司先生の引率により，田中良之先生をはじめ，比較社会文化学府の大学院生らで，イギリス・ロンドンの大英博物館のほか，ストーンヘンジの踏査を行い，私も同行させていただいた。

また，2003年12月６日と12月７日に第１回講演会「東アジアと日本：交流と変容」が開催され，歴史学系教官を中心にCOEプログラムの方向性についての講演が行われた。2004年１月31日と２月１日には，シンポジウム「東アジア社会の基層」が開催され，国内のほか，中国や韓国，イギリス，ロシアの研究者が招かれ，闊達な議論を行った。

このように，COEプログラムをとおして，東アジアをはじめとする海外との交流が活発となり，海外留学を行う大学院生が，以前と比べて増えていくのもこの頃からである。

さて，宮本先生は，日常の教育や大学業務のかたわら，精力的に海外調査を行い，2002年５月にスウェーデン，同年７～８月にロシア，2003年２月に中国，同年７～８月にロシア等，世界各地に出張されている。そのようななか，それまでの教育・研究の成果が評価され，第16回濱田青陵賞を受賞され，2003年10月18日（土）には，博多都ホテルにて受賞記念パーティーが催された。

一方で，2001（平成13）年度から，宮本先生と大学院人間環境学研究院の出口敦助教授らとの共同研究として，九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト「遺跡情報の活用と共有によるまちづくり支援情報システムの構築に関する研究」が進められ，現在の九州大学移転

地である糸島地域を中心に，地理情報システム（GIS）を利用した遺跡の活用研究にも取り組んだ。その成果の一部として，2003年３月19日と同年11月８日・9日には，シンポジウムが開催されている。

７．日常業務等

さいごに，助手の日常的な業務にも触れておきたい。朝８時半までには出勤し，事務室横にある考古学研究室のポストで郵便物を確認し，とくに急ぎの仕事がなければ，電話番をしながら，自分の研究等にも専念できた。しかし，仕事は突然に降りかかってくるもので，郵便物の発送や資料調査の依頼等があり，その時は当然対応しなければならなかった。とくに多かったのは図書の受け入れで，書籍や雑誌，報告書等，寄贈や購入した膨大な図書が，毎日のように入ってきた。さすがに九大だけあって，日本はもとより，韓国・中国書のほか洋書等，各種の図書があり，外部にいるとわかるのだが，本当に宝の山だったと思う。この図書を学生の力を借りながら，定期的に配架するが，そのうち本棚のスペースがなくなるので，夏休みには学生総出で図書整理を行った。私の在籍当時は，まだ多少の余裕があったと記憶しているが，移転するまでもったのだろうか。

また，大学移転に向けての動きが少しずつ本格化していったのもこの頃であった。当時の箱崎キャンパスには，陳列室が２か所あり，廊下には八女の窯跡の資料を収納した木棚や写真等を収めたロッカーのほか，甕棺等が置かれていた。この甕棺は，廊下の奥の階段をも占拠していたことから，防災上の理由もあり，ある時期，外にあったプレハブに一部を移動した。そのほか，外のプレハブには，過去の調査で出土した遺物コンテナや図面類，発掘機材等が入れられていた。大学移転に先立ち，これらの資料を確認し，データベース化する作業も学生とともに行った。とくにプレハブでの作業は，暑い中，クモの巣やほこりを払いながら行い，なかなか往生した。ただ，救いだったのは，田崎博之助手（現・愛媛大学教授）の時代に，かなり詳細な資料の配置図が作成されており，それとほとんど照合できたことである。先人の丁寧な台帳作りに敬意を表したい。

８．おわりに

以上，とりとめもなく思いつくままに書き綴ったが，２年間という短い間にも多くの出来事があった。この時期，大きな大学改変を迎え，その業務を抱えた先生方はご多忙だったと思うが，そのようなことはおくびにも出さず，時には叱咤しながらも，鍛えてくださったと思う。いまだに学恩に報いることはできていないが，この時期の経験があればこそ，曲がりなりにも，この業界に踏みとどまることができているのではないかと感じている。

大学が伊都キャンパスに移転してから久しく，私が大学院生の時に在籍した比較社会文化研究科も今はもうないが，考古学研究室はまだ続いている。九大の考古学研究室は長い歴史を誇り，国内でも有数の収蔵品や図書を備え，優れたスタッフが在籍してきた。私が言うのはおこがましいが，この恵まれた環境を十分に活かせた人たちが，考古学界をリードする存在となってきたと思う。後に続く学生には，このよい伝統をつないでいって欲しいと願っている。

第５章　2007年度の基層構造講座

板　倉　有　大

筆者は，九州大学大学院比較社会文化学府博士課程（基層構造講座）を2007（平成19）年10月31日に単位修得退学し，同11月１日付で同講座の特任助教に着任した。翌2008（平成20）年３月31日付で特任助教を退職したため（同４月１日から福岡市教育委員会文化財専門職），わずか５か月だけの助教であった。大半が学生としての視点ではあるが，当時の基層構造講座の様子を思い返してみたい。

１．当時の教員と院生

教員　田中良之教授，中橋孝博教授，溝口孝司准教授，佐藤廉也准教授

非常勤講師　若林邦彦先生（同志社大学）

博士課程２年　邱　鴻霖，能登原孝道，山根謙二

修士課程２年　石田智子，岩下芙沙，渡部芳久

修士課程１年　石井陽子，奥野正人，西江幸子

科目等履修生　貞國行義

筆者は年度の前半は講座の博士課程4年目・RA（リサーチ・アシスタント）として，後半は特任助教として，主に田中先生の指示のもとに講座の庶務と九州考古学会事務局の仕事をしていた。

２．研究室の様子

当時の基層構造講座は，21世紀 COE プログラム『東アジアと日本：交流と変容』が終了し，研究員などで在籍されていた先輩方が一斉に研究室を離れた時期でもあった（前年の2006年度在籍は，石川健助手，端野晋平 COE 研究員，田尻義了日本学術振興会特別研究員 PD（以下，学振 PD），徳留大輔学振 PD，博士課程３年以上に岡崎健治，重松辰治）。筆者はオーバードクター１年目で，公私において節目の時期であったが，突然特任助教の話を頂いて慌ただしく着任した経緯である（溝口先生の平成18年度日本学術振興会賞受賞に伴う特任助教採用であった）。

講座としては，年度はじめの「集中ゼミ」にはじまり，考古学・人類学・社会学の理論学習と個別資料の分析を両輪で進めるという基本方針は変わらなかったが，院生の研究においても出土資料の元素分析など理化学的手法が実践されはじめていた。また，院生の世代が1980年代生まれ主体へと移っており，それまでの昭和の名残がさらに薄れつつあったように思う。筆者が講座を去る際には，後輩たちが寄せ書きの色紙を贈ってくれてうれしかったが，そのようなアットホームな雰囲気も今までにないものに感じた（それまでは研究室を離れる人を飲み会で追い出すだけ

だった)。六本松キャンパスから伊都キャンパスへの講座の移転準備も本格化しつつあり，様々な「変化」を感じながら研究室を後にしたことを覚えている。

図55　2007年１月17日　大分県宇佐市福勝寺古墳の見学
(左から鈴木克（2006年度修士課程２年)，舟橋京子（人文科学研究院学振 PD)，田中良之先生，能登原孝道，山根謙二，渡部芳久，邱鴻霖，村上久和氏（大分県教育委員会)。筆者撮影)

図56　2006年11月17日　台湾人骨調査
(左から筆者，舟橋京子（人文科学研究院学振 PD)，邱鴻霖，田中良之先生，渡部芳久。能登原孝道撮影)

第６章　2008～2011年度の基層構造講座

端　野　晋　平

はじめに

このたび，宮本一夫先生から，九大の考古学関係研究室の助手（助教）を務めた一人として，その当時の研究室の様子について，執筆するよう依頼を受けた。しかし，わたしが助教として，比較社会文化研究院（以下，比文と略する）・基層構造講座に在籍したのは，2008年度のたった１年間だけである。それだけでは，あまりに内容が薄くなりすぎて，与えられたテーマに十分応えられる自信はない。そのため，本稿ではそのあとの日本学術振興会特別研究員 PD として３年間，在籍したときまでの状況を語りたいと思う。

わたしが務めた基層構造講座の特任助教は，溝口孝司先生が学内で獲得したプロジェクトの枠での雇用で，任期は１年，さらに１年だけ延長が可というものであった。特任助教１年目に，日本学術振興会・特別研究員 PD の内定が得られ，2009～2011年度は PD という立場で，引き続き九大に在籍した。受け入れ教員は，人文科学研究院（以下，人文と略する）・考古学研究室の宮本先生であったが，日常的な研究活動の場としては，基層構造講座の研究室を利用させていただいた。そこで，以下の４年間の記憶・記録も，基層構造講座でのこととなる。

現在，基層構造講座，考古学研究室はともに伊都キャンパスの同一建物内に所在しているが，当時，基層構造講座は六本松キャンパス（2009年度から伊都），考古学研究室は箱崎キャンパスというように，異なるキャンパスに所在していた。このように，地理的な距離は離れていたとはいえ，二つの研究室のあいだには，もちろん日常的に活発な交流があった。しかし，基層構造講座に軸足を置いていた立場上，考古学研究室については詳しく語ることができないため，本稿では触れない。ご容赦いただきたい。

執筆にあたっては，当時の名簿や写真，基層構造講座の公式サイトやブログ，九州考古学会の公式サイト，『九州考古学』などを参考にしたが，なにぶん記憶力の悪いわたしのことであるので，誤りや勘違いもあるかもしれない。ご寛容いただきたい。

１．基層構造講座のメンバー

2008年度（図57）

基層構造講座の教員は，田中良之教授，中橋孝博教授，溝口孝司准教授，佐藤廉也准教授に特任助教のわたしという布陣であった。総合研究博物館の岩永省三教授が同講座の兼任教員を務めておられた。人文の考古学研究室（比文・基層文明講座）には，宮本一夫教授，辻田淳一郎准教授がおられた。協力講座の生物多様性講座には，小池裕子教授がおられた。埋蔵文化財調査室に

は，田尻義了学術研究員が在籍していた。日本学術振興会・特別研究員 PD として，舟橋京子さんが在籍していた。博士後期課程には，邱鴻霖さん，山根謙二君が在籍し，石田智子さん，桑畑光博さんが入学した。修士課程には，石井陽子さん，奥野正人君，西江幸子さんが在籍し，岩橋由季さん，高椋浩史君が入学した。交換留学生として，韓国から李ハヤンさん，国費留学生として，スペインから Hernandez Sambeat Paula さん，フランスから Perrin Helene Marianne さん，科目等履修生として，貞國行義君が在籍していた。

この年度で，邱鴻霖さんは博士号を，石井陽子さん，奥野正人君，西江幸子さんは修士号を取得し，それぞれの世界へと羽ばたいていった。わたしは日本学術振興会・特別研究員 PD が内定し，特任助教は１年で辞することを，田中先生にお話しした。田中先生は，もう１年特任助教をしてはどうかとおっしゃってくれていたが，わたしは PD の方が科研費をもらえるなど，条件が良いという理由で，これを固辞した。このとき，特任助教をつづけることを勧めてきた先生の意図はもういまとなってはわからない。

2009年度

舟橋京子さんが日本学術振興会・特別研究員 RPD として復職した。わたしも日本学術振興会・特別研究員 PD という立場にかわった。前年度に国費留学生であった Perrin Helene Marianne さんが，博士後期課程に入学した。修士課程には，谷澤亜里さん，早川和賀子さん，米元史織さんの３名が入学した。この年度で，山根謙二君は単位取得退学し，社会に出ていった。Hernandez Sambeat Paula さんも帰国した。

2010年度

秋入学制度が導入され，博士後期課程に，李ハヤンさん，吉村和昭さんが入学した。前年度に修士号を取得した岩橋由季さん，高椋浩史君が博士後期課程に進学した。研究生として，河野（西野）麻耶さんが在籍した。訪問研究員として，韓国・東亜細亜文化財研究院の裵徳煥さんが在籍した。Perrin Helene Marianne さんは母国で職を得たということで，この年度限りで帰国した。

2011年度

舟橋京子さんが総合研究博物館の助教に着任した。石田智子さんが学術研究員に着任した。前年度に修士号を取得した谷澤亜里さん，早川和賀子さん，米元史織さんが博士後期課程に進学した。イギリスからロジャー・フェラーリ君が博士後期課程に入学した。修士課程には，中井歩さんが入学した。

２．六本松から伊都への移転

2008年度，特任助教であったわたしの最も大きな仕事は，研究室の六本松キャンパスから伊都キャンパスへの移転作業であった。この移転は，1991年に決定された伊都キャンパスへの統合移転計画のなかで行われたものである。すでに計画の第Ⅰステージとして，箱崎キャンパスにあった工学系の移転が2005～2006年に完了しており，つづく第Ⅱステージとして，基層構造講座の所在する比文などの移転が実施された。

移転作業においてのわたしの仕事は，備品レイアウトの作成，作業時の立会，書籍の棚入れ作

業の指揮などであった。九大考古学研究室では移転作業のときのレイアウトは，代々助手の仕事であったらしい（過去の考古学研究室の移転では木村幾多郎先生がご担当されたという）。そのためか田中先生から，その仕事を任されたと思う。研究室や書庫スペース，助手部屋，人骨実習室（亦楽斉）などの関連部屋に置いていた本棚やラックなどの什器やさまざまな機材の寸法を，院生の協力を得て計測し，それを移転先の建物配置図のなかに，はめ込んでいく作業であった。移転作業は業者任せであったが，搬出入の現場に立会い，業者から何か問われたときに，それに応えるのも仕事であった。荷物の中には，当然のことながら，人骨資料や考古資料もあり，それについてはとくに神経を使った記憶がある。

搬出の完了後に，田中先生の一声で研究室での最後の飲み会が開催された。がらんとした部屋の中で，地べたに座って，六本松研究室の名残を惜しんだ。その後，徳島に赴任してからも，大学キャンパス間の職場の引っ越しに遭遇したが，このときの経験が活かされた。

３．伊都研究室での活動開始

2009年４月から，基層構造講座は伊都キャンパスでの活動を開始した。講座の研究室は，キャンパスの三地区のうちの一つ，センターゾーンに位置するセンター５号館に所在した。田中先生はこの建物を，周りにあるビッグオレンジやビッグさんどにちなんで，その平面形から「バームクーヘン」と呼んでいた。研究室（院生室）のすぐそばに，人骨整理室，マクロ分析室，書庫などが配置され，研究を実施するにあたって，非常に効率的になった。また平面形の形状に沿って，各部屋や通路が湾曲している，不思議な空間でもあった。建物を出ると，南側のビッグさんどには，食堂やコンビニ，ATM などがあり，とても便利であった。東側のビッグオレンジには，こじゃれたレストランがあり，何か特別なこと，あるいは客人がお越しになったときにはこちらが利用された。キャンパスの北東部には学生寄宿舎もあり，ここは学生や海外研究者の宿舎となった。当時はキャンパスを出たところに，ラーメン屋が一軒あった程度であった。周囲に居酒屋がたくさんあり，何か理由をつけてはそこに突入していた（わたしだけ？）六本松の状況とは全く異なっていた。ひたすら研究に打ち込むには最適な環境であった。とはいえ，研究室から飲み会がなくなったわけではなく，飲むときは，九大学研都市駅前に行くのが定番となった。学研都市駅，周船寺，今宿周辺に住む学生が多かったように思うが，当時は駅前からキャンパスまでのバスの本数がまだ少なく，通学が多少不便であったようである。わたしは六本松，伊都をとおして，早朝から出勤することが多かったが，雑踏前の静寂が鳥のさえずりに変わったのが妙に印象深かった。学生の雰囲気もガラッとかわった。六本松ではわたしが院生であったころからの男くさい雰囲気がやや残っていたが，伊都に移ってからは院生の女性比率が一気に高くなった。時おり，お誕生日会を開催し，アマゾネスたち（岩永先生は当時の女子学生をそう呼んでおられた）は活気づくようになった。古き六本松の空気は去り，伊都に新しい風が吹きはじめた。

４．調査・研究活動

2008～2011年度の４年間に，基層構造講座が実施した調査（参加者敬称略）は以下のとおりである。

2008年度

６月６日　福岡県古賀市道田遺跡，弥生時代甕棺人骨発掘調査（中橋孝博，高椋浩史）

７月３～７・９日　福岡県宗像市田熊石畑遺跡，弥生時代人骨発掘調査（田中良之，邱鴻霖，李ハヤン，岩橋由季，高椋浩史）

８月５～12日，８月30日～９月５日　台湾・台南県出土人骨調査（科研費基盤研究（Ｃ）「考古人類学的方法による台湾先史時代親族関係の研究」）（田中良之，邱鴻霖，李ハヤン，岩橋由季，高椋浩史）

10月９日～11月３日　中国四川省炉霍県晏爾龍遺跡発掘調査

11月21日～12月７日　中国山東省北阡遺跡出土人骨整理調査（中橋孝博，高椋浩史）

３月３・４日　福岡県筑後市高江辻遺跡，弥生時代石棺人骨調査（中橋孝博，岩橋由季，高椋浩史）

３月５～11日　中国四川省炉霍県晏爾龍遺跡出土人骨整理調査（中橋孝博，高椋浩史）

2009年度

７月27日～８月１日　台湾・台南県石橋遺跡出土人骨整理・考古資料調査（田中良之，端野晋平，谷澤亜里，早川和賀子，米元史織）

９月７～23日　中国山東省北阡遺跡出土人骨整理調査（中橋孝博，高椋浩史，米元史織）

11月25日　福岡県北九州市城野遺跡出土人骨発掘調査（田中良之，舟橋京子）

３月６～13日　中国四川省炉霍県呷拉宗遺跡出土人骨整理調査（中橋孝博，高椋浩史）

３月14～18日　中国四川省炉霍県晏爾龍遺跡・呷拉宗遺跡出土人骨調査（田中良之，高椋浩史）

2010年度

８月５・６日　福岡県小郡市干潟下鶴遺跡出土人骨発掘調査（舟橋京子，李ハヤン）

８月23日～９月１日　中国吉林省吉林大学所蔵古人骨調査（中橋孝博，高椋浩史）

８月23～30日　台湾・台南県石橋遺跡出土人骨整理・考古資料調査（田中良之，端野晋平，李ハヤン，岩橋由季）

９月６～24日　中国山東省北阡遺跡出土人骨整理調査（中橋孝博，高椋浩史，米元史織）

９月27～29日　宮崎県立切地下式横穴墓群・旭台地下式横穴墓群調査記録・出土人骨調査（田中良之，吉村和昭，舟橋京子，田尻義了，李ハヤン，岩橋由季）

11月～２月　福岡県大野城市古野遺跡・原口遺跡出土人骨発掘調査（舟橋京子，李ハヤン，高椋浩史，米元史織）

12月１～３日　福岡県福岡市卯内尺古墳出土人骨発掘調査（中橋孝博，高椋浩史）

12月７～９日　大分県玖珠町志津里遺跡出土人骨発掘調査（田中良之，舟橋京子，李ハヤン，岩橋由季，高椋浩史，フェラーリ・ロジャー）

３月16～18日　宮崎県旭台地下式横穴墓群出土人骨調査（田中良之，吉村和昭，李ハヤン，岩橋由季）

2011年

６月15日　福岡県大刀洗町高樋辻遺跡出土人骨発掘調査（中橋孝博，高椋浩史，米元史織）

７月11～26日　イギリスヘリフォード Dorstone 遺跡・Windy Ridge 遺跡発掘調査（溝口孝司，岩橋由季，谷澤亜里，米元史織）

８月23～27日　台湾・台南県石橋遺跡出土人骨整理・考古資料調査（田中良之，端野晋平，李ハヤン，高椋浩史，米元史織，中井歩）

９月23日～10月２日　中国・吉林省長春市吉林大学所蔵古人骨調査（中橋孝博，高椋浩史，米元史織）

10月～12月　福岡県大野城市瑞穂遺跡出土人骨発掘調査（田中良之，舟橋京子，石川健，高椋浩史，李ハヤン，米元史織）

12月２・３日　大分県玖珠町志津里遺跡出土人骨発掘調査（田中良之，舟橋京子，高椋浩史，米元史織）

この間，国内では福岡県・大分県・宮崎県で，弥生～古墳時代の遺跡から出土した人骨などの調査が，国外では中国・台湾・イギリスで，考古学・人類学的調査が実施された。こうした調査は，各先生の指揮のもと，研究員や院生が加わるかたちで実施されていた。

この時期，わたしは，助教あるいは PD という立場で，個人的に調査をさせていただいていたため，上記の調査への参加は少ない。ただ，2010・2011年度に実施された台湾での調査は思い出深い。2008年度に博士号を取得し，台湾に帰国されていた邱鴻霖さんが田中先生に依頼した調査であった。邱さんは，六本松最後の年，年齢が近いこともあって気が合い，かっこうの飲み友達であった。調査時には，比文課程博士第１号で，台湾大学の陳有貝さんも来られた。調査は台南県に所在する台湾大学隆田考古展示館で実施された。田中先生と院生たちは人骨の調査を，わたしは邱さんに特別に準備してもらった石器の調査を行った（このときの成果はいまだに公表できていない……。すみません）。調査の合間や移動途中に，中央研究院収蔵庫，国立台湾博物館，台湾大学考古展示館，烏来泰雅民族博物館を見学し，隆田・高雄周辺の遺跡を踏査できたのは，有意義であった。

台湾は，それまで一度も行ったことがなかったわたしには新鮮だった。日差しの高さ，新幹線の車内チャイムが日本のそれと同じだったこと，隆田駅前のロータリーが，韓国の慶州駅のそれとそっくりだったことなど。牛肉麺，火鍋などの料理もおいしかった。パクチー（香菜）にはまってしまったのも，この調査がきっかけだ。ホテルの朝食ビュッフェに，ウナギのかば焼きが出てきて，思わず食べ過ぎてしまった。午後のおやつとしてマンゴーやパパイヤなどの南国のフルーツに舌鼓を打った。夜はホテルの田中先生の部屋で飲み会が行われもした。調査時には，実際の作業はもちろんだが，こうした飲み会は楽しいだけでなく，得られるものが多かった。先生のお話は冗談を交えながらも，その背後には必ず学問があった。院生時以来，こうした学びの場で得られたものはわたしの財産となっている。当時，院生であった諸氏も，おそらくわたしと同じ気持ちを抱いているであろう。

以上の調査活動のほかに，特筆すべき活動として，2010年度からの考古学・地球科学の学際融合研究（P&P プロジェクト）があげられる。これは，田中先生が比文・地球変動講座の小山内康人教授と共同で立ち上げた研究プロジェクトであった。最新の分析機器を導入し，古人骨のストロンチウム同位体比分析をはじめ，石器石材の原産地研究，土器の胎土分析などが行われ始め

た。これは，のちのアジア埋蔵文化財研究センターの設立へとつながっている。小山内先生も田中先生に負けず劣らず，お酒の好きな方で，プロジェクトのきっかけは飲み会であったらしい。当然のごとく，考古学・地球科学合同の飲み会もよく開かれ，地球変動講座の中野伸彦さんや足立達朗さん，院生の人びととも交流をもった。当時の研究員・院生の間では，研究室はこれからどうなっていくのか，期待と戸惑いの入り混じった，不思議な空気が流れていたように思う。地球変動講座との「飲みニケーション」にはわたしもよく参加したが，この時期，博士論文の執筆に追われて忙しくなったこともあり，共同研究にはほとんど参加できなかったのが悔やまれる。小山内先生のチームと研究をともにしたのは，福岡県八女市矢部川，耳納山地付近での石材サンプリングに行ったことくらいか。これは，弥生時代の青銅器鋳型の石材産地を突き止めるための調査であり，このときの成果は田尻義了さんたちの手によって，のちに公表されている。今後も九大の学際融合研究が進展することを祈っている。

５．授業―集中ゼミ・総合演習・人骨実習―

ここでは，わたしが直接参加した，あるいはそばで接した授業として，集中ゼミ・総合演習・人骨実習の三つをとりあげる。

集中ゼミ（図58）

集中ゼミは，基層構造講座で毎年４月２週目の６日間，田中・岩永・溝口の諸先生の授業を受講する前の下準備として，修士課程の新入生を対象に，実施された授業である。2008年度集中ゼミのリーディングリストによれば，田中・岩永・溝口・辻田の諸先生が提起した課題について，あげられた文献を精読のうえ，「助教・研究員・博士課程院生・修士課程２年生の司会のもと」，院生相互で討論するとある。この集中ゼミはわたしが修士課程入学以前からあり，わたしの院生時代は博士課程院生・修士課程２年生が司会を務めていたが，院生数の減少から，担当者の負担が大きくなり，この時期は助教や研究員まで拡大されていた。課題は全部で11あり，「課題１：資料論」，「課題２：層位論」，「課題３：分類」，「課題４：時間論」，「課題５：空間論」，「課題６：進化論」，「課題７：マルクス主義」，「課題８：システム論」，「課題９：構造主義」，「課題10：研究と論理」，「課題11：研究とホークス」というようになっている。最後の課題11は「昨年のホークスの失敗の要因を分析し，本年度リーグ優勝・日本シリーズ進出のための諸条件と個々の達成可能性について，根拠をあげつつ論述せよ（アルコールの勢いにまかせた非論理的／感情的な論述は禁止する）」であり，文献は「個々人の情報収集にまかせるので，しっかり研究しておくように」とある。毎年，打ち上げは福岡ドームで行うこととなっていたので，それにちなんでの先生方のジョークである。福岡ドームでは，それまでのストレスから解放され弾ける院生もいれば，燃え尽きたかのように寝入ってしまう院生もいた。いつからか岩永先生が，女子学生にソフトクリームを振る舞うのが恒例となった。院生たちからは「恐怖の集中ゼミ」と恐れられていた。わたしも院生時代は手を焼いていたが，博士課程を経て，さすがに助教のときはかなり理解も深まっていた。ただ，そうはなっても自身の理解の正しさを確認したり，誤解を修正したり，気づきもあったりして，非常に有益な授業であることは変わりがなかった。わたしが現在，大学で担当している講義の構成も，実はこの集中ゼミがベースだったりする。今後も基層構造講座の

伝統として継承されることを願っている。

総合演習

毎週木曜午後には，比文・人文の教員・院生が一堂に会し，総合演習が実施された。移転前は比文院生棟の一室，移転後は箱崎の総合研究博物館の一室（旧工学部建物内）で行われた。総合演習は，まず修士・博士課程の院生が修論・博論に向けての研究発表を行い，それについて院生から質疑を受け付け，最後に教員からコメントをいただくという流れで行われた。司会は院生が担当することとなっていた。こうした形式はすべて，院生がいずれ経験するであろう，学会での発表・質疑応答・司会を見越してのものである。まさに「模擬学会」といえるものであった。わたしも院生時代に，この授業をとおして，発表・質疑応答・司会の技術がずいぶん磨かれたように思う。教員がコメントする順番は，くじ引きで決めていた。あとの方ほど，コメントのネタがなくなり，言われていないことをいかに言うかが，教員の腕の見せどころであった。院生のなかには「こんな豪華な教員陣にしごかれたら学会なんて怖くない」とまで言う人もいて，わたしもその教員に加わっていたこともあり，とても誇らしかった記憶がある。

このように，教員の数が多いと当然，コメント時間も長くなり，授業の長時間化が深刻となっていた。教員・院生ともに終わったときはくたくたであった。総合演習終了後は，発表者を囲んでの飲み会が，地下鉄箱崎九大前駅近くの「赤のれん＆とん吉」で行われ，時折それに教員が加わるというかたちであった。そこでは，授業中は十分に議論できなかったことや本音で語れなかったことなどが教員・院生間でぶつけられた。授業だけでなく，こうした場は院生にとって貴重な財産となったように思う。

人骨実習

毎週水曜は，人骨実習が行われていた。田中先生，舟橋さんの指揮のもと，現場で取り上げた人骨のクリーニングなどの整理作業，計測，写真撮影，報告書作成までの一連の過程を学ぶ授業であった。基層構造講座では，自然人類学の院生はもちろん，考古学専攻であっても，人骨実習は必修授業であった。助教・PD 時代はこれに関わっていなかったので，この時期の雰囲気はわからない。ただ，院生時代の記憶を思い起こすと，クリーニングをしながら，『骨学実習の手びき』や標本を片手に，部位を同定していた。時おり舟橋さんが「その部位は何でしょう？」とか「右か左か」などとクイズを出してきて，それに答えるという感じで，人骨に関する知識を身に着けていったように思う。きっとそのような感じでやっていたんだろうと勝手に想像している。

基層構造講座は，こうした人骨実習以外にも，同室に，考古学と自然人類学の院生が雑居する，日本でも非常に珍しい特殊な環境であった。院生時代から，まったく専門の異なる学生同士が喧々諤々の議論をすることもあったり，さまざまな面で相互に刺激を与えあったりしていたように思う。わたしが一時期，統計学的手法を自らの研究に導入しようとしていたのも，当時，同室で研究していた人骨考古学・自然人類学専攻の院生諸氏からの影響が大きい。最近，また墓制研究に力を入れており，人骨から得られる情報の重要性を痛感している。院生時代，人骨をもっとまじめに勉強しておけばよかったといまさらながら後悔している。

６．九州考古学会事務局

わたしが大学院に入学した時点で，九州考古学会の事務局は，基層構造講座におかれ，その事務は代々助手（助教）を中心に行われることになっていた。事務作業自体は，博士課程のときから経験しており，その仕事の大変さはわかったつもりであった。長年，助手への負担の集中が問題視されていたが，このころには運営委員会で事務分掌が図られ，助教一人が担当する仕事はかなり軽減されていた。とはいえ正直，手弁当で行うには見合わない，それなりの仕事量があった。日常の主たる仕事は，会計と会員情報の管理であった。郵便で会費の振り込み通知書が送られてきたら，それをみて，会費納入状況データに入力する。会員情報変更の連絡があれば，それも入力する。事務用品代や会議用のお茶代などの支出があれば，会計帳簿に記入し，領収証を会計ノートに貼り付けるなど。２か月に１回開催される運営委員会に関する仕事（会議資料・議事録案作成，委員への連絡など）もわたしが行った。通常，司会を担当されていた溝口先生がご欠席のときには，その代行を務めることもあった。そのほか，機関誌『九州考古学』，総会などの案内状の発送作業，公式ホームページの更新なども行っていた。発送作業は院生の協力のもと，手作業で行っていた。この時期に，事務作業の軽減と経費節約を目的として，案内状の送付については，会員にＥメールによる配信を勧めるようになり，負担がかなり軽減された。『九州考古学』の方はＥメールで送るわけにはいかないので，最寄りの郵便局まで持ち込んだ。六本松時代は台車で運んでいたのが，伊都移転後は車で持ち込むようになった。

助教のときは，いかに効率的に仕事をさばき，自分の研究時間を確保するかということをずっと意識していた。出勤してすぐに事務仕事を片付ける習慣はこのときについた。田中・溝口両先生に確認をとりながら，仕事を進めていくのが常であった。2008年度の会長は島津義昭先生，2009～2011年度の会長は木村幾多郎先生で，運営委員は福岡県内外の考古学・埋蔵文化財関係者で構成されていた。2008年度の事務局委員は田中先生，溝口先生，わたしであった。それ以降の年度は，研究員・院生も加わった。事業は，総会・大会・合同学会の開催，機関誌『九州考古学』の発刊，九州考古学賞の授与であり，今日と変わらない。

毎年11月の４週目に開催される総会では，この間も，さまざまな変化やハプニングなどがあった。2008（平成20）年度の総会では，九州考古学会賞の賞状を入れる筒を忘れ，大慌てで買いに行き，どうにか授賞式に間に合ったという苦い思い出がある。ひたすら焦るわたしに，田中先生が「受賞者に筒の代わりに輪ゴムでも渡したらどうだ？」といつものように冗談をおっしゃっておられたのが忘れられない。

2009（平成21）年度の総会からは，研究発表資料集に簡易製本印刷が導入された。発表者から受け取った完成原稿を，PDF 形式で束ねて，印刷会社に入稿すればよく，しかも費用も安価であった。それまでは印刷したＡ３サイズの資料を，研究室で院生とともに順序通りに重ね，ホッチキス止めをする作業をしていたが，これからは解放された。ちなみに，表紙を飾る九州考古学会会員バッチのイラストは，事務局委員を同時期に務めた石田智子さんが実物写真をトレースして作成したもので，これが現在もつづいている。この総会では，事務局委員という立場でありながら，思いがけず九州考古学会奨励賞を受賞して，自分がもらっていいものかと戸惑いつつも内心はうれしかった。

2010（平成22）年度の総会では，会創立80周年を記念して，福岡市博物館講堂で，シンポジウムが開催された。このときの記録は，会場で録音された音声から文字起こしがなされ，次年度に刊行された『九州考古学』第86号に掲載された。また，これに関連して，福岡市博物館部門展示室で「九州考古学のあゆみ」と題した展示が開催された。この総会からは，ポスターセッションも導入された。今日，ポスターセッションは日本の考古学界で定着した感があるが，当時，全国的にみてもこれを実施する考古学関係学会はまだ多くなく，地方学会としては斬新な試みだったと思う。

会場は，2010年度をのぞき，2011年度まで西南学院大学の博物館講堂，あるいはコミュニティーセンター・ホールであった。元会長で，西南学院大学教授であられた高倉洋彰先生がこの場所を押さえてくださっていた。西南学院大学は交通の便もよく，かつ周囲に食事処も多くあり，会場には最適であった。博物館は大正年間に建てられ，こんにち福岡県・市指定有形文化財となっている建物で，その講堂は独特の荘厳な雰囲気があった。

韓国の嶺南考古学会との合同学会と，九州各県を持ち回りで開催される大会は，年度を違え２年おきに開催され，今日もその方式がつづいている。2008年度の第８回合同学会は，「日韓交流の考古学」というテーマで，韓国の慶州教育文化会館で８月22～26日に開催された。日本側はゲストという立場での参加であった。島津会長のもと，実行委員会が結成された。わたしの仕事は，実行委員会の準備，会議資料・議事録案の作成，韓国側への連絡，発表資料集原稿・翻訳原稿の集約，旅行社とのやり取りなどであった。両学会間の連絡は，母国語で行うことになっており，韓国側からの連絡状の翻訳には，わたしの韓国語が役に立った。原稿の翻訳については，日本側の原稿は韓国側にお願いし，韓国側の原稿は日本側が行うことになっていた。日本側の原稿が到着次第，韓国側に送付し，韓国側から届いた原稿を翻訳担当者に送付した。博士課程のころまでは，両学会が双方の文化の違いなども苦慮しつつ，手探りでことを進めている状態で，いざ学会が開催されると，互いに接待の応酬という感じで神経をすり減らし，本当に大変だった。しかし，このころの合同学会は回を重ねることで，ノウハウも出来上がり，それに沿って事務作業も順調に進み，その充実感を味わう余裕も出てきた。夜はもちろん，日韓でどんちゃん騒ぎをして親睦を深めた。エクスカーションでは，高霊池山洞古墳群73号墳の発掘現場，大伽耶博物館，陜川海印寺，慶州月城などを見学した。

2010年度の第９回合同学会は，宮崎県で開催予定であったが，口蹄疫の拡散防止のため，やむを得ず中止となり，代わりに福岡市内の九州大学西新プラザで７月17・18日，開催された。これまでに培ってきたノウハウがあってか，こうしたアクシデントにも動じず，スムーズに準備が進められた。もちろん，木村会長と実行委員の皆さまのご協力があってこそである。日本側がホストであったこのときは，発表資料集の編集・印刷が事務局の仕事であったが，とくにトラブルもなかったと思う。現在も韓国の先生方が，合同学会の継続を望んでいるというお話はよく聞く。地方学会が国際学会を定期的に開催している意義はやはり大きいし，九州考古学会の特色の一つとしてぜひつづけていただきたい。

2009年度の大会は，肥後考古学会との共催で，『阿蘇の弥生時代』というテーマで，７月４・５日，かんぽの宿阿蘇で開催された。大会は各開催県の実行委員会が担当することになっている

ため，事務局としての仕事はとくになく，気楽に地元の研究者との交流と温泉を楽しんだ。

2011年度の大会は，日本地質学会西日本支部との共催で，『考古学と地球科学―融合研究の最前線―』というテーマで，７月９・10日，九州大学西新プラザで開催された。田中・小山内両先生の共同研究を背景に開催され，国内の学際的研究者たちが多数参集した，エキサイティングな学会であった。エクスカーションは，福岡県八女市に所在する青銅器鋳型石材の河原散布地と原石露頭，吉野ヶ里遺跡の見学であった。

おわりに―九大を離れて10年―

以上，将来の不安を抱えながらも自由奔放に楽しく過ごした，あの時を懐かしく思い出しながら，気持ちの赴くまま筆を執った次第である。わたしは2012年３月に博士号を取得したあと，PD の期間も終了した。翌月からは，比文の特別研究者という立場で九大に在籍し，大野城市や糸島市でアルバイトをしながら，職を探した。幸いにも，11月から岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの助教に着任することが決まった。基層構造講座では，９月末をもって，福岡を去るわたしのために，天神の居酒屋で送別会を開催していただいた。送別会では，博士号取得者に代々送られる金時計をいただいた。比文論文博士第１号金宰賢さんのときからの伝統である（発案者は田中先生で，当初，「薬用紫電改」にかけて，“軍用”紫電改のプラモデルをプレゼントするつもりだったが入手できなかったため，金さんにかけて，「金」時計にしたそうだ）。この金時計は博士号取得者のネームが入ったもので，講座の先生方がポケットマネーで購入されたものである。今でも，生来の怠け癖を正すために，職場のよく見える位置に置いている。諸先生方，つきあいの長い同輩・後輩諸氏から，ありがたいスピーチをいただいたのを今でも忘れはしない。福岡を離れる前日は，九大文学部入学以来つづいた15年間（途中２年間の韓国留学を除く）の福岡での生活もこれで終わりかと，一人で今宿のマンションのベランダから感慨深く夕陽を眺めたのを覚えている。

その後，岡山から故郷の徳島に戻ってから，はや10年以上が経過した。田中先生は鬼籍に入られ，中橋先生，岩永先生はご退職された。このたび宮本先生はご退職を迎えられ，溝口先生は還暦を過ぎられた。九大の考古学関係組織の状況は大きく変わり，次世代がその中心を担うようになってきている。わたしも家庭をもち，２児の父親となったが，当時院生であった人たちもそれぞれ社会人・家庭人となり，それぞれご活躍されているとのこと。過ぎ行く時の速さに，驚きを感じざるを得ない。

最後にはなるが，このたび執筆の機会を与えていただいた宮本一夫先生に感謝申し上げるとともに，九州大学考古学関係組織の今後の発展をお祈り申し上げる。なお，田尻義了さんには，当時の名簿や写真の収集作業において，お手を煩わせた。記して感謝の意を表したい。

図57　2008年４月入学式

図58　2009年４月集中ゼミ打ち上げ

第７章　2009年６月から2010年３月の考古学研究室のこと

村　野　正　景

１．助教に着任した頃の文学部

私は，2009年，中米エルサルバドル共和国での青年海外協力隊（考古学）の任期を終え，日本に帰国した。そして同年の６月に人文科学研究院兼文学部助教として採用され，考古学講座勤務を命ぜられた。その年度の終わりまでが任期であったから，歴代でもかなり短期間と思う。またしばらく助教が考古学研究室におかれておらず，研究室諸業務のことは先代の助手ではなく，宮本一夫先生と辻田淳一郎先生から教えていただいた。この年，文学部では他に３人の助教（押川信久氏　朝鮮史学，石井祐子氏　美学・美術史，山本将司氏　言語学・応用言語学）が採用されていた。４人体制はある種特別であって，それは「はごろもプロジェクト」という文学部の記念事業を円滑に実施する目的の故だったと記憶している。

2009年は，1924（大正13）年に法文学部が創設されて85周年，1949(昭和24) 年に文学部が設置されて60周年という節目の年だった。そこで人文学の本質を再認識し，21世紀の現代社会における文学部の存在意義を学内外に示すという目標を掲げ，多数の事業が実施された。ちなみに「はごろも」とは，80周年／65周年の語呂合わせや，文学部の所在する箱崎がかつて松林と砂浜が広がる美しい土地だったことにちなんだ愛称と，当時この記念事業を率いた文学部長の柴田篤先生（中国哲学史）に説明していただいた。1996年に九州大学へ入学し，学部時代に六本松キャンパスと箱崎キャンパスを行き来して学んだ私にとって，馬出から箱崎宮あたりの松原の景色は馴染み深く，妙に得心したのを覚えている。

記念事業の準備は私が着任したとき，すでに始まっていて，事務局長の岡崎敦先生（西洋史学）を中心として頻繁に会議が開かれた。私は実行委員会委員・事務局員として，ひととおり全ての事業に関わったが，記念祭の広報まわりを特に受け持ちつつ，考古学研究室がどのように本事業と関われるかを宮本先生や辻田先生と相談する日々を過ごした。本事業は，2009年４月の文学部・朝日カルチャーセンター提携講座を皮切りに，９月19日の記念祭が最も象徴的な行事となり，９月・10月の美術展，それに12月12日の公開シンポジウム，2010年３月に記念論文集の発刊と年度を通じておこなわれた。

２．考古学研究室と記念事業

考古学研究室との関わりで言えば，まず９月の記念祭で，旧工学部本館３階（総合研究博物館常設展示室）にて「倭人伝の道と考古学研究室」と題するパネル展示がおこなわれた。当時の配布資料（記念祭プログラム）をみると，その趣旨は以下の通りであった。

「考古学研究室は2008年に，鏡山猛先生が考古学講座初代の教授として就任されてから50周年を迎えました。本研究室がおこなってきた調査・研究の中でも，一つの重要な対象が，『魏志倭人伝』に記載された，対馬国・一支国・末盧国・伊都国・奴国など，邪馬台国に至る道筋に存在したとされる国々の遺跡です。この展示では，考古学研究室が調査した九州の遺跡のパネル展示を通して，九州の先史・古代社会についてご紹介します。」

記念祭に先立つ2004年，福岡市博物館にて開催された「平成16年度九州大学総合研究博物館公開展示　倭人伝の道と北部九州の古代文化」（展覧会実行委員長：宮本一夫先生）のため，考古学研究室が長年実施してきた発掘調査の歴史や資料をまとめた文章やパネルが作成され，同展用に『九州大学所蔵考古資料展図録』も刊行されていた。研究室の教員や学生が分担して作成したものである。この展覧会の内容を抜粋・再構成して，記念祭の展示は実施された。なおパネルをどう設置するかで，ピンの留め方や配列の仕方など技術的なご教示を，博物館の岩永省三先生にかなり丁寧にいただいた。当時の記録をみると，大学院生だった三阪一徳君（現・岡山理科大学），主税英徳君（現・琉球大学），森貴教君（現・新潟大学），白石渓冴君（現・長崎県埋蔵文化財センター）が作業を実施してくださっている。

記念事業の一環として，次に考古学研究室が深く関わったのは，九州史学会と共催したシンポジウムであった。史学会初日の公開シンポジウムとして「九州大学所蔵の史資料 - 過去・現在・未来 -」が12月12日に開催され，宮本先生が「九州大学考古学資料」，田尻義了先生が「九州大学キャンパス内の埋蔵文化財資料について」と題する発表をされた。ほかにも記念論文集は，辻田先生が委員長を務められ，宮本先生，辻田先生，村野が寄稿している。

３．研究室の様子

ところで，私の机は，考古学研究室とは異なる別棟の部屋にあった。はごろもプロジェクトの故か，ここで文学部助教４名全員が仕事した。そのため先代助手の岡田裕之さん（現・山口県埋蔵文化財センター）が研究室に常時おられ学生の様子もこと細かにご存知だったのに対し，私はその機会が相対的に少なかったと思う。とはいえ，もちろん毎日研究室に顔を出し，とくに宮本先生がご自身のお部屋でなく，研究室で昼食時を過ごされているのにあわせ，私も生協弁当を買って研究室で食事した。

この年，大学院生（人文科学府歴史空間論専攻アジア史学講座，比較社会文化学府日本社会文化専攻比較基層文明講座）は先述の４名のほか，倉元慎平君（現・朝倉市教育委員会），藤元正太君（現・奈良県立橿原考古学研究所），大森真衣子さん（現・福岡市埋蔵文化財課），曲玲玲さん，李作婷さん（現・台湾 国立自然科学博物館），松本圭太君（現・九州大学人文科学研究院），金想民君（現・韓国 国立木浦大学校）の計11名，人文科学府の研究生が５名（米国，韓国，中国，オランダ），学部生は15名と比較的大所帯で，ここに比較社会文化学府の基層構造講座の面々もやってきたから，研究室の３つある部屋の各机は日々満員だったように記憶している。

ただし年度のはじめには，学部２年生がこの年，たった一人しか考古学進学を選ばず，それまで６～８人程度はコンスタントに進学者がいたため，研究室の誰もが「ショック」を受けていたことを思い出す。

４．考古学の授業

考古学研究室の授業は，宮本先生・辻田先生がご担当されたが，前期には京都橘大学の弓場紀知先生，埼玉大学の高久健二先生，後期には島根大学の山田康弘先生，韓国・東亜大学校の金宰賢先生が非常勤講師としていらっしゃった。学内では中橋孝博先生，溝口孝司先生が学部の授業をご担当された。

なお例年どおりではあるのだが，この年の大学院生は人文科学府と比較社会文化学府の合同総合演習では，宮本・辻田両先生と村野，基層構造講座の田中良之先生，中橋孝博先生，溝口孝司先生，佐藤廉也先生，博物館の岩永省三先生と８名の教員の前で発表した。院生の発表後の教員との質疑応答は１人10分だけでも80分かかってしまい，さらに研究員や学生間の議論もあって長丁場の中身の濃い演習だったわけだが，終了後も毎回かかさずラーメン屋「赤のれん」で焼酎片手に議論が続けられた。私はいま京都府京都文化博物館で学芸員として仕事しているが，ここまで「熱い」学びの機会は少ない。変な誤解を生むことを恐れるが，非常に「ウエット」な人間関係がここにあり，その上に研究環境も築かれていたように感じる。

５．フィールドワーク

研究室のフィールドワークとして，国内外の考古学調査をこの年も実施している。毎年，宮本・辻田両先生の科研費等により，研究室主体の調査が実施されていたことは，両先生のご努力やご配慮の結果であるが，学生にとって貴重な機会となっていた。

2009年度は，福岡市史編纂事業の一環として福岡市西区の小戸古墳群の測量調査，福岡市東区の奈多遺跡の発掘調査がおこなわれた。前者は1951年に鏡山猛先生と渡邉正氣先生が調査された遺跡である。後者は玄界灘に面した砂丘遺跡で，そこに打ち寄せる波や強い風により変化を続ける遺跡として知られる。発掘調査時も，一方で測量部隊は吹き付ける風に四苦八苦し，他方で発掘部隊はトレンチが風除けになっても砂が流れ込んでくるといった具合に，大変な経験だったと参加した学生が口を揃えていた。

国外の調査は，宮本先生を隊長として中国四川省四川省甘孜チベット自治州炉霍県呷拉宗（こうらつそう）遺跡で実施され，総合研究博物館の中西哲也先生に加え，研究室からは村野のほか大学院生の松本君，三阪君，森君，白石君が参加した。四川省文物考古研究院との共同調査の一環で，21世紀になってから日本の大学として唯一中国国務院の特別許可を得た調査だった。遺跡は，標高3,500メートル以上の高原地帯にあり，比較的厳しい環境下での調査であった。ただ，道中では乗車していた車の高度計が4,000から動かなくなったとき，眼下から雲が湧きたち，視界の上は青空，下に雲海が広がった美しい情景をよく覚えている。本調査を含む成果は2013年に『東チベットの先史社会　四川省チベット自治州における日中共同発掘調査の記録』（宮本一夫・高大倫編，中国書店）として刊行された。

以上，主に記憶と手元の記録に基づいて研究室の事柄を記してみた。たかだか10数年前のことだが，正確さの心もとない部分も少なくない。どうかご海容いただきたいと思う。

図59　2009年11月考古学研究室の整理室の様子（奥におられるのは李作婷さん）

図60　2009年9月中国・呷拉宗遺跡での調査の一場面（左から中国側参加者，白石君，宮本先生，松本君，中国側参加者，森君）

第８章　箱崎末伊都初の考古学研究室

松　本　圭　太

１．はじめに

筆者が助教を務めたのは，2016（平成28）年度および2021（令和３）～2023（令和５）年度である。2016年度は人文科学研究院の助教として，主に大学院や九州史学会関連の業務に携わった。考古学研究室関連では，木曜５限の総合演習の教員団の末席に加えて頂けることになったほか，夏のモンゴル発掘や集中講義に来られた先生方の歓迎などが主だった業務であった。

2021年度（2022年１月）からは，宮本一夫教授による科研（基盤（S））の学術研究員から特定プロジェクト教員への身分変更となり，人文科学研究院の助教として勤務した。基本的には科研の業務を行ったが，分析室の一角を使用させて頂いており，諸先生・学生諸氏とも一定の交流をもつことができた。もっとも，その前半はコロナ禍の影響で，研究室・大学全体に人が少なかったのではあるが。

従って，講義や，国内の発掘調査，九州史学会の考古学部会，さらに2018年のキャンパス移転当時の状況など，肝心の部分とは関りが薄く，自身の体験談としての詳細を書くことが出来ない。以下では，2016年当時，筆者が関りをもった主な行事について若干述べたい。また，箱崎研究室で日常的に利用されていた図書についても記しておく。現在の伊都キャンパスでは，研究室の図書はほぼ全て中央図書館に入っており，利用の勝手がまるで異なる。両キャンパスで助教をさせて頂いた経験上，こうしたものも記録の一つとして残しておきたい。

なお筆者は，2003年，学部２年次に考古学研究室へ配属され，2013年に比較社会文化学府の博士課程を修了した。本記録集を執筆されている岡田氏は配属当時の助手の先生であり，実習を教えていただいた。また，大学院時代の助教の諸先生として，石川氏，板倉氏，端野氏，村野氏がおられた。

２．2016年度の箱崎

2016年度の記録

４月，研究院長（久保智之教授）より辞令の交付を受けた。教員室はイスラム文明史学の馬場多聞助教と同室。いわゆる「機材プレハブ」と「文化史プレハブ」の間にある，集中講義などがよく行われた２棟（文・教・人環研究棟）のなかの１室である。

新歓行事では，九州大学埋蔵文化財調査室の福田正宏氏とともに談話会で報告する機会を得た。２名ともロシアに関わる報告を行い，７年前（執筆時2023年）であるのに隔世の感がある。また，留学生も多く（中国５名，ドイツ，アルゼンチンより各１名），国際色豊かな研究室といえるで

図61　第一分館での最後の総合演習（2015年11月撮影・米元史織氏提供）

あろう。この時，学部生で研究室配属となったのが，内田千種，下釜奈々子，宗田結衣，土居隼人，中野真澄，柱七彩，松尾樹志郎，山地優輝，吉原萌の諸氏である。修士では，小澤利満，譚永超，薄穎悦，三浦萌の諸氏が人文科学府に，Florencia Natalia Botta，犬童淳一郎の両氏が地球社会統合科学府に入進学した。新歓ハイクでは，１泊２日で山口県を訪れ，長登銅山跡や柳井茶臼山古墳，錦帯橋などを見学した。錦帯橋には修学旅行で訪れられたことを宮本先生が語ってくださった。各地では卒業生である岡田裕之氏（山口県埋蔵文化財センター），丸尾弘介氏（山口市教育委員会），山根謙二氏（美祢市教育委員会）をはじめとする方々にお世話になり，懐かしく思われた。このハイクは当時の学部３年生である，岩田英信，新谷広太郎，田中利沙，長谷川桃子，藤尾徳馬，山下理呂の諸氏が準備してくださった。

当時の総合演習（人文科学府と比較社会文化学府，地球社会統合科学府が合同で行う，修士・博士論文執筆へ向けての発表型式の授業）は，総合研究博物館の第三分館（旧保存図書館）の半地下階で行われていた。総合演習は，この前の年（2015年11月）までは総合研究博物館の第一分館（旧知能機械実習工場）（図61）で行われており，第三分館を経て2017年６月には旧工学部本館の４番講義室へ，そして伊都キャンパスへと移動してくことになる。2016年度の在職中は，岩永省三，宮本一夫，瀬口典子，溝口孝司，菅浩伸，田尻義了，石川京子，足立達朗，米元史織，谷澤亜里の諸先生とともに参加することとなった。総合演習は，大学院に在籍された方にとっては最も記憶に残る場所の一つであると思われる。また，当年度の集中講義には，鹿児島大学の高宮広土先生，大阪大学の福永伸哉先生，卒業生でもある弘前大学の上條信彦先生にお越し頂いた。

12月には中国社会科学院考古研究所の叢徳新先生が来訪され，本研究室のほか九州国立博物館や観世音寺を見学された。日本中国考古学会九州部会でご講演頂き，京都で開催された日本中国考古学会大会にも参加頂いた。九州部会では「ユーラシア視座における西天山地区の青銅器時代遺跡」と題し，外国人研究者が入り難い新疆での発掘成果をご報告頂いた。

２月，卒業論文，修士論文発表会および追いコンが行われ，学部では平井貴大氏，修士では梶佐古幸謙氏，富田啓貴氏が報告を行った。

日本中国考古学会九州部会

叢先生にご発表いただいた日本中国考古学会九州部会は，日本中国考古学会における３部会（他は，関東部会，中部部会）のうちの一つであり，年に４～６回程度，宮本先生によって開催される。宮本先生はじめ，研究員や大学院生の発表も多いが，叢先生や共同調査機関の諸先生のように，遠方からはるばるお越しの場合も結構な頻度である。文学部4階会議室で土曜日に開催される場合が多く，終了後は天神の懇親会場へという流れになる。2016年度開催の部会は以下で，会場はいずれも文学部4階会議室である（敬称略）。

第72回（2016年６月23日）

・上條信彦（弘前大学人文社会科学部）
「形態・DNA 分析からみた東北アジアのイネの拡散」

第73回（2016年11月18日）

・叢徳新（中国社会科学院考古研究所）
「ユーラシア視座における西天山地区の青銅器時代遺跡―阿敦喬魯を中心として」

第74回（2017年２月４日）

・宮本一夫（九州大学大学院人文科学研究院）
「2016年モンゴル国 Emeelt Tolgoi 遺跡発掘調査報告」
・米元史織（九州大学総合研究博物館）
「Emeelt Tolgoi 出土人骨について：形質的諸特徴とストロンチウム分析について」
・宮本一夫（九州大学大学院人文科学研究院）
「楊家圏遺跡水田探索のためのボーリング調査」
・小畑弘己（熊本大学文学部）
「遼東半島王家村遺跡の土器圧痕分析結果」
・上條信彦（弘前大学人文学部）
「照格荘遺跡の石器とその使用痕」

第75回（2017年３月28日）

・福田正宏（九州大学埋蔵文化財調査室）・M.Gablirchuk・國木田大・田尻義了・A.Shipovalov・M.Gorshkov・福永将大・夏木大吾・熊木俊朗
「アムール流域における先史遺跡景観の実態調査―ハバロフスク地方郷土誌博物館による地域文化資源保護活用への国際協力―」
・松本圭太（九州大学大学院人文科学研究院）

「北方系青銅器における紋様の展開」
・齊藤希（九州大学大学院人文科学府）
「中国初期王朝成立期の中原地域から長城地帯東部における土器動態」

日本中国考古学会は「日本において中国考古学研究者が協力して研究を進めるとともに，中国をはじめとする諸国の中国考古学研究者との交流を図ることを目的とする」学会であり，現在では駒澤大学に事務局がある。2000年代（つまり筆者の学生時代），この学会の事務局は，本研究室にあり，学会誌『中国考古学』の発送作業を学生総出で行っていたことが思い出される。

事務局移転後は，そうした作業はなくなったのであるが，それでも，研究室と本学会の関わりは深かったように思う。というのも，研究室には中国をフィールドとする学生，そして中国からの留学生（特に博士課程）が多く在籍し，彼らが最初に研究成果を発表する場が，九州部会，学会大会であり，『中国考古学』であったからである。特に留学生の場合，初めての外国語での報告であるから，その努力には大変なものがある。とはいえ，そのような事情を査読で酌んでもらえるはずはない。そこで，先生方，筆者，大学院生も含め，皆で内容のアドバイスや日本語の校正を行うこととなる。コミュニケーションのズレなどから，締め切り間近に慌ただしくなったことも少なくないが，出来上がった要旨集や雑誌を見てホッとする。『中国考古学』の号によっては，OB を含む本研究室のメンバーによる論考が殆どを占めている場合もあり，外国考古学の減少の中にあって，頼もしい気がする。

モンゴル調査

７月後半から８月初頭にかけて，研究室とモンゴル科学アカデミー考古学研究所との共同発掘調査が行われた。このプロジェクトは，宮本先生による海外調査としては，四川（東チベット）での発掘調査に続くもので，モンゴルは当年度が５回目である。モンゴルの青銅器時代の遺跡を主な調査対象とし，考古学と形質人類学を含む幅広い観点から当時の集団動態を明らかにしようとする試みである。2016年度はバヤンホンゴール県エメールト・トルゴイ遺跡の調査を，10日間の日程で行った。日本側からは，宮本先生のほか，田尻義了先生，福永将大氏，小澤義満氏と筆者が参加した。本年は増水で，渡川の際にジープで他車を牽引するなどの珍しい光景にも出会ったが，天候にも恵まれ，予定通りに発掘が遂行された。発掘報告はすでに，Miyamoto, K. ed. 2018 *Excavations at Emeelt Tolgoi Site.* として刊行されているので，そちらをご覧頂きたい。

モンゴル調査で本格的に導入することになったのが，電子平板である。モンゴルは大草原といっても，実は結構な起伏のある丘の連続であり，遺跡の分布もそれに関連しているため，平板測量は調査でも重要な位置を占める。2009年の四川調査時にも一部で電子平板を用いたが，測定・描線後の修正にかなり時間を要するものであった。従って，2009年の２つの発掘地点のうち１地点は手測りで，2010年の四川調査では手測りしか行わなかった。モンゴル調査で導入した電子平板は，トータルステーションから読み込んだ点を基に，自動で等高線を入れてくれ，なおかつそれほど修正に手間取らないものである。また，その都度，値と等高線データの確認が出来るので，設定・測定ミスも起こりにくい。特にモンゴルのような，２km 四方に遺跡が散布している状態を，限られた日数で記録するには極めて便利である。ただ，風のある時には，ステーショ

図62　モンゴル調査におけるラボ用ゲル（2016年８月撮影）

ン側とミラー側の互いのコンタクトが取れず，ミラー側の人間が，測定前に別地点へ動き出したりし，往生する。また，落雷には注意が必要で，雲行きが怪しくなると，せっかく設置したものを畳んで撤収である。カンカン照りかと思えば，急に雹が降ったりして，モンゴルの天気は変わりやすいのだ。電子機器の場合，最も怖いのが電源やケーブルの喪失，無線通信の不調であるが，予備製品を携帯して行くものの，その点で困ったことはない。特に電源についてはモンゴル側の手厚いサポートがあってのことである。

日本隊のほかモンゴル側の研究者，学生，運転手，料理人を合わせると，20名以上の大所帯である。参加者の食事・休憩場所，そしてラボとして欠かせなかったのが，ゲルである（図62）。モンゴル調査初年度はウランバートルで購入した大テントをこれらの用途に使っていたのであるが，２年目の強風で完全に破壊されたため，地元民からゲルを借りてもらうことになったのである。現場の１日目，柱と柵，覆いの革を載せた中型トラックがやってくる。それらをモンゴル隊が手際よく組み立ててくれる。博物館などに展示されているものと大体同じで，２本の中心柱が，天井として傘状に配置された支柱の先を支える仕組みである。柱はオレンジ色，天窓部分はロープで開閉できる。にわか雨が降ってくると，急いで天窓を閉める。湿度が低いモンゴルでは，ゲルの中にさえ入れば，快適に過ごすことが出来る。豪雨でもそうそう水は浸み込んでこない。夜半頃に丘から吹き降ろしてくる強風にも耐えられる。食事場として使用するゲルの壁，すなわち

柵には，捌いた肉がぶら下がっていて，羊を解体して間もない時には，虫よけのために牛糞を下から燃やす。テーブルにはいつも決まって，お茶，砂糖，ジャム，マーガリン，お菓子（飴・スコーンなど），そしてツァイ（ミルクティー）とお湯を入れたポットが置かれている。不思議なもので，数日もすればこういう様子が「現場ムラの景色」として皆の当たり前になっていく。現場が終わると，またどこからかトラックがやってきて，ものの１時間も経たないうちに本来の大草原に戻る。日当たりのせいで，ゲルの部分だけ円形に草の色が変わっているが，明後日にもなればそれも消えているだろう。

プレハブの引っ越し

移転に向けた作業も進んでいた。2000年代，箱崎文系エリアにおける研究室の資料保管施設としては，生協食堂（文系中門）付近の甕棺保管の倉庫，生協書店裏側（西門）の倉庫，北門横の発掘用具等を収めたいわゆる機材プレハブ，テニスコート前のいわゆる文化史プレハブがあった。これらのうち前２者の資料は，2000年代半ば頃に既に移動していたが，残りの施設の資料や機材に関しても，埋蔵文化財調査室および総合研究博物館の本館へ移動することとなった。文系学部の公用車（ハイエース）で，学生諸氏とともにパンケースや木箱を搬送した。搬出後，多くの什器に混じって重厚な金庫が発見され，業者の方に開錠を依頼した。立ち合われた事務の方と一緒にワクワクしていたが，意外とすぐに開き，中には何も残っていなかった。

公用車が出てきたのでついでに言うと，車が止められていたのは研究室の丁度裏（演習室）側で，研究室の棟と廊下，事務棟に囲まれた，比較的明るい中庭めいたところであった。ここは，研究室奥の階段を降りて，内側からのみ開錠できる鉄扉を出るとすぐの場所にあたる。この場所の事務室の側には水道があって，ここが格好のフローテーション（水洗選別）の場となった。事務室の勝手口側にコンクリートの小さな階段があり，そこも選別した遺物を乾かすのによいところだった。2016年度は宇木汲田遺跡の土壌サンプルがここで水洗された。建物の構造上，こうした庭のようなものが箱崎キャンパスにはいくつかあったが，いずれにも樹木や草があり，ある所には石灯籠が置かれていたりして，なんとなく雰囲気のあるものであった。

３．箱崎キャンパスにおける図書

研究室の日々の業務として，学生時代も含めて記憶に多いのは，図書関連である。研究室ですべての考古学の図書が管理されていたため，新着本の配架，学内外からの図書の貸借に対応する必要があった。このような状況の利点は，直ぐに必要な図書を閲覧できることにある。また，自分の研究分野以外の新着本や外国書籍に触れる機会が多く，様々な図書の装丁すなわち本の顔を覚えることになる。学業にとっては良いところもあったように思う。一方で，研究室での配架スペースが限界を超え，廊下への配架や旧工学部４号館への一部の移動で対応している状況であった。図63は，書庫の入り口から内部を眺めた写真であるが，棚のあちこちに平置きの本が挿入されているし，大きさの合わない本が出っ張るようにして配架されている。伊都キャンパスに移転して５年を経た現在，この写真を確認し，雑然ぶりに驚きである。しかし当時は研究室のメンバーにとって，当たり前の光景だった。このような状況で，一度使用した図書を元の位置に戻す

ということは，思いのほか実践が難しかった。スペースの関係で，一つ隣でも異なる棚に配架してしまうと，別の人が再度探し当てるのは容易ではない。こうして，貸借を含めた図書探しにかなりの時間が割かれていた。なお，研究室のメンバーおよび訪問者の貸借では，研究室入口近くのノートに記入し，図書館からの場合は借用書を保管することになっていた。

2016年当時の考古学研究室における図書の配置は大まかには以下のようなものであった。

研究室：九州全体，中国・四国・関西の一部の発掘報告書。比較的よく使用する事典・全集類

演習室：国内雑誌

整理室：海外雑誌

暗室：海外雑誌，自治体史，図録・論集（書庫からはみ出たもの）

図63　箱崎研究室書庫内部（2017年３月撮影）

撮影室：洋書（西・中央アジア）

廊下：新着の関東以北の報告書（理系棟に配架するもの），ニュースレター（ファイル綴じ）

書庫：以上の他すべて。図64は筆者の記憶を頼りに描いたものである。図64を見ただけでも，本研究室における東アジアをはじめとする世界的な研究の蓄積がわかるであろう。

研究室宛に届いた新着本・報告書は，整理室の中にある暗室に，うず高く積んだ状態で保管される。この本の山が崩れそうなくらいになると，水曜の実習後などの時間を利用して，報告書は地域別に分け，図書は分類記号を付記して（韓国語やロシア語は題名の翻訳），同じ２階にある図書係で登録して頂く（雑誌は１階にて登録）。しばらくすると，登録された図書が戻され，研

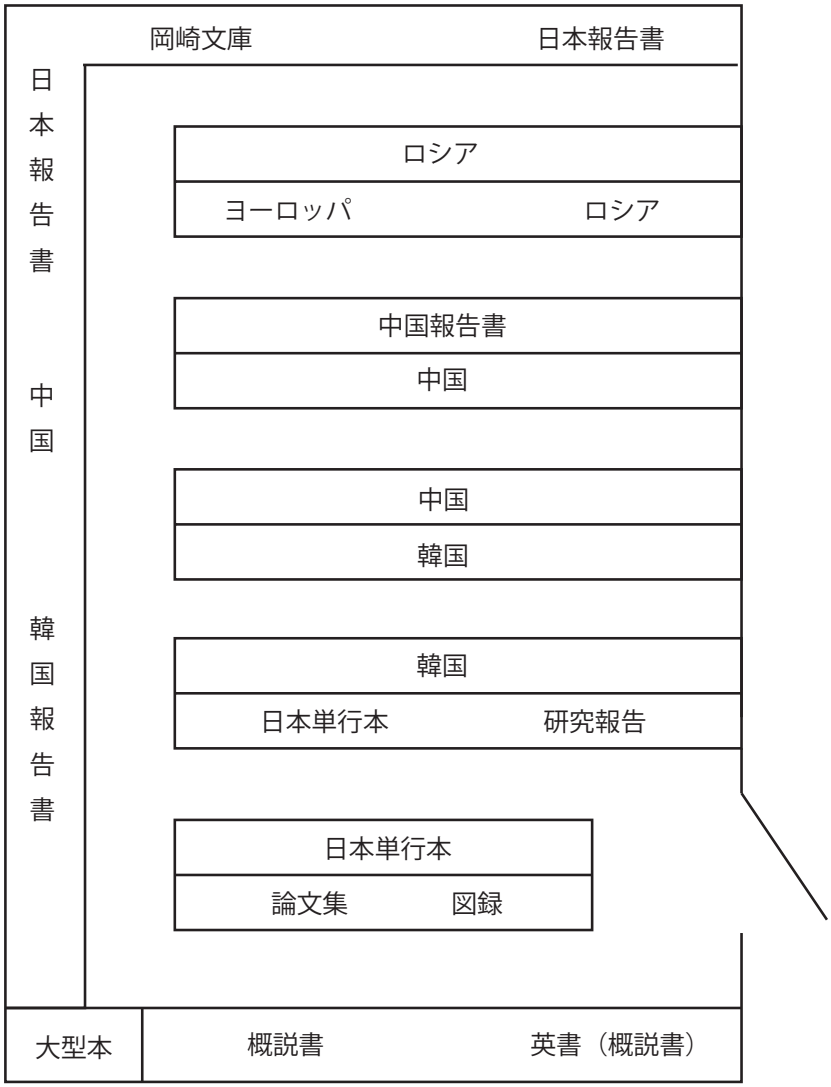


図64　箱崎研究室書庫内配架状況（2016年）

図65　箱崎演習室（2017年３月撮影）

図66　移転直前の箱崎研究室（2018年９月撮影・松尾樹志郎氏提供）

図67　移転直前の書庫（2018年７月撮影・松尾樹志郎氏提供）

図68　移転直前の陳列室（2018年９月撮影・松尾樹志郎氏提供）

究室に入って手前右側の「開かずの出入り口」の前に置かれたブックトラックにまずは配架される。雑誌を含めた新着本がここで閲覧可能である。１か月もすると，６段あるブックトラックはかなり埋まってくることになるので，それらを配架する作業になる。主に演習室を利用し，県ごと，記号ごとに机一面に広げてから，それぞれの塊を各自が配架していく。既にスペースがないところに配架することになるので，時によっては大掛かりな移動（あまり使用しないシリーズを別の奥まった場所に移動して，そのスペースを空けるなど）の必要が出てくる。そうした場合は，「◎－〇〇番以降は演習室の××」などと貼り紙をしておくのであるが，やはり元の場所を探したりして，見つからないと溢すこともある。「あの本ないんだけど，どこ？誰か使ってる？」は日々よく聞かれた言葉である。

複写については，教員以外は10円コピー機を利用することとなる。学内のコピー機としては，生協か中央図書館のロビーにあるものを使うが，枚数が多い場合は，文系西門を出て50m ほどのところにある一正堂にお邪魔する。pdf での論文やり取りが一般化する以前は，コピー機のところで研究室のメンバーによく会ったものである。

４．伊都キャンパスへの引っ越し

伊都キャンパスへの移転準備として，筆者が関わったのは，上記のプレハブの引っ越しに限られるが，2016年度の在職中の冬頃には，演習室の雑誌を中央図書館１階に移動する作業が，図書館職員の方々によって行われていた。図65の演習室の写真で，書架にかなりのスペースがあるのは，そのためである。キャンパス移転の2018年における以下の時系列は，当時学部生であった松尾樹志郎氏（現，地球社会統合科学府博士課程）より聞いたものである。

３月，文系合同図書室が閉室。４月には上記の「新着本の暗室での保管」がなくなり，届き次第，２階の登録係へ持っていくことになる。

６月16日，九州大学考古学研究室60周年記念講演会・祝賀会が開催。

７月，図書の移動が開始。図書館職員の方々によって行われ，同月半ばには一部の報告書を残し，書庫は既にカラになった（図67）。

８月初旬，踊り場のロッカーを整理。卒業生の物品等が残っており，該当者に連絡したりしたそうである。同月８日，文系合同図書室の裏庭にあった三宅の箱式石棺を，移転のため実測。

８月，陳列室の遺物の梱包，運び出しが業者によって行われた。同月のオープンキャンパス時にはかなりの資料が移転されていた（図68）。

８月31日，研究室前のロッカーを含めた全体で，新キャンパスに移転するもの，廃棄するものを選別。廃棄分は廊下に全て出す。実測道具をはじめとする移転する物品は，段ボール10箱程度にまとめられた。

９月３日，パソコン梱包など，箱崎での最終作業と，業者による運び出し（図66）。

９月５－６日，伊都キャンパスで段ボールの開封，備品設置。８月末から９月初旬にかけての引っ越し作業では，主に，箱崎地区に住んでいる学生が搬出を，伊都付近に居住の学生が新キャンパスでの設置を手伝ったということである。なお，９月７日には箱崎研究室の丁度下にあたる部分で火災が発生したが，すべて搬出後であった。

箱崎研究室の備品のうち，スチール製の書類ロッカーなどは経年のため廃棄処分となったが，トレース台や引き出しのスチール道具入れはもちろん，踊り場にあった「ハニワ」や円盤型の文鎮に至るまで，多くが伊都に引き継がれている。また，重厚な木製机や書架の一部は，総合研究博物館にて保管されている。

５．伊都キャンパスの研究室と図書

伊都キャンパスの考古学研究室（文学部・人文科学研究院）は，６階に位置し，比較社会文化研究院の研究室と同階になる。箱崎における研究室，演習室，整理室，撮影室，陳列室，機材倉庫にほぼ相当するそれぞれの部屋（伊都では，上記の順に，研究室，演習室，実験室，分析・記録室，資料室，機材・資料準備室とされている）によって構成されており，設備が新しくなったほかは，それほど違いはないと思う。ただし，学生の動きはやや変わったようである。箱崎では，研究室や整理室には殆ど常駐の大学院生がおり，席も大体が固定化していた。そのため，多くの学部生は日常的に演習室で作業を行っていたと記憶している。一方で，伊都では殆どの学生が研究室で作業しており，演習室や実験室を利用する者は少ない。理由はよくわからないが，箱崎のように書架が立て込んでいない分，研究室の作業スペースが広く，明るくなったことも一因かもしれない。とはいえ，演習室や実験室は実習を含む授業はもちろん，オンライン発表などでも重宝されている。

移転で大きく変化したのが，図書の取り扱いである。箱崎研究室に配架されていた登録のある図書は，全てが中央図書館へ収蔵された（図69）。見たいと思った報告書や雑誌が，思い立って数秒ないし数十秒後に（たとえ深夜でも！）見られる，という環境ではなくなったが，メリットの方が随分大きいのではないかと思う。まず，図書の受け入れから配架，という研究室挙げての一大作業の必要がなくなったことである。多くの図書は図書館で直接受け入れられ，研究室に届いた少数の書籍も，登録をお願いするだけで，こちらで配架しなくてもよい。もっとも，研究対象外の書籍に触れる機会の減少という点では残念ではあるが。もう一つは，紛失の心配が著しく減少したことである。上記のように，本来の配架場所を違えた結果，何時間も探さなければならないといったことは，もはや起こらない。

現在，研究室に配架されている資料は，重複していた未登録の中国雑誌（文物・考古など）である。CNKI（中国学術情報データベース）が導入され，各報告・論文の pdf 版が入手可能になってからは，これらの雑誌が大量に机上に積まれている光景も見なくなってしまった。しかしながら，紙媒体があれば何となく安心できることは否定できない。なお，本記録集が出版される頃には，演習室，実験室，分析室の書架に宮本文庫が設置される予定であり，研究室の蔵書は一層充実したものになるであろう。

６．コロナ後の研究室

筆者が伊都で再び助教として着任した2022年初頭は，まだコロナ禍が続いていた。研究室の行事は，歓送迎会を含むかなりの部分が中止または縮小となり，オンライン授業となったため，訪れる学生もかなり少ない状況にあった。2022年度以降，徐々に対面授業が復活し，実習も対面に

図69　中央図書館考古学図書収納状況（2023年７月撮影）

て行われるようになった。この状況で加速化したのが，東亜考古学会による原の辻遺跡資料の整理作業である。東亜考古学会の最後を飾る壱岐島調査の一環として行われた，４年にわたる発掘資料であって，完形の美しい土器も多い。2022年度の学部３・４年生に一部は実習として，一部はアルバイトとして，当該遺跡の土器・石器実測およびトレースを行ってもらった。当年度以前の積み重ねがあったとはいえ，数百点もの図面が短期間で仕上がったのは，彼らの功によるところも大きい。原の辻遺跡の報告書は2023年７月，最後の調査から62年を経て刊行された。

また，国内外の調査も2022年から徐々に復活している。筆者が携わったものは，いずれも宮本先生を隊長とする，2022年度および2023年度のモンゴル調査と，2022年度の京都調査である。2022年度のモンゴル調査は，コロナ禍の２年間の中断を挟み，７月末から８月上旬の日程で行わ

れた。2019年に一部を発掘したザブハン県アブダライ・ヒャサー遺跡を継続調査し，５基の墓葬と２基の祭祀遺構を発掘した。この時は日本帰国時（正確には，現地空港搭乗時）に現地で取得したpcr陰性証明書が必要であり，発掘中にもその話題が飛び交っていた。現場からウランバートルへ帰還後，ホテルから徒歩５分程度の病院で朝，検査を受けた。その日は発掘資料の整理のため，科学アカデミーで一日作業していたが，夕方に通知が来るまでは皆ドキドキであった。幸い，日本隊全員が陰性であり，日程通りの帰国が叶った。

2023年度のモンゴル調査はモンゴル西北部（オブス県など）の遺跡踏査であった。南シベリアに類似する墓制など，これまでの発掘調査成果で明らかにしてきた，西方との繋がりを検証していく上で重要な遺跡・遺構を見学・記録した。国境警備隊のゲート内部の踏査地点からは，ロシアの街が遠望できた。見学の交渉に少々時間がかかり，昨今の国際情勢もあって多少緊張したが，隊員の方々はフレンドリーで，遺跡の空撮も行うことが出来た。本年に至る，考古学研究室による15年間のモンゴル調査の総括として，2023年12月から2024年３月まで，「モンゴル高原の牧畜社会の始まりを探る―九州大学海外発掘調査の記録―」が九州大学総合研究博物館フジイギャラリーにて開催された。

京都調査は，宮本先生はじめ，松尾樹志郎氏（地球社会統合科学府博士課程），今村竜平氏，松村祐奈氏（学部４年生）とともに，京都大学文学部陳列館にて，将軍山積石塚（遼東半島・青銅器時代）の遺物整理調査を行ったものである。期間は2022年11月末からの４日間と，2023年２月の４日間である。この調査は，宮本先生の学生を伴う遺物実測調査として久々である。博多を朝出発し，車中で昼を済ませて，地下鉄とバスを乗り継いで正午頃には陳列館に到着，そこから夕方まで，翌日以降は朝から夕方まで，昼食以外はひたすら実測である。夜は，卒業生との食事会が行われることもあった。学生の一人は「想像していた調査とだいぶ違いました…」とのことであったが，なかなか得難い経験をしたと思う。

冒頭に記したように，筆者は考古学研究室専属というわけではなく，重要な研究室行事について述べることが出来なかったことは残念であり，申し訳なく思う。また，筆者の専門領域は外国であり，海外調査や図書関係に自ずと話題が集中してしまったことについてもお詫びしたい。

最後に，歴代の諸先生，諸先輩によって蓄積された考古資料，そして図書は，考古学研究室の顔であって宝である。考古資料の方は教員による管理がかなり厳重である一方，学生がアクセスしやすいのは図書である。遺物はもちろん，図書とどのように付き合うかで学生生活は大いに替わってくるであろう。本論を執筆しつつ，そう感じた次第である。2023年盛夏，学生・教職員のマスクも外れつつあり，今年は追いコン，新歓コンパも復活した。新しく，利便性が高まった環境で，資料が深く活用されていくことを祈念したい。

第９章　九州大学考古学研究室の記録（2019年２月以降）

１．新入生歓迎考古学談話会

第21回：令和元年度（2019年４月13日，於伊都キャンパス E-C-203会議室）

齋藤　瑞穂（九州大学）「先史時代の地震と津波を「考古学」する」

小澤　佳憲（九州国立博物館）「朝鮮式山城を掘る―大野城築城・繕治の謎への挑戦―」

第22回：令和4年度（2022年４月29日，於伊都キャンパス E-C-203会議室）

福永　将大（九州大学）「九州縄文後晩期社会と縄文農耕論」

板倉　有大（福岡市埋蔵文化財センター）「九州大学と福岡市での考古学」

第23回：令和５年度（2023年４月29日，於伊都キャンパス E-B-112教室）

長谷川桃子（久留米市文化財保護課）「文化財行政への就職―６年目職員のこれまでとこれから―」

辻田淳一郎（九州大学）「桂川町教育委員会と九州大学考古学研究室との共同調査十年―遠賀川上流域における古墳時代の研究―」

２．卒業論文・修士論文発表会

平成30年度（2019年２月9日，於文学部4階会議室）

（卒業論文）

内田　千種「良渚文化の玉製頭飾類の変遷と展開」

下釜菜々子「九州における銅製経筒の出現と展開―11・12世紀の資料を中心に―」

宗田　結衣「前期古墳の方位と立地に関する研究」

土居　隼人「九州・南西諸島における滑石製石鍋の流通と消費」

中野　真澄「弥生時代終末から古墳時代初頭における外来系土器の受容と展開―有明海沿岸西部地域を中心に―」

柱　　七彩「群集墳における須恵器の供献とその意義―博多湾沿岸地域を中心として―」

松尾樹志郎「西日本における大形石庖丁・大型直縁刃石器の変遷とその意義」

山地　優輝「弥生・古墳時代における準構造船の出現と展開」

吉原　　萌「朝倉系初期須恵器の出現と展開―池の上・古寺墳墓群と朝倉古窯跡を中心として―」

（修士論文）

薮　　遥菜「日本列島出土の金銅製冠の変遷と系譜」

令和元年度（2020年２月11日，於伊都キャンパス E-C-203会議室）
（卒業論文）
足達　悠紀「土器からみた古墳時代後期における地域社会の変容―博多湾沿岸から有明海沿岸北部を中心に―」
大河　巴奏「防長産緑釉陶器の流通と消費―消費地・北部九州を中心に―」
亀川　微香「古墳時代後期・終末期における耳環の変遷とその背景―博多湾沿岸地域と近畿地方中央部を対象として―」
中島渉太郎「日本における円面硯の出現と展開―北部九州を中心に―」
森田　雄士「九州の縄文時代における貝輪の変遷―素材貝と法量から―」
（修士論文）
張　　宇「鼎からみた新石器時代の山東地域における地域間関係」
星野　宙也「土器からみた水稲農耕文化複合導入・定着に伴う社会変化―弥生時代中期東海・南関東地域を事例に―」

令和２年度（2021年２月14日，Zoom によるオンライン開催）
（卒業論文）
坂上　義実「弥生時代の土笛の変遷」
坂ノ上奈央「トロトロ石器の広域分布現象と機能について」
田中佑希乃「律令期の西海道諸国における墨書土器の様相―筑前・筑後を中心に―」
出見　優人「古墳時代後期における鉄鏃の生産と流通―北部九州を中心に―」
唐　　尚暉「九州における埴輪の終焉とその背景―北部九州を対象に―」
永島さくら「黄河中流域の龍山文化後期から二里頭文化期の土器編年―河南中部地域を中心に―」
諸岡　初音「装飾古墳からみた古墳時代後期における地域間関係とその変遷―北部九州を中心に―」
山田　　樹「西日本における縄文時代草創期の狩猟具の変遷―有舌尖頭器を中心として―」
（修士論文）
内田　千種「良渚文化の副葬土器からみた地域性と変遷―良渚遺跡群と周辺地域を中心に―」
鈴木　沙弥「ユーラシア草原地帯における帯飾板の始原と展開」
中野　真澄「弥生時代後期から古墳時代前期における土器動態からみた地域社会の変動：北部九州を中心に」
松尾樹志郎「弥生時代後半期における収穫具・除草具の変化とその背景―西日本を対象として―」
山下　理呂「弥生時代における弓矢使用の実態」

令和３年度（2022年２月11日，Zoom によるオンライン開催）
（卒業論文）
佐久間　慧「奈良三彩の分布とその背景―唐三彩との比較検討を加えて―」
進藤菜々穂「土器からみた九州弥生時代後期の地域間交流」

日髙風海斗「古墳時代中期における鉄剣の生産と流通―全国を対象に―」
森　　春奈「古墳時代後期における玉類の消費形態とその背景―北部九州と奈良盆地の比較から―」
（修士論文）
足達　悠紀「律令国家形成期の須恵器生産体制―６世紀後半から８世紀初頭にかけての北部九州の諸窯跡を対象に―」
植野　律子「大型植物遺体からみた植生および植物利用の変化―縄文時代晩期から弥生時代の西日本を対象として―」
中田　風歌「長城地帯東部における青銅短剣の変遷」
蓮田　賀子「ヒトの下顎骨の解剖学的非対称性とその要因に関する考察―現代日本人人骨のメッシュモデルを対象とした幾何学的形態測定学の応用―」

令和４年度（2023年２月11日，於伊都キャンパス E-B-112教室・Zoom によるハイブリッド）
（卒業論文）
今村　竜平「下関要塞における煉瓦の供給とその背景―刻印と法量の検討を中心に―」
笠屋　佑輔「縄文時代における西北九州型結合式釣針の変遷と機能」
瀧内　更朝「宗像大社辺津宮正面神門の狛犬の考古学的検討」
田渕　朱莉「頭蓋の顔面部形態からみた古墳時代九州の地域社会」
中原　佳佑「中世琉球王国における青花磁器の流通と消費―一部近世・近代分布を加えて―」
松村　祐奈「文様構成からみた九州における装飾古墳の変遷とその背景」
矢崎　空音「縄文時代中期・勝坂式土器の分類と編年―井戸尻遺跡群を対象に―」
（修士論文）
津久井　駿「越窯系青磁碗の分類と編年―越窯の標識遺跡寺龍口窯址出土品の分析と甌窯・台州窯・懐安窯の青磁，初期龍泉・「同安窯系」青磁０類についての考察―」
出見　優人「鉄製武器の流通・消費からみた古墳時代後・終末期における地域編成」
Stephen Nguyen, A Biomechanical Study of the Transition from Foraging to Agricultural Activities in Prehistoric Japan using Cross-sectional Geometry of the Femur

令和５年度（2024年２月11日，於伊都キャンパス E-B-112教室・Zoom によるハイブリッド）
（卒業論文）
栗原悠里子「箱崎遺跡出土人骨の齲歯の分析からみた江戸時代人の健康状態」
重石　拓郎「西日本における前方後方墳の出現と展開―墳丘形態を中心に―」
野村　華鈴「瓦からみた筑前の古代地方寺院の変遷とその背景」
藤岡　実優「眺望分析からみた瀬戸内地域古代山城の築城の目的とその背景」
渡邉　　響「西日本における馬形埴輪の馬装・形態とその背景―岩戸山古墳出土例の馬装復元を中心に―」

（修士論文）

日髙風海斗「古墳時代前・中期における鉄剣の生産・流通とその変遷」

森　　春奈「古墳時代後期・終末期における玉類の流通・消費形態とその背景」

３．九州大学考古学関係博士号学位取得者

2019年（平成31年）３月　戴　玥『ユーラシア草原地帯東部の初期騎馬遊牧文化の展開過程』（主査　宮本一夫）文博甲第227号

2019年（平成31年）３月　福永　将大『縄文時代後期における社会構造の研究―広域土器分布現象と「縄文文化の東西差」の検討を通して―』（主査　宮本一夫）地球社会博甲第21号

2022年（令和４年）３月　譚　永超『殷周時代における長江中流域の青銅器文化の形成と展開』（主査　宮本一夫）文博甲第257号

2022年（令和４年）９月　James Loftus『Quantifying Social Learning Strategies, Ceramic Specialization, and Idiosyncratic Style: A Geometric Morphometric Examination of Yayoi Period Earthenware, Japan（社会学習戦略，土器専門化，特異様式の数量化的研究：日本弥生土器の幾何学的形態学的研究）』（主査 溝口孝司）地球社会博甲第76号

2023年（令和５年）９月　白　楊『Pottery specialization, social organization and the origin of early state: the comparison study between Taosi Culture and Erlitou Culture（土器の専業化，社会組織と初期国家の起源：陶寺文化と二里頭文化の比較研究）』（主査　宮本一夫）地球社会博甲第89号

2024年（令和６年）３月　李　寧『青銅武器からみた東周代長江中下流域の地域社会の生成と展開』（主査　宮本一夫）文博甲

2024年（令和６年）３月　主税英徳『高麗陶器の生産と消費の研究』（主査　宮本一夫）文博乙

2024年（令和６年）３月　板倉有大『九州縄文時代における資源利用技術の研究』（主査　宮本一夫）地球社会博乙

（編者注：日付は授与年月

文博：人文科学府，地球社会博：地球社会統合科学府

甲：課程博士，乙：論文博士）

４．野外調査（2018年以降）

・福岡県桂川町天神山古墳：発掘調査　2018年９月11日～９月23日（辻田淳一郎）

・アブダライ・ヒャサー遺跡：発掘調査　2019年８月10日～８月22日（宮本一夫・松本圭太・福永将大）

・福岡県桂川町天神山古墳：発掘調査　2019年９月11日～９月23日（辻田淳一郎）

・福岡県桂川町天神山古墳：発掘調査　2020年９月11日～９月22日（辻田淳一郎）

・アブダライ・ヒャサー遺跡：発掘調査　2022年７月30日～８月11日（宮本一夫・松本圭太・福永将大）
・福岡県桂川町天神山古墳：発掘調査　2022年９月９日～９月22日（辻田淳一郎）
・福岡市元岡古墳群Ｌ群：測量調査　2023年２月13日～２月20日（辻田淳一郎・田尻義了）
・福岡県桂川町大平古墳：測量調査　2023年９月８日～９月15日（辻田淳一郎）

５．出版物

・『九州大学考古学研究室の記録Ⅱ―考古学研究室60周年記念―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室，2018年６月
・*Excavations at Emeelt Tolgoi Site: The third Report on Joint Mongolian-Japanese Excavations in Outer Mongolia.* Department of Archaeology, Faculty of Humanities, Kyushu University, 2018 December
・『東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室，2019年３月
・『宇木汲田貝塚再整理調査報告書』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室，2021年３月
・『壱岐原の辻遺跡―東亜考古学会壱岐原の辻遺跡調査報告書Ⅱ―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室，2023年７月
・*Excavations at Avdalai Khyasaar Site: The fourth Report on Joint Mongolian-Japanese Excavations in Outer Mongolia.* Department of Archaeology, Faculty of Humanities, Kyushu University, 2023 December

九州大学考古学研究室の記録Ⅲ
― 考古学研究室65周年記念 ―

発行日　2024年３月９日
発行所　九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
印刷所　有限会社九州コンピュータ印刷